

美文韻文

黃菊白菊

文士大町桂月作



5

10

15

20

美文
韻文

黃

菊

白

菊

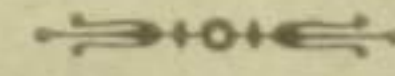
全

東京博文館藏版

版八拾第

文韻文美

菊白菊黃



大町桂月氏の文は、蠻貊を動かすも已に久し
悲慨の聲を發しては、秋風の老松に激するが
如く。哀痛の音を吐きては、孤猿の幽澗に叫
ぶが如く、句々血を吐き、字々珠を綴る。麗
くして沈痛、優にして豪宕、洵に是れ一代の
才筆、文壇の珍品、一讀すれば人の思を清く
し、感情を純潔ならしむ。美文と韻文とを學ぶ
者の模範、なす 足る。讀書家の燈下、この
絶好可憐の冊子なかるべかず

美文韻文

黃菊白菊

文士大町桂月作



美文韻文

黃菊

白菊

全

東京博文館藏版

全

東京博文館藏版

第八拾版

美文韻文

黃菊白菊

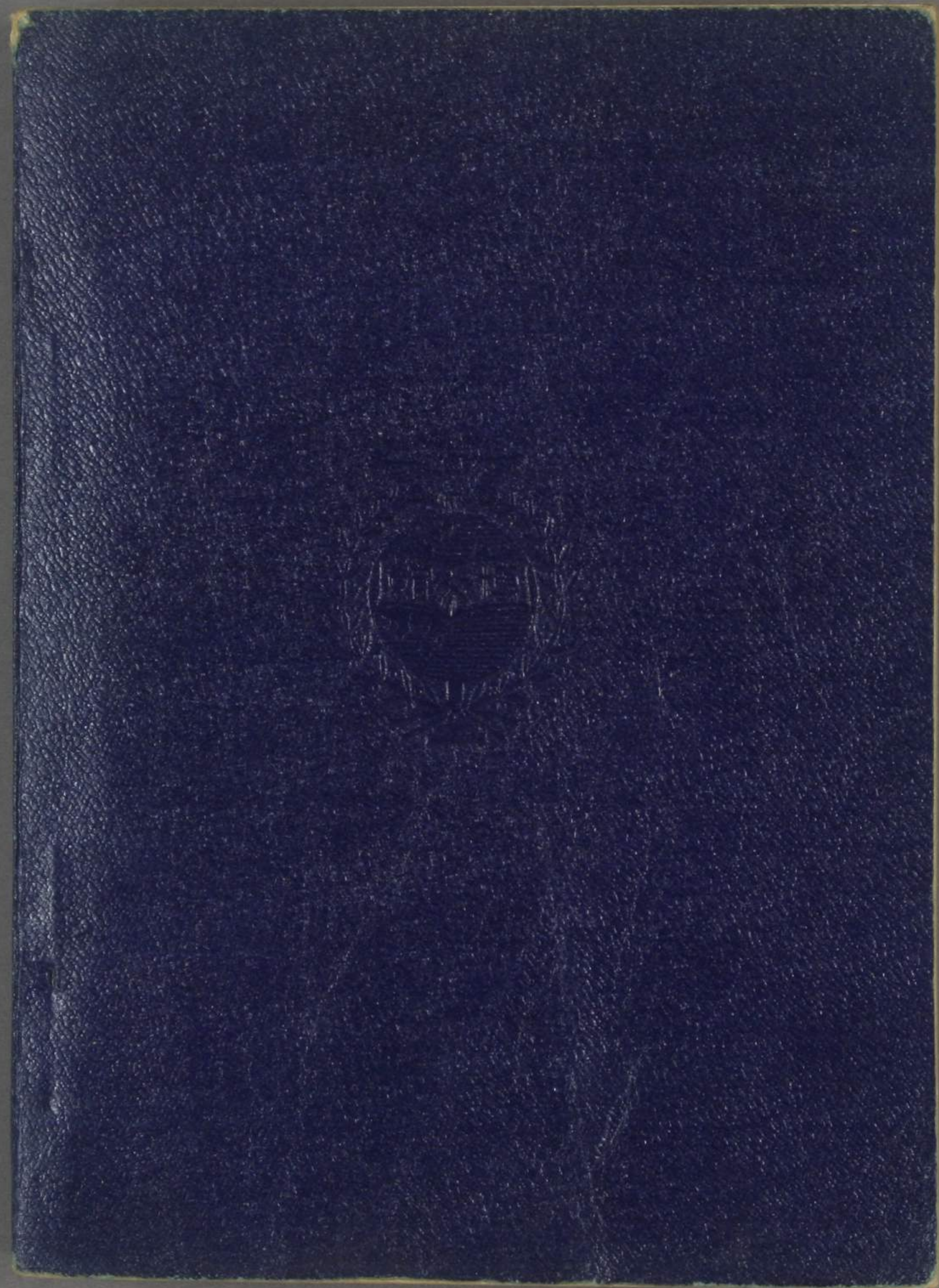
大町桂月氏の文は、變拍を動かすも已に久し
悲慨の聲を發しては、秋風の老松に激するが
如く。哀痛の音を吐きては、孤猿の幽淵に叫
ぶが如く、句々血を吐き、字々珠を綴る。麗
くして沈痛、優にして豪宕、洵に是れ一代の
才筆、文壇の珍品、一讀すれば人の思を清く
し、感情を純潔ならしむ。美文と韻文とを學ぶ
者の模範、なす 足る。讀書家の燈下、この
絶好可憐の冊子なかるべからず

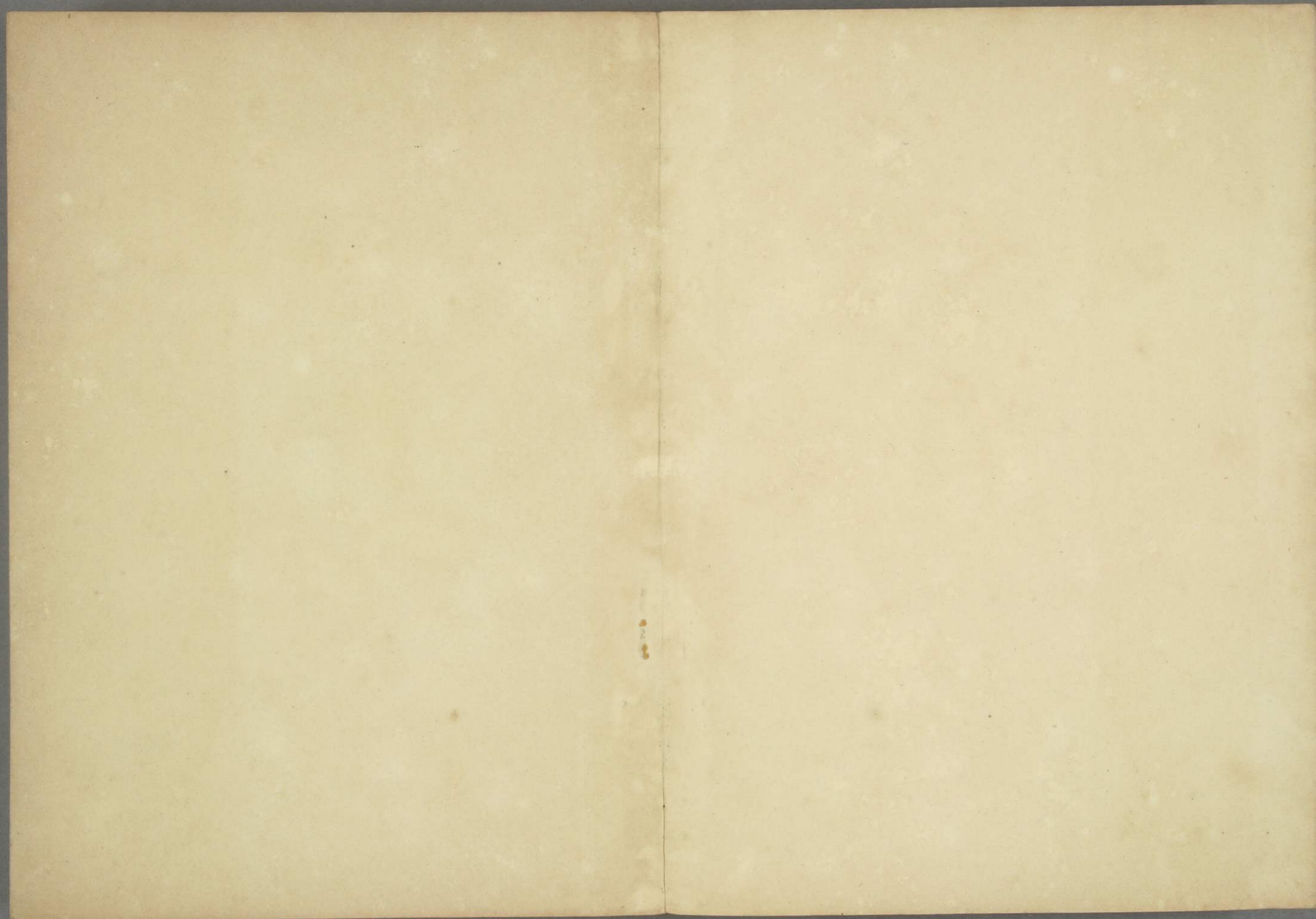
文韻文美

菊白菊黃









美文
韵文
黄菊
白菊

序

名山に藏するに足るべき名著にはあらねど、
むなしく蠹魚の餌とならむも、さすがに口惜
しくて、羽衣、雨江二子と共に、美文韻文をあつ
めて、花紅葉一部を梓に上し、は、已に二年の
むかしとなりぬ。爾來、われは筆を把ること虚
日なけれど、自から好める美文、もしくは韻文
の作は、いと少なし。讀者またその何の故たる
を問ふこと莫れ、こゝに、花紅葉に洩れたるも
のと、そのうち新に作りたるものとを集めて、

(二)

黄菊白菊と名づけぬ。多くは已に冊子、もしくは雑誌に出でたるものなり。而して、この三四年の間、余がものしたる美文韻文は、花紅葉と黄菊白菊とに盡く。國家の盛衰と死との二篇は、やゝ美文の範圍を脱せるが如くなれども、もとたゞ感情を攄へたるものにて、理を説きたるものにあらねば、美文としてこゝに收めたるなり。

明治三十一年十月

桂月漁郎

序

黄菊白菊目次

(一) 次 目

照る日の光	頁數
鐵槌	一
月譜	四
波の花	二五
加藤清正の告別	三二
佛濱の月夜	三七
夢野の鹿	四七
地藏堂	五三
わが涙	六九
畫ける美人	七六
	八七
	八九

胡蝶……………九四

御嶽めぐり……………九八

山の影……………一一八

いさゝ川……………一一九

花ざくら……………一二〇

やつれし姿……………一二一

猿塚……………一二七

松杉問答……………一四八

睢陽城……………一五一

女ごゝろ……………一六九

柳の糸……………一七一

かたみの言葉……………一七二

國家の盛衰……………一七八

をとめ子……………一九一

涙の味……………一九四

かた袖……………一九五

今日限りの命……………二四一

春の夕暮……………二四六

死……………二四八

寶車……………二六〇

淺間山のひと夜……………二七二

海嘯……………二八八

黄菊 白菊

照る日の光

大町桂月作

てる日の光 さきだてい、
あさはみ空に さけぶらく

眠をさませ 朝風に

起きよ、浮世のいとなみに。
昨日は水と 逝きにけり。

春駒	二九六
雨奇録	二九八
今宵の情	三〇九
小春日和	三一〇
旗手	三六五
南朝の名花	三七一
風流鳴	三八二



たのめ来らむ
 後の世を。
 浮世はかりの
 かさやどり。

神はしづかに
 病の床に
 おとづれて、

泣くなすぎにし
 罪とがに
 土にかへせよ
 そのむくる。

たのめ来らむ
 この春を。

世にのびいでよ
 いさましく。
 夢のあと、

芽ざす草木ど
 もろとも。

春はみ空に
 霞をよもに

くばらせて
 聲すらく、

たのめ来らむ
 今日の日を。

鐵 槌

ひと夏ふりつゝいさし雨ふしぎにも小止みしたれどなほ泣
 くが如く曇れる大空のわづかばかりなる隙間をもとめて
 洩れくる旭日のひかりおぼつかなげに金鷄山の一角を射
 て妙義山のこなたは狭霧なほふかく立ちこめたる曉しづ
 かに金鷄左に高く天をつらぬき妙義右に北斗を支ふる間
 の名も中の岳とて鼎立の勢いさましく雲をとびらに代へ
 たる四個の石門ふかく浮世をへだてたる處なれどもなほ
 民のなげきを分てるにや削り成せる巉壁の下にやせて見
 る影もなく戀する少女の涙よりも清き露の白玉ひときは
 滋くおきわたせる山百合の花ふみわけて石門を出づる一

人の男の大模様染めいだせる單衣一枚の姿もかるやかに
 襟元くつろげて胸毛こゝろよく朝風にゆらぐさま見るか
 ら逞しく頬は赤く眼は鋭く一癖あるべき面魂のたゞなら
 ぬに博浪沙の昔のしのばるゝ大なる鐵槌ひとつ腰につけ
 たるも怪しや

第一の石門より村に出づるには險しき處なくたゞ足先仰
 くばかりの凸凹につれてうねくと熊笹の繁れる中を蛇
 行する一條の細徑一里餘り歩みてはや妙義山のふもとに
 來れば眼界とみにひらけて手に取る如く見ゆる脚下の村
 々今はあさげの時なれど飢饉のかなしさは炊烟の上れる
 家とてはなく鴉だに鳴かぬ山村の曉寂しく月頃の陰雨に

山氣、夏よりも冷かに肌にしみて、時は夏ながら漸々として
 なほ寒く、高根よりおろす風に、梢うちふるひてはら／＼と
 こぼるゝ名残の露、滋くして浮世につゆけからぬ隈もなし。
 田の面には穂だに結ばぬ、稻枯れて半は水に没し、畑に植ゑ
 たる瓜は蔓腐りて、根ながら萎めり、路のかたへに犬のいた
 く吠ゆるを、何事にかと立ちよれば、あはれや、餓に倒れたる
 人の屍駭を、天の與へとよろこび勇みて、これも餓に死なん
 とする瘦犬の、よりてたかりて、牙ならして、噛み食ふさま、す
 さましく、その中に力すぐれたり、と見ゆる、大犬他の群犬を
 おしのけて、われ獨り腹を肥さむとする、勢の鋭きに辟易し
 て、尾をまきながらなほ涎を流して、近寄るをきつと、睨みか

へして聲高く呻りつゝ、こゝろよげに飽食するさまの、にく
 らしければ、おのれといひさま、下駄はきたるまゝの、足あげ
 て、その横腸したゝかに蹴たるに、悲鳴の聲長く、尾と共に曳
 きて、二三間に、びけるが、またふりむきて、牙をむきだし、
 脊中の毛を、さかだて、飛びかゝらむとする、餘勇は示せど、
 さすがに敵手の強過ぎるを、悟りて、しばし、思案の末、俄かに
 横腹の痛さを、思ひ出したるが、如く、またも、悲鳴の聲を、あげ
 て、残りをしげなる一瞥を、屍骸の上に、送りたるまゝ、焔々と
 し、て、にげゆく、あとより、側杖くはぬうち、に、言ひあはした
 るが、如く、罪なき、他の犬までも、うちつれて、走り去るを、冷か
 に見送りつゝ、巨巖のゆるぎ出したるが、如き、足元たしかに、

のそり／＼と歩む行手に、五六人の小供、よろ／＼と這ひ出で、その旦那さまどうぞお慈悲に、難義の者へ、一文めぐんでやつて下さりませと、貧が教へたる物乞ひの言葉、しほらしく、餓に聲まで瘦せほそりたるも、大飢饉のあまりと、そゝろに涙を催し、財布より鳥目とり出して、それ／＼小供に分ち與へ、その喜べる顔を見て、小供衆、少し頼みがある。家へ還つて、親ぢなり、兄なりに、用事があるから、こゝへ來いと云うて呉れよ、頼んだぞと、聲やさしく言へば、さすがに餓ゑても、小供は小供だけに威勢よく、一人が駈け出せば、他のものもつゝいて駈け出すはづみに、一人の小供つまづきて倒れて、わつと泣き出す。男走りよりて抱き起せば、その顔を見て、身

をふるはして泣く、おれの顔はな、こはさうに見えても、何も取つてくはうとは云はぬ、泣くな、な、男の兒だとすかす。手元より抜け出で、他に遅れじと、又もかけ出しぬ。水呑百姓の腰も軽く、鉢巻片手に、幾たびか頭をさげて、へい／＼さきはどは、小供のものへ大枚のお金下され、難有う存じます。へい／＼ことしの大飢饉にはよわりはてました。わたくしの所では幸にみな生きて居ります。が、となりの隠居どのは、くたばつてしまひ、そのまたとなりでは、くふに食ひかねて、夫婦別かれをして、やつと乳離れをしたばかりの男の子が、毎日泣いて居るといふやふな始末で、この界限はどこも目があてられず、それにお上からのお施しといふ

ものは、ひとつもなく、われらは何時うゑて死ぬるやら、まことに心細うござりますると、うゑても、ものんきな癖はうせず、長たらしく饒舌りつゝくる處へ、一人來り二人來り、つゞいてまた四五人、さきの小供の親たちの外に、何事の起りしかども、ものずきに出かけしものありて、集れるもの都合十五六人に及べり。

恨を帯びたる目元に、一揆の旗あげかねまじき様子は見ゆれど、餓にやせほそりし腕にはもはや竹槍提ぐる力もなく、骨と皮とのみなるからだに、衣とは名ばかりなるほろをまどひ、藍よりも青き顔、つもれる垢に古色を帯びて、さながら木像の如く、喉はやせて張子の虎の頸よりも細く、亂髪に大

さを加へたる頭を支ふるも、おぼつかかなげあるに、この世がらなる餓鬼道の苦みを見る心地のみせられて、慰めむとする聲も自ら沈み、これはみな人の衆、御苦勞に存ずる。就ては拙者の所存、ひと通りお聞き下され。拙者もとより此地に縁もゆかりもござらねど、この夏以來の長雨に、日の目一度も拜むだことなく、稻も麥も野菜もくさりはて、こゝもかしこも飢饉と聞くが中に、わけて妙義山下一帯の土地は、目もあてられずとの噂にたがはず、まことに何とも申様のなき有様、これまでの御難義、重々御察し申す。さりながら、狭いやうでも、廣きは世の中、一方には金錢つき、食物つきて、餓死する人があつても、一方には、米を山ほど倉に積むて、小判のもち

ぐさりする人もあり、連は廻りもの、融通はどうにもつかう
 ほどに、浮世はまだ失望したもので、もござらぬ。拙者はから
 ず、茲へまいりましたからは、及ばずながら一肩入れてみま
 せう。さるにても憎きは、浮世の有福長者にこゝと笑ふ中
 にも、金の勘定腹には絶えず、欲より凝りかたまつた躰に、血
 といふものはなく、目尻さげて涎たらすことは、あれど、涙を
 こぼしたるためしなく、人情はお人よしのもの、義理は
 馬鹿正直者のすること、人を倒しても、おれの利徳をはか
 るが當世とすましこみて、恥も知らねば道理もわからず、ど
 りけだものに劣りたる根性も、平生ならば、大目に見てやれ
 ど、この大饑饉に餓死する人を、よそに見てとりあはず、おの

れひとり旨い物くうて、人らしい顔して居るのが、氣にくは
 め。學者、お師匠さまなどが、やれ仁義だの、子のたまはくだの
 と、口を酸くして説いた處で、汚れた人の耳には、蚊がひとつ
 ぶんどいふほどのきゝめも見えず、ふる板にくぎはきかず、
 腐れた世の中には、荒療治も時にとつての方便、これから出
 かけて、あら膽ひしいでやらう。さりとて亂暴するわけでは
 ない。道理をとき聞かして、應分の金銭米穀をださせるまで
 のこと、もし口で説いて、まだわからねば、その時は、腰の鐵槌
 で説きつけるまづ、このあたりにて、金もち物もちと聞えた
 るは、誰々にか、教へてくだされと云へは、第一に、みつちと
 は片輪をそのまゝのあさな、本名重左衛門と申しては、知ら

ぬ人もなき物もち、田が千町、山が五百町、米倉が三つ、金倉が二つ、その上に金貸しで、欲張りで、意地わるで、そのため、われらは飢饉でなくとも、常に難義して居りますと、衆口一齊にまづ金貸の名をわぐるも可笑し。その次は久兵衛、その次は権八郎、またその次は木村長右衛門、これはこの名主、先祖よりの由緒ふるきは、門の大榎にも、それと知れて、金はくさるほどあります。さてまた町人では、近藤屋、桔梗屋、酒屋の善太郎など、一々告ぐるを聞き、もうわかりました。金は天下の通用物、はて盗むといふではなし。説いて寄附させるに何も暗い處はござらぬ。どりやこの長い日の睡氣、まいにひと働きやつて、なつ下りまでには歸つてくる。そ

して寄附させたものは、齊しくわけうほどに、それまで、この近郷にて饑饉になやむ人達が集つてくるやうに、手分けして吹聴しては下さらぬか、頼みますと、飽くまでもたかぶらぬ言葉に心の誠も見えて、世にたのもしう聞ゆるに、一同感涙を流して雀躍し、おかげ様でわれらの命がたすかります。ありがたや、かたじけなや、吹聴に手抜かりはいたしませぬ。どうぞよろしう願ひますと、村人どもはしばし語りあひしが、やがて五六人、男の前にいで來り、吹聴するには大勢の人もいりませねば、われらは御案内仕りますと、さきに立ちてゆくに、男さらばと一禮していでたちぬ。その後影伏し拜みつゝ、ひとまづ家へとて、歸りゆく中にも

尤も年よりたる源右衛門とし六十七歳頭は禿げても元氣は若者にゆつらず嫁のやうな嬢もつて去年女の子を生むだといふ評判男さすがに老の涙もろく生き神様といはうか生き佛といはうかおりあなんだか夢のやうな心地がしてうれしうてくかなしうなつて來たとしあくりあげて泣き出せばこれが世にいふ棄つる神あれば拾ふ神様われらの運がむいてきたこんな目出度い時に涙は不吉さてひとつ相談だがふれて廻はるに太鼓でもたいてゆく方が便利でにぎやかでおまけに面白いさいはひ村の虫送りの太鼓が貴様の處に預けてある筈それを持ちだして貰はうではないかいや太鼓はあるにはあるが雨がもつて皮が

びえよぬれに濡れてたいた處が蛇が呻るほと音もでまいそれよりは席を物干竿のはしにつけたらどうだそれはよくあるやつだが何しろこの瘦腕に席では重過ぎるあれあそこの物干竿にかけてある赤い巾はお内儀のゆもじかそのそばの白いのが貴様の犢鼻褌そこで源平かけもちの旗とは何と面白い洒落ではないかそれもよからうとあるじが許す聲の下よりいまいでは何をしてをりしやら帯紐も結ばぬ衣を手にておさへ脛もあらはに駈け出す女房日頃は饑に青くなりしお多福面もいざとなれば紅禪よりも赤くそれだけは御免とさしだす手を抑へ旗にされたらお内儀までも名譽といふもの何の風が五六匹居た處がお

互〇ひ〇同〇然〇耻〇では〇ご〇ざ〇ら〇ぬ〇なに〇ほ〇した〇ばかり〇で〇まだ〇洗〇は〇ぬ
 と〇な〇それ〇でも〇か〇ま〇は〇ぬ〇見〇れば〇黄〇い〇や〇う〇な〇ま〇み〇が〇つ〇いて〇居
 て〇處〇々〇穴〇が〇あ〇いて〇居〇て〇あ〇ま〇り〇惜〇しい〇代〇物〇でも〇あ〇る〇ま〇い〇か
 ま〇う〇こ〇と〇は〇な〇い〇暫〇時〇借〇用〇す〇る〇そ〇の〇代〇り〇に〇紅〇絹〇の〇巾〇を〇買〇う
 て〇返〇す〇と〇う〇れ〇し〇さ〇の〇あ〇ま〇り〇ま〇や〇う〇だ〇ん〇た〇ら〇ぐ〇幾〇んど〇氣
 違〇ひ〇の〇や〇う〇に〇狂〇ひ〇躍〇る〇や〇ら〇は〇ね〇る〇や〇ら〇ど〇や〇く〇と〇騒〇きて
 繰〇り〇出〇せ〇り。

紅〇白〇の〇旗〇は〇村〇より〇村〇に〇と〇び〇ぬ〇施〇し〇が〇あ〇ると〇い〇ふ〇聲〇は〇耳〇よ
 り〇耳〇に〇つ〇た〇は〇り〇ぬ〇饑〇饑〇によ〇わり〇は〇て〇し〇村〇々〇も〇俄〇に〇生〇氣〇づ
 き〇ぬ〇太〇郎〇も〇こ〇い〇次〇郎〇も〇來〇い〇お〇施〇し〇に〇あ〇づ〇か〇つ〇て〇つ〇いで〇に
 生〇神〇様〇の〇お〇顔〇も〇拜〇んで〇來〇いと〇呼〇び〇つ〇れ〇て〇くり〇だ〇す〇男〇女〇ひ

き〇も〇き〇ら〇ず〇夕〇日〇金〇雞〇山〇の〇頂〇に〇春〇く〇頃〇には〇妙〇義〇山〇の〇麓〇は〇さ
 な〇が〇ら〇人〇の〇山〇を〇き〇づ〇き〇ぬ。

今〇か〇く〇と〇待〇つ〇ほ〇ど〇に〇歸〇り〇く〇る〇一〇隊〇は〇や〇鎮〇守〇の〇森〇の〇か〇な
 た〇に〇見〇え〇そ〇め〇ぬ〇雪〇の〇上〇を〇こ〇ろ〇が〇す〇小〇石〇の〇見〇る〇く〇大〇く〇な
 る〇が〇如〇く〇さ〇さ〇の〇五〇六〇人〇の〇案〇内〇者〇に〇招〇か〇ず〇し〇て〇加〇は〇れる〇村
 人〇お〇び〇た〇しく〇車〇に〇つ〇み〇馬〇に〇の〇せ〇長〇者〇の〇家〇來〇に〇ま〇よ〇は〇せ
 たる〇金〇錢〇米〇穀〇さ〇て〇は〇酒〇樽〇疊〇々〇と〇し〇て〇相〇連〇り〇て〇小〇山〇の〇ゆ〇る
 ぎ〇い〇だ〇せる〇こ〇と〇く〇む〇か〇し〇は〇八〇十〇舟〇の〇檝〇ほ〇さ〇す〇も〇て〇來〇し〇三
 韓〇の〇貢〇物〇も〇こ〇れ〇に〇は〇過〇ぎ〇じ〇と〇見〇ゆる〇ば〇か〇り〇な〇り。

山〇も〇く〇づ〇る〇ば〇か〇り〇涌〇きた〇つ〇歡〇呼〇の〇聲〇に〇迎〇へ〇ら〇れ〇て〇ま〇づ
 かに〇村〇々〇の〇お〇も〇だ〇ち〇たる〇人〇々〇を〇よ〇び〇よ〇せ〇饑〇饑〇の〇さ〇ま〇見〇る

に見かねて、有徳の家々を説いて廻つて、この通り寄附させたる次第、ひと通り御話し申します。この村の重左衛門のとやら、高利をむさぼりてよくない人と、まづ第一に出掛けて説いて見たが、中々の口上手、うまく言ひぬけて、鏢一文も出す氣はなく、一筋縄ではゆかぬやつと見て取り、躍りかゝつて胸倉とつて、たゞみに押しつけ、腰なる鐵槌とりあげて、命がをしいか、金が惜しいか、命をしければ、金を出せと、威せば、金は御望み次第出します、一命だけは助けてと、虫のやうなる聲だしてあやまるも可笑しく、思ふ存分、金をださせ、次に久兵衛どの、家に出掛けて見れば、戸をしめ、門をとちて、前以ての用心、小僧らしく、鐵槌のつかひ所はこゝなり

ど、一息に門の扉をうちくだき、饑饉のために、お倉の金を所望にまゐつた。故障があらば申しいでられよと云へど、ぎうの音もださず、さらば御免と、倉の戸をくだけば、小判の中に潜みし主人、こは、くゝに這ひいで、どうぞ半分だけは残して下されと、泣音を出すに、氣の毒になりて、半分で許してやり、それから名主どの、處へゆけば、劍客をよびよせて、刃物をもつての手向ひ、小癩なりと、みなたゞきつけて、倉のものをさらげだし、なほ説いて廻はる中に、氣のきゝたるは、かなはぬと悟りて、自ら金錢米穀をもちだして待つに、少し取りて許してやり、あさはかなるは、御馳走ならべ、奇麗な女に酌させて、言葉巧にかこちど、ぬかすに、腹が立ちて、多く取り、あ

りどある金待ちに寄附させて取つて来たこの品々天道は
還るを好むとやら人民の膏血を絞つて取つたものをまた
その人民にかへすに何も不思議はあるまい拙者がもつて
来たと思ふと大きな間違これは全く天道様がくださるの
ださあ〜等分して恨みつこのないやうに取つた〜と
それ〜手配りしてわかち與へければ小判を兩方の袂と
懐どに一杯入れてなほ欲張りて兩手に握るもあり餓えた
るあまりに米をなまのまゝのみこむもありお金よりもお
米よりもおれはまづ天の美祿と樽のがいみくだきて口つ
けて鯨飲するもありて喜びいさみ躍りくるひさわぎたつ
有様はたい神代のむかし天照大神の天の岩戸を出でたま

ひし時八百萬の神たちのゑらぎ笑ひしもかくかと思はる
ばかりなり。

男このさまを見て腹をよりにて笑ひ出しこれで拙者の氣も
すんだ世の中には法度とかおきてとかいふ小むつかしい
ものがあつてうか〜して居れば安中の城あたりから捕
手がむかうて來うもとより惜しい命ではなけれどまだ浮
世にすることが澤山あればこのからだは小役人などの手
にはわたされぬおさらばといふより早く身を躍らして妙
義山の奥にかけゆくに一同たゞ茫然としてさわぎし聲も
俄にしづまり覺えず手を合してその後影を拜みぬ
朝に得たる萬金夕に散じついでわが身に殘れるものと

鎮守のまつりのかへるさ丁字路上に他のみちつれと袂を
 かぎりぞや。
 末に一輪の明月あらひ出されたらむは如何に心ゆくへき
 ひはてし秋風を濱松の梢にのこして長鯨潮を吹く浪路の
 浪の花しろく九十九灣縹渺として烟にくる夕雲をはら
 る海南絶勝の地の危礁亂立する濱邊によりては碎くる
 となければまことはその桂濱の月見しことなけれど名た
 にて幼少の時より他郷に流寓して未だ郷にかへりたるこ
 月の名所は桂濱といへる郷里のうた唯記憶に存するのみ

月 譜

てはもとの鐵槌ひとつ身をかはすこと飛鳥よりも軽く瓢
 然として立ち去れば夕の白雲心ありげにその跡を埋めつ
 くしぬ仰げば高き石門の上久しぶりの晴天に磨き出され
 たる涼月の影さやかになり。



わかちて家路はるけき野中の路の夜ふけてさびしきに齡
 同しばかりなるとなりの小娘とふたりつれたつ影法師も
 あきらかに仰けば白露空に横はりて明月高くかゝれるに
 心も自からすみて笑ひあひつゝ行く路すからかたみにう
 つれる影の頭ふまむと争ひてあとになり先きになりしが
 はてはわれ常にさきになりて娘の頭ふみければはらたて
 共に家へは歸らじとすねたる折しもむら雲とみに月を
 呑みてあたりは闇となりけるにおそろしやと寄りそひて
 覺えず抱きあひてぞ泣きし。

俗氣なき人と碁をかこみて黄昏に至りて碁の目見えわか
 ねばしばし子を下す手をとめて浮世の外のことかたら

ふほとに眉目いつしか明らかになれるに願みれば梅か枝
 まるまどにうつりてさなから一幅の墨畫の如し窓をひら
 けは月は老梅の梢に在り暗香人を掠めて春色澹として無
 からむとす風笛あらばと思ふ折しもそれしやのはてが姿
 をかへて住へるとなりの家になまめきたる聲して弾く三
 味線の調子のいたういやしきに興味とみにさめはてたる
 も口惜し。

可愛らしき小兒をいたく手も清くほそやかにして力なげ
 なる年若き女のお月さまいくつ十三なつなど小聲にう
 たふにつれてかたごとにのさまくと言ひついでしが
 はてほつかれてやわらかき手母の胸にあてちくくと

ねだれは、月に白き豊胸露はし、乳房ふくませていきうつし
 と、覚えすつぶやかきたる聲低く、眼もはなたでみとれたる足
 元に、竹影娑婆として、孤月むなしく、長風の上にすみてつれ
 なし。

老櫻月を帯びて、霞の奥ふかき十二の欄干に、りつくせる
 一人の少女の鬢のほつれ毛を、春風になぶらせて、はらはむ
 ともせず、裂きたる玉章手にもちてくれなるの袖やさしき
 口にかみしめたるまゝ、何を怨むか、續々として欄干の上に
 墮す涙の月にかゝり、やきて、さながら眞珠を散らすが如くな
 るに、よそめもいと消えたき思すべし。

ひねもす清溪に釣する翁の家、にまつ人もなければにや、日

くるゝも、なほ枯木の如く磯に腰かけて、垂るゝ綸のはしに
 いつしか一痕の月かゝるよと見るほどに、やがて手答へし
 ければ、ひき上ぐる竿の彎々たるにかゝり來れる、一尾の香
 魚の潑刺たるを捉へて、かごに入れて、今日はこれまでなり
 と、鼻歌たかくうたひて歸りゆきしあと、溪水舊に依りて、空
 しく月を碎いて流るゝもいとすがすがし。

ひとりにはひろき蚊帳の中、白くほのみえて、あふぐ團扇の
 音とゝもにえならぬ香洩れて、椽には焚きさしの蚊遣火な
 ほいきて残れる夏の短夜に、またぬ月影はや松の枝にかた
 むきそめて、さやけき光を、ねやの中まで送れるは、いかなる
 浮世の外の情ぞや。

薄に置ける白露をかしくと讀みしゆふべ夜に入りて暗きを
をたよりに、梵音しのぼせてたどる行手の黒き影にさぞや
まぢわびてと近寄るほどに、雲破れて洩る、月の下さびし
げに立てる石地藏の前に、おきれ顔なる賤の女のさすが手
拭に顔のなかば、包みてしどけなきもすその脛もあらは
に血のにじみたる跡あるは人目をしのぶ路の、いはらなど
にきすつけられしにやとあはれなり。
千里雲へだゝりて、明月むなく、兩地の情を照らす秋の夕、
むかしは、共にこの月に泣きたる事もありしと、そいろにう
らがなしく、年の十とせ、満身の血の半は詩に灑ぎ半は戀に
灑ぎて、思ひ絶えなむとする今宵、月に向ひて、腸をたづ、我身

の影さびしく、たゞみの上に曇々として、細し。

兩毛の間に遊びて、妙義山を下りしときも、てる錢悉くつき
て、今は食を得るに由なく、飢をしのびて、昨夜は稻田のあせ
に眠り、今宵は路はたの材木の上に眠らむとせしに、蚊多く
して眠られず、よろめく足を踏みしめて、わゆむ行手に、ひろ
き瓜田あり、金銀財寶とは異りて、天地のつくりなせるもの
をしばらくかりて、我飢を醫せんにはと心むらくと亂れ
て、おはやわれ履を瓜田に入れむとせし刹那、我影のあまり
に明かなるに、仰げは隈なき一輪の月魂、天つ御神のにらみ
たまふかと思はれて、そいろに身の毛よだち、穴あらはとば
かりに身をちいめて、月を拜みてぞ泣きし。

浪の花

淡路しまやま 秋ふけて

ちるや尾上の もみぢ葉を

ふみわけつゝも 妻戀ふる

鹿のなく音も あはれなり

八重の潮路を ふきすさび

身にしみわたる 木枯しの

こずゑをはらふ 音すこい

はまの真砂も むせぶなり

さらでも荒き うな原の

すさぶ嵐に わきたちて

あられと亂れ 雪どちり

烟となりて のぼりつゝ

よりにては返り かのへりては

またも寄りくる わだつみの

波は何をか

みるめだになき あら磯に

みけしの袖を ふりはへて

狩にたゝせる 大君の

おましの前に ぬかつきて

うやまひまつる 島人の

心のさまに ひきかへて

波はあらくも なりまざる

「やよやたわやめ 近うよれ

なれを呼びしは 外ならず

こたび都を たちいで、

とるや梓の たつか弓

ひるはひねもす 駒なめて、

野くれ山くれ 狩りにしを、

毛のあらものも におものも

尾上によばふ 聲はして、

手にはとられぬ 月のうちの

桂のごとく 朧もはねて、

日數もあまた 經にけれど、

絶えてなかりき、山のさち

「らどらぶかしく 思ふまゝ、

うらべを呼びて うらへさす

久しき世より この島に

いませる神の 御心を、

『ひごろ山さち なかりしは

みなわがたゝる わざになむ。

そをさけまくも 朧もほせば、

さぐらせたまへ、みな底を。

音に聞ゆし この海の

そこにあはびの 貝ぞある。

かひの中なる ましら玉

とりてそなへよ、みてぐらに。

わが心だに なぎぬれば、

朧もほすまゝぞ、山さちは。』

神のをしへは ありたれど

そこひも知らぬ わだつみの

荒れたる浪を かきわけて

かづかむ者も なかりしを、

『男狭磯の妻なる 少々等少女』

かづくわざにぞ すぐれしと、』

島人どもの いふなべに、

なれをばこゝに 呼びにたり。

『けふのいく日の みいつきに、

さゝげまつらむ ましら玉、

いほほに咲くや浪の花
 よりては返りかへりては
 あられとみだれ雪とちり
 いやくつよく吹く風に
 ひるがへすよと見るほどに
 姿は浪に消えにけり
 みことは重く身は軽く
 沖のまら浪しきたちて
 烟となりてのぼりつゝ
 またも濱邊にうちよりて

そのましら玉
 日影のたかく
 さぬまに
 「かしてまりぬ」と
 君の御前を
 いらへついで
 ぬくや一重の
 玉ののべたる
 やわはだも
 おはれ嵐に
 冷は入りて
 栗だてり
 顔さへおをく
 大君の
 あやにかしこき

も〇い〇か〇づ〇ち〇の〇空〇を〇と〇よ〇も〇す〇
落〇つ〇る〇が〇こ〇と〇く〇に〇も〇の〇音〇は〇
覺〇ゆ〇な〇り〇

いそべにつとふ 島人の

老も若きも ねしなべて、

「少々等少女よ、さきくあれ。」

聲〇さ〇へ〇浪〇に〇消〇え〇入〇り〇ぬ〇

かたみに顔を見合せて

心もどなく 待つほごに、

さ〇か〇ま〇く〇浪〇を〇か〇き〇わ〇け〇て〇

浮〇び〇あ〇が〇り〇ぬ〇、た〇わ〇や〇め〇は〇

「千尋にあまる わだつみの

底にあはびは ありたれど、

いととおほさく また重く、

いふがひもなき をんな子の

よわきかひなを いかにせむ。

許させたまへ」と ふし沈む。

「神のとめさす ましら玉

ま○た○も○よ○り○く○る○ど○く○だ○く○る○
 雪○と○く○だ○く○る○
 磯○山○に○
 空○に○し○き○た○つ○し○ほ○げ○む○り○
 空○に○し○き○た○つ○し○ほ○げ○む○り○
 返○り○て○は○
 風○は○い○よ○く○吹○き○し○き○り○
 風○は○い○よ○く○吹○き○し○き○り○
 あ○れ○ゆ○き○て○
 波○は○い○よ○く○あ○れ○ゆ○き○て○
 波○は○い○よ○く○あ○れ○ゆ○き○て○

ま○た○も○か○づ○き○て○沈○み○け○り○
 ま○た○も○か○づ○き○て○沈○み○け○り○
 さ○か○ま○く○浪○の○底○ふ○か○く○
 さ○か○ま○く○浪○の○底○ふ○か○く○
 「さ○ら○ば○ど○ぼ○か○り○い○ら○へ○つ○い○
 「さ○ら○ば○ど○ぼ○か○り○い○ら○へ○つ○い○
 を○つ○ど○を○ひ○ど○目○か○へ○り○み○て○
 を○つ○ど○を○ひ○ど○目○か○へ○り○み○て○

君○の○み○こ○の○か○し○こ○さ○に○
 君○の○み○こ○の○か○し○こ○さ○に○
 数○に○も○足○ら○ぬ○賤○が○身○は○
 数○に○も○足○ら○ぬ○賤○が○身○は○
 い○し○や○藻○屑○と○な○り○ぬ○と○も○
 い○し○や○藻○屑○と○な○り○ぬ○と○も○
 つ○ま○の○命○は○す○く○は○い○や○
 つ○ま○の○命○は○す○く○は○い○や○

よ○し○や○重○く○は○あ○り○と○て○も○
 よ○し○や○重○く○は○あ○り○と○て○も○
 い○ざ○と○り○て○こ○よ○そ○の○あ○は○び○
 い○ざ○と○り○て○こ○よ○そ○の○あ○は○び○
 な○ほ○い○な○み○な○ば○ま○の○あ○た○り○
 な○ほ○い○な○み○な○ば○ま○の○あ○た○り○
 打○ち○も○は○た○さ○り○汝○が○夫○を○
 打○ち○も○は○た○さ○り○汝○が○夫○を○

いかでか海にのこすべき

か○し○ら○を○な○め○て○
た○け○り○狂○ふ○が○
く○ら○を○か○み○
ご○と○く○な○り○

磯邊につどふ 島人の

老も若きも もろともに、

「少々等少女よ、さきくあれ。」

さけび呼はる 聲のうちに、

山より高き 大浪の

勢つよく うちよせて

真砂の上に あげにたり、

あはび抱ける たをやめを

息もかよはず なりたれど、

眼ばかりは うちひらき、

あたり見まはす かんぼせは、

浪をわざむく ぼかりなり、

「わが脊の君よ さきくあれ。」

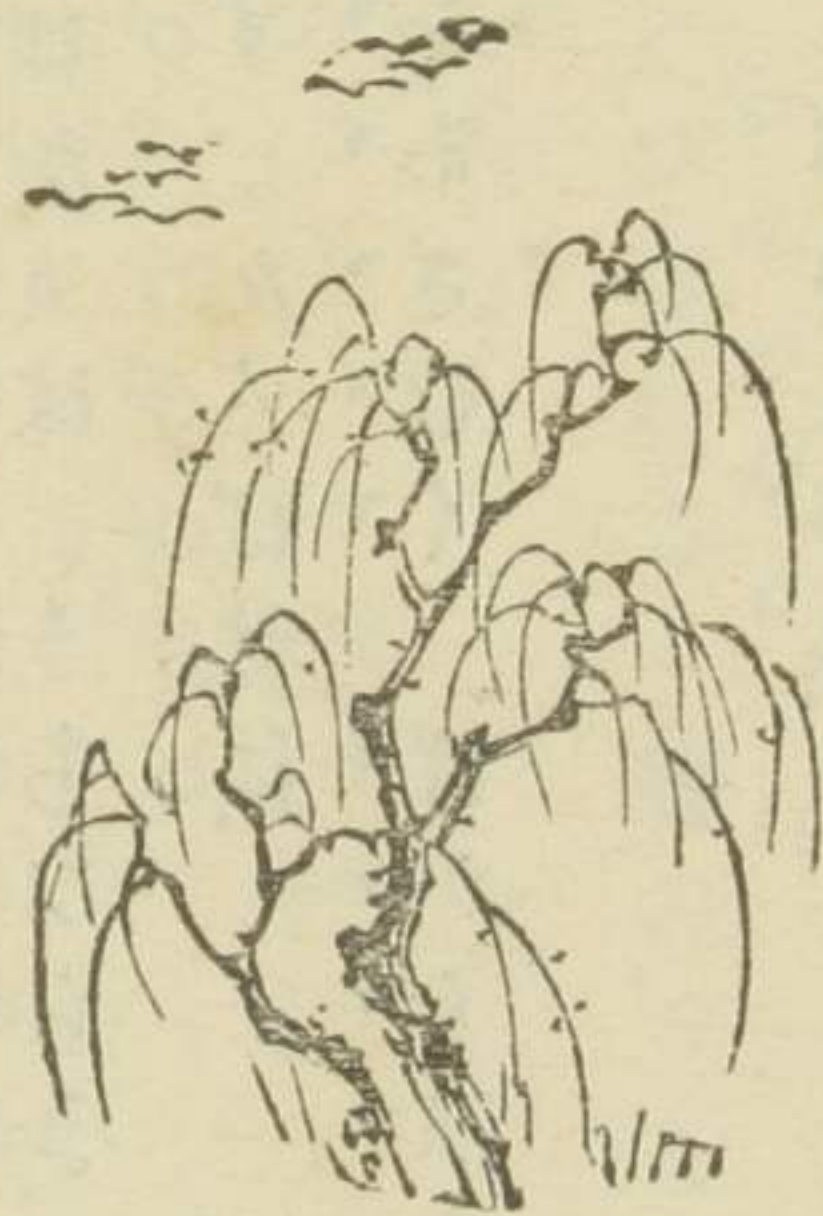
唯ひと言を 名残りにて、

またもひきゆく 大浪に

聲もろどもに 消えにけり、

* * * * *

君の、とめさせ、たまひたる
珠は、あげ、り、くがの、上に、
世に、うるは、しき、たわやめ、の
に、ほ、へる、花の、身にかへて、



加藤清正の告別

八道の山よ、いざさらば、
年のな、とせ、戈とりて、
踏みあらしたる、日の本の
もの、ふは、今歸るなり、

釜山の浦の、秋ふけて、
空もしぐる、夕暮に、
波路はるかに、帆をあげて、
汝れとは、永く別るなり、

うらみも深き ありなれの

川のながれと もろともに、

望は逝きぬ、いざさらば、

八道の山よ、つゝがなく、

知遇の恩に 身をすて、

四百餘州を わが駒の

ひづめに蹴むと いさみしも、

さめて果敢なき 夢なれや、

我を知りにし 大閤の

世になき後は、 たが爲めに、

千里の外に戈とりて、

異境の山に いくさせむ。

耻をしのびて ふるさとに

歸るものちに 死なむため、

主君の家の ゆく末を

思へば重き 命なり。

あはれ大閤 世をさりて、

よつぎの主は いとけなし、

石田小西の 小人ばら

かならず事を あやまらむ。

狐に似たる 家康の

いかでかたいに もだすべき。

やがて六尺の わがからだ

すて、甲斐ある 時は來ひ。

わが幼時より はぐ、まれ

めくみをあびし 豊臣の

家をまもりて 死なむ身の

ながくは住まじ、 世の中に。

跡にみすつる もの、ふの

亡き魂もしも 知るあらば、

三途の川や 六道の

辻にしばらく 我を待て。

これを限りの 見納めに

今ひとたびと 見かへれば、

波音すごく 雨あれて

野山は霧に おぼろなり。

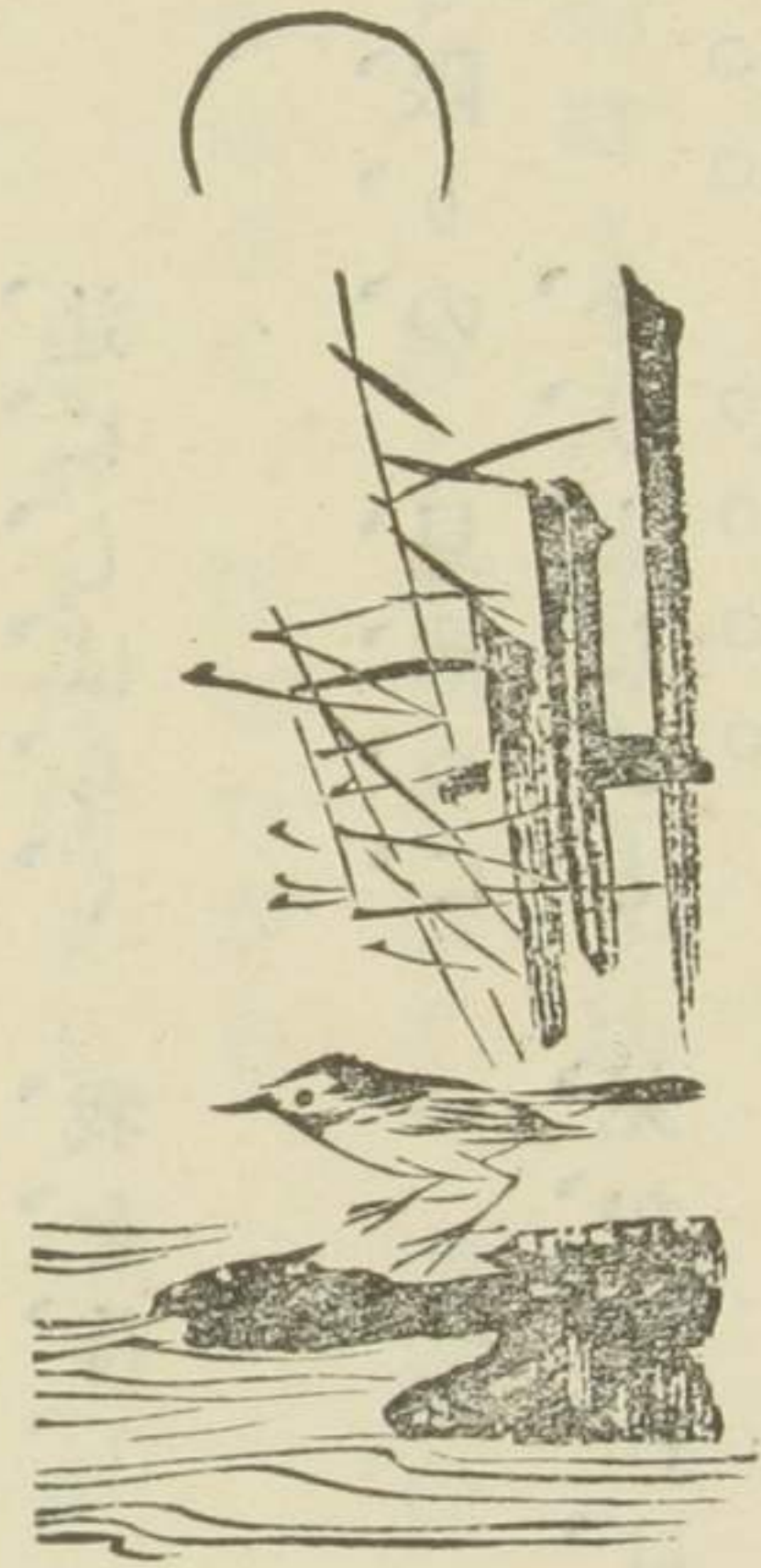
八道の山よ

いざさらば、
國のほまれと

たゝかひて、

月は海邊こそよけれ。房州白須賀の濱べにゆきくれて、松が
 根をまくらに魂磯うつ大濤の音にさそひさられて、しばし
 まどろむかどすれば、わが顔の上を横行する蟹のあゆみに
 驚かされてうついにかへれば、寝待月浪路の末にあらひい
 だされて、万里の浮光黄金を躍らすに、心もそらに夜もすが
 ら露にたちつくして、月に嘯きたのしさ、今にわすれがた
 く、ことし九月十一日、舊曆の八月望日にあたりたれば、こよ
 ひの満月せめて海邊にとて、犬吠崎のあたりさして都をい
 でぬ。

佛濱の月夜



花とちりにし
 男の子の骨を
 守れよや

本所より千葉、佐倉などを経て、松岸にて汽車をくだり銚子の市街を過ぎて、その町はづれなる川口神社の丘にのぼる。こゝは大利根の海にそゞく處なり。川の幅いとひろく、對岸には、寸馬ゆき、豆人來る。左に銚子の瓦鱗を見わたし、右に鹿島の荒灘をのぞむ。白帆遠く風をはらみ、櫓聲ちかく、叩軋といて聞ゆ。こゝにいつかれたるは、延命姫とて、容貌いとみにくかりしが、ひとたび安倍晴明をかいま見て、心のやるかたなく、遂に妹背のちざりをむすびたれど、男、その醜をいとひて、ひそかに家をいで、小濱村の濱に靴ぬぎすて、あたりの寺にかくれけるに、女跡を追ひて、そこに至り、その靴を見て、すでに死せりと思ひ、たのれも海に身をなげて、底の藻屑と

うせにけるを、里人あはれみて、玆にいつきまつれるなりと言ひつたへたる。その女の名まで、かの木華咲耶姫の姉姫の故事に附會したるものとかほゆれど、全くの虚構にはあらざるべく、やさしき古の女ごゝるも汲まるべくや。祠のうしろより高原をよこざりて、黒生濱にくたり、磯づたひに君が濱を経て、犬吠崎にのぼり、地藏坂を下りて、佛濱にいたれば、日は早や西に沈みぬ。こゝに海水浴の旅館ふたつあり。曉雞館と云ひ、水明樓と云ふ。犬吠崎を左にし、長崎がはなを右にせる。一曲の海濱の長さ十町ばかりの間、旅館より外には家なく、後は小松の生へつゝ、いさきたる高阜を負ひ、前は直に俯して、海波に枕み、自から別天地をなせり。水明樓に投

浴後杯を呼び坐して海上を見わたすに万里渺として雲な
 ず。暮色漸やく波聲を罩めたれど日は未だ全く暮れず犬吠
 崎の燈臺も未だ點火せざれば月のいづるにはなほ程おら
 むとて眼を座に移し、がふと東の方を見れば團々たる明
 月、いつしか海をはなれたりはなる、こと數尺未だ光線を
 はなたず海は碧に、空は青し水天蒼茫の際、月ひとり紅玉を
 懸く馮夷たはむれに珠を簸弄するかと疑はる月やうやく
 上りて、やうやく小となり、一條の金蛇今や波上を走る愈の
 ぼりて、金蛇大となり波光どほく月にかいやくきて万里金粉
 をちらし沖に釣する漁舟四つ五つさやかに見ゆ白帆の影、

金波のなかに入りて忽ち見えすぎてまた消ゆ月天に冲す
 るに及びて、金波今は際なく、白帆また隠る、所なし白色の
 燈臺も全く夜色の中に没し、臺上の火光廻轉して西に明か
 に東に消ゆるは、月光と相闘ひて、その光をうしなへるなり、
 満潮の刻はすぎたれど、濤はなほ磯にたかく天外より潮氣
 を吹き送る天風に應じて軒近き岸の姫松、謾々の音を發す
 れど、さすがに枝上幾白顆の月影をこぼさず、濤にまざれど
 る松虫、鈴虫、蟋蟀の聲々、殊に秋氣をそへてひやく、かなりわ
 れ獨り柱に寄りて、且つ飲み、且つながむるほどに、一瓶の酒
 かたひけつくして、また餘瀝なく、興味醉と共に加はり、神氣
 鬱勃として、獨坐するに堪へず、起ちて海邊にくだる。

又まづはりて、共に山海の間をたどりしに、のちには犬あり
 ば、犬はなほ我足にまつはるまつはりては離れはなれては
 し、月下に相戯れしがかくては果てもなしとて、たちて歩め
 なり、主やあると見れども、人なし、我が手と犬の口とは、し
 げなる聲して、いたからぬまでに、我手にかみつくもあはれ
 さまのやさしさに、手にてその額をなづれば、ひときは嬉し
 き齒を露はして、呻るともなく、吠ゆるともなき聲を發する
 れをなつかしが、りて、仰臥しながら、四足を空に擡め、月に白
 輾轉すよ、く見れば、一匹の小犬のいづくよりか來りけむ、わ
 どすれば、月下に物あり、霜をあざむくばかりなる砂の上に
 夢現の間にさまよひしかど、われにかへりて、踵をかへさむ

ば、山をくづして、寄せくる大浪に、足は自から退きぬさては
 我物ならぬ如く、覚え知らず、浪に従ひて、進まむとすれ
 胸中万斛の愁は、自から消え、万念うせ、魂魄とろけて、身体も
 さらむとするもの、ごとし、凝立して、睇視するほどに、わが
 ひて、默然として、立てば、浪はわが足をかすめて、われを誘ひ
 人なく、物なく、天地の間、たい波濤の聲を聞く、われ浪にむか
 れば、旅館、月影に、縹緲として、樓上の燈光、星よりも、瘦せ、四邊
 の際を知らず、水陸の間、たい我身ひとつを、黠せり、かへりみ
 がへす、右は松丘自然の屏障を作り、左は大洋渺茫として、そ
 飄然として歩す、明月わが酔顔を、てらし、天風わが袂をひる
 巖礁散布せる濱べに、濤と路を、あらそひ、犬吠崎を後にして、

とも感ぜずふと思ひつきて、犬をたづねし時は、犬の姿は
や見にざりき。

旅館にかへり、一睡して覺むれば、夜はまだ二時なり。隣室に
は三人の客あり。宵よりいまだ寝ねざるものとればしく、今
しも杯は収めたれど、雑談の聲たかく、まどろまむとするに、
目ますくさゆ。書よまむとすれば、油つきて、どもしびの影、
またゝきて死なむとす。酒さめて、喉しきりに渴すれども、深
更姉を呼ばむも心ぐるしく、苦しきのあまりに室を出で、ま
た濱邊をあゆむ。草木今は睡りつくして、浪の聲ますく、たか
く巖に激し、零露音なくして、人の衣を濡しむら雲、そらにい
そがしくして、月も走るが如く、光うすうして、乾坤夢よりも

淡し、われ此景に對して何となくうらがなしく、夜氣愁をさ
そひて肌にしみて堪へがたければ、室にかへりて衾を被り
けるに、隣室の雑談は猶止まず。遂に四時となりぬ。日出づる
までは、外面に在らむとて、又出で、磯邊を歩す。
月は西にかたむきたれども、空は依然として、夜色を帯び、潮
また上らむとして、浪の花巖頭に白し、海に金波のあと絶は
て、空とひとしく、黒味をふくみて、青く、水天のけちめ、それと
も見わけがたかりしが、一縷の微紅、東のかたに現はれぬ。見
るく左右にひろがり、上にふくれて、明かに海と空との間
を割せり。曙光今冬、東天にのぼり、そめたるなり。されど、その
區域はなほせましく、月はますく、うすれゆきて、燈臺の火ひ

く海をはなれたりや、上りて、波もきらめき初め、光線進射して、また仰ぎ見ることを得ず、日出の觀もこれまでとうしろむけば、かたへの岩に、おなじく日出を見居たりけむ、二十ばかりの女、ねくれた髪を朝風になぶらせて、つくるはぬ姿やさしげなるが、朝日にむかひ居たる眼に、顔かたちはよくも見ゆ、わかぬまに、磯をくだりて、もずそか、いげて、浪際をたどりゆき、また歩をこなたにかへしぬ、衣のうるはしきは、富める家の女にや、まるきと云はむより、も方といふべき顔の首なくして、直に胴よりはへ出でたるが、如くなるに、その顔のたいしからずして、口と共にゆがみたるさまなど、かの川の女神もかくやどあはれなり。

どり我物顔に回轉して、光線を四射せり、しばらくして、東天の微紅は、益大きく、また益濃く、空にうかべる雲にうつりて、雲はみな錦繡となりぬ、四面なほ夜色のうちにねむりて、東天ひどり活動を見る。一刻は一刻よりも異に、雲また形と共に、その色を變じて、ほとんど端倪すべからず、紫味やうやく黄味にうつりて、曙光今は東方の半天を領し、燈臺も全く焰をうしなひ、月魂丘樹の上におをさめて、さながら病婦の顔のごとし、かくて曙光の區域、益廣くなるにつれて、色はますます薄くなりて、夜は全く明けはなれむとす、濃碧の海、淡黄の空、上下相交はる處、忽ち殷赤朱の如き一線をいだすかと見れば、やがて楕形の紅片となり、半球となり、終に一大紅暈、全

朝食の後また出で、南のかたに向ひ、浪際つたひて、長崎が
 はなにていたる。巖石摺疊して、怪獸の陸梁せるが如し。こゝよ
 り外川の漁村を経て、犬若崎にいたるの間、巨石浪際より海
 中にかけて散布し、南より來る潮流をうけて、犬吠崎のあた
 りよりは、濤ひときは高し。ゆきくゞて犬若崎にのぼる。この
 崎は、海中に突出せる、半島の如き巨巖にて、たかさ百尺にち
 かし。見わたせば、大海際なく、藍を流せるが中に、長風浪を蹴
 て、白波遠く相連り、さながら白鷗の亂れとぶに似たり。その
 白波やうやく近きて漸く大く、また長く、後浪前浪を追へば、
 前浪もまけじと、いさみ進み、幾層の白浪、空に躍りながら、來
 りて絶壁にふれて、雪を崩し、霞をちらし、はては白烟となり

て、たちのぼる。そのひいき、鞆鞆として、更に人語を辨せず。岬
 の東端、やゝさけて、更に高巖を出す。怒濤の餘勢、その隙間に
 亂入して白泡鼎沸し、白龍のくるふかと疑はる。仙が巖、ちか
 くその東にありて、海中に孤立す。高さは、犬若崎とひとしく
 して、大さは、その十分一にも足らず。岩としてはおほきく、島
 としては小なり。上に洞窟あり。浪の花ちりて、幾んどその半
 に及ぶ。甚しき時は、その上をこすことありといふ。このあた
 りの浪のあらしきこと、たしはかるにたりぬべし。右の方は、名
 洗浦とて洗は大ならず。飯岡岬の一角、海中にひきて、そのな
 がさ、二里に及べり。眺望はとりわけて奇絶とにはあらぬと、
 水石相闘ふの偉觀は、銚子の近傍、この犬若崎を第一とす。岸

上より海波に俯せば、目眩し、心戦き、壯快きはまりて、覺せず
 悽愴の感起る。ひびろ好めるシルレルがタウヘルの詩を一
 誦して去る。

午下、また出で、犬吠崎の上に散歩す。佛濱の丘陵、君が濱の
 丘陵とこゝに合して、ほそ長く海中に突出せり。岩質は、砥石
 にして、かの海上砥、こゝより出づ。岬をきりくづし、斧聲、石と
 たゝかひて、風景を俗殺せるは、惜しむべし。名たゝる犬吠崎
 の燈臺は、岬角にあり。その側より崖をくだれば、巨石海波の
 間に磊砢として、或は人立し、或は獸蹲す。岬の北側に、胎内く
 いりと稱する岩窟あり。このあたり、危巖最も多く、亂立す。銅
 像かどらたがはる、ばかりなる赤條々の漁夫ふたり、みた

り、岩上に踞して、編を垂れたるも、亦畫中の人なり。

浴終りて、酒未だ至らざるほど、庭をへだてたる一室に、嬌歌
 の聲、三絃の聲と共に起る。之の聲をたづぬれば、小歌のぬし
 は、けさ日の出をながめたる女にして、そのうるはしき聲、か
 のゆがみたる口よりいづるも、わはれなり。かくて、杯酒の間
 に、月はまた上りぬ。今宵は既望なれど、清光はきのふにこと
 ならず、空いとよく霽れたり。かの三人の客は己に去りて、絃
 聲もまた止み、夜しづかにして、大平洋上、秋正にたかし。一瓶
 の酒、こよひは飲みつくすと能はず。まぼし月をふみて、眠に
 つきぬ。

あくれば九月十三日なり。日の出をのぞみたる後、旅装をど

のへて、かへらむとす。草上の露未だ晞かず、曉風、秋風をよ
 せて、ひややかなり。きのふ我をたづね来て、紙障の間に、欸々
 たりし燈心、蜻蛉の命は一夜の秋につき、けむ冷かになりて、
 障子の骨によこたはれり。



夢野の鹿

さゆり花さく、夏の野の
 きよきながれの、岸のべに、

なくなる鹿の、音もすみて、
 四方の山々、どよむなり。

鹿のなくなる、野べ近く

ちぎ高知れる、みあらかに、

あつさ避けさせ、給ふとて、

すめらみことの、いでませる。

きさきと共いにてたいす

高き岡へのくさむらに

置き添ふつゆのいやしげく

蟲のなく音もきほふなり

月をふみつゝもろとも

あゆます影もむつまじく

夏をよそなる夜なくに

鹿の聲さへうちそへて

みけしの袖をひるがへし

吹くや岡への風きよく

さすもさやけき月かげに

今宵も鹿の聲すなり

まろが心もうちとけて

世になつかしき鹿の聲

こゝにいましの手をとりて

ともに聞かばやいつまでも

君のみことばうちきゝて

ゑむもやさしきやた姫の

あはれをじかのうらへもあやまたす射たりけむ
 生ふる小草はそやにして
 さつをや弓を射たりけむ
 とよさかのぼる朝日子のいさい川
 夏の夜はやくあけそめて
 あなかなしやと泣くほどに
 さつをの手にやかゝらむ

くれなるにはふかほばせに
 月もいざよふばかりなり
 野中の真萩ふみしだきさを鹿の
 そびらに小草生ふと見てやぶれけり
 夢はあらしにやぶれけり
 牝鹿はゆめをうち聞きていひけらく
 つまに向ひていひけらく
 小草はやがてまの矢なり
 さつをの手にやかゝらむ

にほふきささきの。手をとりにて。

今宵もたいす。岡の上に、

ふく風ばかり。身にしみて

鹿のなく音は。せざりけり。

いといぶかしく。おもほして

おほみ心も。安からず、

ちの思に。しづみつゝ

ひと夜あかさせ。たまひけり。

心をつくす。さへぎべが

あさのみけにと。かしこみて、

鹿のまゝをぞ。たてまつる、

とが野の奥に。射たりとて、

鳴かぬもつらく。おもほすに、

今まのあたり。さをじかの

空しきからを。見たまへば、

いとみごころ。さわがれて、

きその夜までも。つま戀ひて

つまにわかれて
 夢野に秋も
 たい獨り
 くれにけり

時雨さびしく
 おとづれて

せめて思へば
 ちぎりも夢と
 さめつらむ

かはるもはやき
 ありし世の
 身のはてを

をじかの角の
 つかの間に

いたらぬ隈も
 すぎにし鹿を
 いかにせむ

なけれども

あやにかしこき
 大君の
 めぐみの露は
 野に山に

心ばかりは
 くませども
 とが野におくに
 志のびすと

西のはてなる
 國とほく
 さへぎをうつし
 たまひけり

かゝるさまかと
 君は袖をぞ
 しほらする

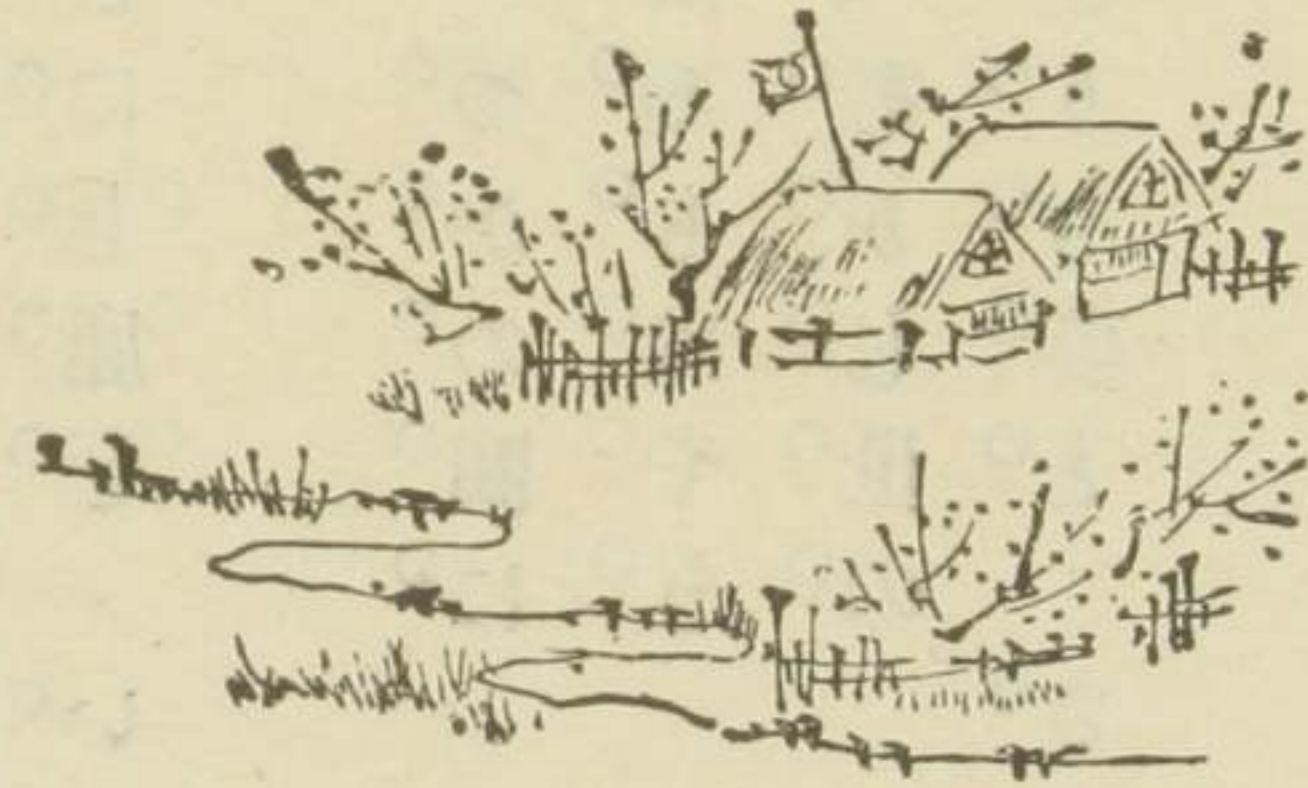
なきし男鹿の
 はかなくも

ばかりにて

地 藏 堂

風のゆくへを見送りて
 ゆうべの露にわびしげに立つ
 さびしげに咲く
 花すゝき
 女郎花

家里遠き 野のなかを
 つらぬく路の かたはらに
 立つや地藏の 堂あれて
 こほろぎの聲 かすかなり、



ままふ牝鹿の影寒く

堂のうしろのくさむらに、

あなおそろしやぬすびとの

右手にかたなを抜きもちて、

身をひそませてうづくまる、

人目をつゝむ頬かぶり

息をころしてひそやかに

路のかなたをうちまもり、

人や來ると待ち居たり、

かねのひいきにくれそめて

うすくなりゆく山もとに、

かへる鴉の影消えて、

いと静けき夕かな。

鳴きしきりたる虫の音の

しばし止みぬと聞くほどに、

人の來れるけはひして、

地藏にいのる聲すなり。

めぐませ玉へ、地藏尊、

病みてこやせるわが母を。

まもらせ玉へ 地藏尊、

旅にいでたる わが父を。

母のやまびを みまもりて、

つくすとすれど いとけなく

力なき身を いかにせむ。

早くかへれよ、 父上よ。

今日やかへらむ 我父の

旅をまもれよ、 地藏尊、

南無地藏尊、 いざ早く、

親子の對面 さしてたべ。

わけてたのむは ぬすびどの

わざはひ多き この日頃、

父に災難 なきやうに

頼みまゐらす、 地藏尊。

堂のうしろの ぬすびとは、

身もうごかさず きゝ居たり。

夕日のなごり といめたる

とよはた雲も消えゆきて、
 すゝきの上に はからずも
 一團の月 まどかなり。

やがてちかよる 足音に

ひとかげくろく 見えければ、

いざとばかりに ぬすびとは

かたなかざして 出でむとす。

こなたに父と よばれば、

かなたにあごと 聲をあげ、

走りてよりて だきあひて、

うれし涙に むせびつゝ、

たゞひとすぢに いのりたる

そのまごゝろや 通じけむ。

あまたのたから 身につけて

父は事なく かへりけり。

堂のうしろの ぬすびとは、

いづちさしてか 去りにけむ。

わが千行の血の涙
 塵のちまたに そぐとも
 くされはてたる世の人の
 腸はよも洗はれじ
 いでや汚れし世の中は
 走るまかばねゆく肉の
 すだくがまゝに任せおきて
 高根の月に われ泣かむ



夕露しげきくさむらに
 残れる太刀のとりわけて
 したゝるばかりぬれたるは
 如何におきわけし露ならむ

親なく、はらからなく、世にひとり残されて、たよる方なき、一人の男の唯一の友として、いねても、起きても、はた身はなさぬ、一幅の畫に、色もあざやかに、たわやめの姿、生けるが如く、かゝれたり。瑠璃に似たるまなこ、情をふくみて、人に媚ぶるさま、えも言はぬに、丹花をかたどれる唇、笑を帯びて語らむと、するも、いと心にくし、髪ふさく、とさがりて、緑雲かしらにみだれ、眉はたわみて、遠山額によこたはれり。肌は大理石に血をかよはせて、細腰綺羅にだに堪へず、豊かなる頬に、るくぼの浪をたへて、纖手かろく扇をかざせる、いとこの世

畫ける美人

かきくらしたる、大空の
 胸のうれひの、ひと雨ふりて、霧るいどど
 涙にのみぞ、解くるなる、

寐しく吹けよ、峯の風。

かなしき音に鳴け、谷の鹿。

ちいにくる、わが心
 泣きつくさねば、はれぬなり。

● * * * *

の人とも見えぬに、めでよろこぶこと限りなし。
 路はむぐらにうつもれて、もりくる月の外には、どふ人もな
 き賤がやどに、この男、畫像を抱きて、細さいのちをつなぎぬ。
 つくくとも見もてゆくほどになつかしさはいやまさりぬ。
 右より見れば、美人の眼も右にそいぎ、左より見れば、美人の
 眼も左に轉じて、さながら生ける人の心あるが如くなるに、
 心いよくみだれぬくるしく、つらき世の中なれど、御身の
 きよきおもわに向へば、御神の前に侍る心地して、心のこれ
 るくまもなし。げに御身は神にや、世にさちなきこの身を憐
 みたまへ、さるにても物のたまはぬ恨めしさ、せめてあはれ
 とひと言は音にいでさせたまへといへど、美人はものいは

ず、おもわばかりは心ありげなるに、もゆる唇をひや、かな
 る畫の上に接することもいくそたび、夜もすがらまどろみ
 もせず、思ひわびつゝ、うき年月を送るほどに、からだつかれ
 果て、竟に病の床につきぬ。あはれ、くれなるに匂ひしおも
 わ、青ざめて、生ける色もなく、肥えし肉落ちて、骨ばかりに瘦
 せさらば、物もくはず、息もたえくになりて、今は旦夕を
 待たぬ命となりけるに、いづくよりか來りけむ、すぐれてう
 るはしき女、枕べにゐて、いとかひくしくみどりす。顔容い
 へば、更なり、衣服まで、畫中の美人につゆたがはず。さては夢
 なるかど疑ひつゝ、もうれしさに、心すがくしうなりもて
 ゆきて、病もとみにをこたりにき。

男が秘藏せし畫には美人もどの如くうち笑めり而かもわ
 らたに玉の如き男の兒の五歳ばかりなるが添へられて美
 人の側に立てり



浮世に語らばむ友もなき朽木のやどにもさすがに春は來
 りぬ切なる胸をうちあけてかたみに袖まぼりつゝ末の松
 山末かけて浪もこさじと契りかはし世にもむつまじく暮
 しけるほどに一人の男兒さへ生れ出でたり錦の上に花を
 添へたらむ心地してせまき家にとみ光みちわたりつ
 春とすぎ秋とくらしてその子五歳になりけるほどいか
 にかしけむ母も子もかき消す如く矢々さりてそのゆくへ
 を知らず男ひたなきに泣きしがやうく身を起して山に
 のぼり谷にくんだり森にわけ入り野をかけめぐりて天に呼
 び地に叫べど山彦の外には答ふるものもなしかくて満身
 の血吐きつくして竟に倒れぬ家はますハ荒れゆきぬ唯

胡蝶

とまれ胡蝶よ、さく花に。

いましを夢を眠れしづかに、いつまでも。

いましを夢を眠れしづかに、いつまでも。

風はこゝろには吹かぬなり。

ねにこそたゝね、ひらくと。

心ありげに、とぶ胡蝶、

春のにしきを、おろし、

神や宿れる、汝がはねに。

にほふ露を、うちのせて、

かはすも軽き、汝がつばさ

天つをとめの、羽衣も

かくやとばかり、思はれて。

なれがやさしき、くちびるに、

あくまでも吸へ、花のつゆ。

わが住むやは、せまくとも、

さくら咲きたり、こゝかしこ。

浮世はとはに、風たちて、

う○ら○に○見○ゆる○ 雨○さ○へ○あ○ら○く○
春○の○日○も○ そ○い○ぐ○な○り○

こ○ろ○許○る○す○な○ や○よ○胡○蝶○

雨○や○け○が○さ○む○ 汝○が○は○だ○を○

あ○ら○し○や○裂○か○む○ 汝○が○は○ね○を○

ほ○ろ○ろ○む○花○は○ お○ほ○く○と○も○

ま○よ○ひ○な○ゆ○き○そ○ 世○の○中○に○

友○と○た○の○ま○む○ 人○も○な○く○

す○み○も○わ○づ○ら○ふ○ や○り○の○宿○

浮○世○の○ち○り○は○ い○と○ふ○と○も○

汝○に○は○へ○た○て○じ○ い○の○す○だ○れ○

と○ま○れ○胡○蝶○よ○ さ○く○花○に○

眠○れ○じ○づ○か○に○ い○つ○ま○で○も○

わ○れ○も○浮○世○に○ た○へ○か○ね○て○

わ○び○ぬ○る○宿○の○ さ○び○し○き○に○



御嶽めぐり

梅にはおそく、櫻には早き四月のはじめ、ひと夜を塵の巷の
 ほかにすこさばやとて、午下、都をたちいつ。春とは云へど、花
 なき武藏野を、汽車にわけゆきて、其の野末の青梅町に着き
 し頃は、夜已に初更に及へり。この町第一の旅館とて、わか住
 む草の庵のいぶせきには比ぶべくもあらねど、旅なれば、な
 ほ、嫌らず思はれ、酒の悪きに、酔を買はむ由もなし。されど、花
 の下臥し、風流の寒さにひきかへて、垢くさき蒲團の中にも
 さすがに夢はまどかなり。
 つとめて、御嶽へとていでたつ町をすこし離れて、金剛寺は

と問へは、村の少女思ひもかけぬ後の方の森を指す。さては
 來過したりとくやめど、遠くもあらねば、ちか路をたづね、隴
 畝の間をよこざりて寺に至る。平將軍の創立とかや、廻廊の
 前に、誓の梅とて、老幹朽ちむと欲して、小幹簇生したるが、花
 已にしぼみて、一半は枝に残り、一半は地に委せり。町の名の
 青梅は、この梅の黄熟せざるより出づとて、音には聞はたれ
 ど、見るかげもなし。その側につたなき歌をさざめる石碑た
 てり。風流に似て、反て俗なるわざも、歌よからば、まだしも、な
 べて名物に旨きものなく、石にさざめる和歌俳句に、名吟の
 わりしためしなく、めくら同士にかだてられ、金あるもの、い
 ものすきにまかせ、巧拙だに自ら知らぬ。徐凝の遺類おほき

に、東坡ならねど、一笑せざるを得むや。

青梅より一里ばかり進み、日向和田ひなたわだに至りて、路はじめて多摩川の岸上に出でぬ。水聲、川身共に遠く、脚下にあり、川をへだて、透迤たる小山の麓に、一帯の白雲、翬として凝つて散らざるは聞き及びたる吉野村の梅花にやど、魂まづ飛びて、左に崖を下れば、斷岸の相迫る處に橋かゝれり。これ名たる萬年橋なるが、先年火災にかゝりて、今はたゞ橋のかたちを存ずるのみなり。その下に假橋を設く、俯しては、急湍水激して蒼龍の岩を噛むが如きを見、仰いでは、燒けのこりたる一本の桁、虹霓の半空を横斷するに似たるを望みつゝ、川をわたりゆきて、吉野村に達す。一村みな花どはこの村のこ

どなるべし。一目千株、また萬株、近きは玉の如く、遠きは雪の如く、梅花、茅屋をついみて、その盡くる所を知らず。花のさかりは、已にさりて、色香はうすれたれど、なほ枝上を謝せざる。さまさだ過ぎたる美女の如し。思ひもかけず、鶯のなく、聲のあまりに、近きに人の反て驚かざる。いもかもしるく、機杼の聲に和して、機織る女のうたふ歌のふしも、かざらずして、自から趣あるに、賤が垣根の覗かるゝは、梅が香のみにもあらざるべくや。小高き處に、天澤寺といふ精舎あり。今日は四月八日とて、水槽の中に、さゝやかなる銅佛を置き、柄杓さへ添へたるは、山奥もかはらぬ灌佛なるべし。眺望開けざるにあらねど、今すこし高からばと思はるゝも、例のあかぬ心にや。

天澤寺をすぎゆけば、小山左右にせまりて、さゝやかなる溪流、路にそへり、山田をすぎかへす男、鋤をといめ、わざ／＼我等を呼びて、君等は御嶽みたけにのぼりたまふにあらずやといふ。然りと答ふれば、このさきに、三條の路あり、その中央の路は、尤も小に、草木にかくれて、それとわき難けれども、これ御嶽へ通ふ路なり。他の路をとりてはあらぬ方にいづべし、心して誤りたまふなどいふ、いたくその厚意を謝して、四五町ゆくに、果して右にわかれたる小路あり、なほよく見れば、その間に小なる獨木橋ありて、それよりつゝいたる細徑かすかに見ゆ、恰も爪つめの字あざの如し、かのまめやかなる農夫の教なかりせば、よもこれを御嶽路とは知らじ、はかなき旅にもうれ

いさは人のなさけなり。

教へられたる細徑をすゝめば、足先仰ぎてやがて小山の峯にいたりぬ。これより路は常に峯をつたひ、峯いよ／＼高くなりて、眼界いよ／＼ひろし。數百仞高く屹立せる大巖を左に見てのぼりゆけば、峯めぐりて路はその巖の上に出づ。こゝに琴平の小龕あり、脚下その底を見ず。前には、群峯われに朝して怪獸の陸梁せるが如し。山のつくる處は武州の平野茫々としてその限を知らず、まばし休憩して半里ばかり行けば、路は平らかなる處かほく、或は下り、或は上る。春未だ焼痕に入らざる童山を越えて、五日市より上る路と相會す。前に山谷を隔て、雲上に聳えて、殘雪のまだらなるは大嶽おほしたけなり。

口ざす御嶽はそれより右に近く、且つ低く、樹木の鬱蒼たる處にして、思ひしよりも低ければ、この時はや已に大嶽を攀ぢむと思ふ心さざせり。遂に御嶽にいたりぬ。
御嶽の巔には、世に名高き御嶽神社あり。いと宏壯なり。盤回せる石磴の下に、旅店、御師おしの家、物賣る家など相連る。さらでだに、善男善女の參詣常に絶えざるに、今日は小祭日なりとて、殊に賑へり。こゝは海を抜くこと三千八百尺、夏は暑を知らずと聞けど、毫も眺望なければ、大嶽にのぼらむと思ふ心いよく、切になりぬ。一旅店の怪しげなる二階に休息し、酒し、飯して、祠前を左に谷に下れば、なよの瀧あり。その名の如く七折せる小瀑なり。側の巉巖をつたひ、よどみに見つゝ、

いて、右にすゝめば、無限の谷に臨みて、翼然たる危巖、落ちむと欲して落ちず、その上に銅製の天狗の翼を張りて立てるも、物すぞし。なほ右に噴岫を攀ぢて、左に下りゆけば、谷の窮まる處、一條の飛瀑潭をへだて、かゝる。このあたり尤も幽邃なり。谷かげに残れる雪をむすびて、噛めば、簌々として、冷氣骨に徹するばかりなるに、心地いとすがくしく、小戻りして更に上りて、那具男なぐをの峯にいたる。こゝは御嶽の奥院おくのあんなり。御嶽より直にこゝに通ずる路の傍に、鸚鵡石の奇あれども、路を異にしたれば、見落しつ。祠下水を賣る翁に路を問ひて、西に山ふかくわけ入り、幾度か残雪を掬して、渴を醫しつゝ、遂に大嶽にいたる。寂寞無人の山とは思の外、一人の老婆

の、休息所を設けて茶を侑むるものあるに、たちよりてしばし休息す。一町ばかり奥に、大嶽神社あれど、まづ山頂へとて四町ばかり崎嶇たる險路を匍匐して、漸く山頂に至りぬ。路すがら雲上に望みし大嶽は、今やわが杖底にあり、遠目は雲に遮られたれども、近く群山を見おろしたる心よ、さ言はむ方なし。乱山の底に臥蠶點綴し、炭やく烟幾縷となく立ちのほれるが雲のすきめより、逆射する夕陽の光をうけて、半はあざやかに、一半はうすぐらく、末は風にまかせて自から消ゆ。北に高かきは秩父の連山にや、こゝは多摩川と北秋川との間に磅礴せる一帯の連山の吉野山あたりより崛起し來りて圓山となり、日の出山となり、御嶽となり、那具男峰と

なり、遂にこの大嶽となり、山勢一頓して、尤も高峻をきはむわれす。すでに御嶽に溪壑の奇をさぐり、こゝに天梯に倚りて遊觀の目をほし、いまにす。幾重の雲をわけつくして、凡骨頓に脱し、心は衣袂と共に飄々として、天氣に颺る。たゞ日の西に下れるに、前路のいそがれて下りて、祠に詣づ。御嶽の祠には比ぶべくもあらねど、高山の上には稀に見る結構なり。拜殿の賽錢箱の側はに十二ばかりのかはゆらしき少女のたゞひとり坐れるは、祠を守るにや。さるにても、魍魎出づべき深山の上の晝もなほものす。ごき處に、唯一人の少女を點せること、のいぶかしく、茶賣る老女に、あれは何者と問へば、祠官の娘にて、父と共に來りけるが、父はさきはと巳に山下

の村に歸りぬ。娘はわれと共に歸るはずなりといふ。澁茶二
三杯のむ程に、老婆の口軽く問はぬに、自ら語り出すやうか
の娘には一人の姉あり。妹よりは更にうるはしく、村の花と
呼ばるゝ美女なるが、去年來りて祠を守りけるに、御嶽より
商人躰の男ふたり來りて、こゝに酒のみ、酔に乗じて、その娘
を呼び來りて酌せしめ、さまざまざれごとなど言ひたる末
歸るにのぞみて、路まで送れといふに、一人はやらじとて、わ
れも共に送りゆきしに、ついでにその娘くれずやといふ。二
百兩出したまは、賣り申さむと、たはむれに云ひければ、こ
はそもいかに財布より金貨銀貨ばらくと、さらけ出すに
膽つぶれ、娘と共に命からく、にけ歸りしが、娘はこれに懲

りて、また山にのぼらず。世には恐しき人もあればあるもの
なり。公等の如くやさしくおほやうなる御方もあるにと一
轉語を下して、はゞとわらふ、これもひかしは鶯なかしけむ、
おどろの奥にも道あれば、草ふかき山里のおうなも、さすが
にせじにはぬからぬに、いらへひ言葉も知らず、いざとて、夕
日に向ひて山を下り、黄昏、檜原村に投宿す。
明くれば、多摩川の上流に出で、ひとて朝日を肩にして、山奥
深くわけ入る。左右みな山なり。山と山相迫りて、其間たゞ一
條の北秋川を餘すのみにて、毫も平地なく、家をたつる餘地
だになければ、勾配いと急なる。麥畑、山の上かけて開けてそ
の上に、往々茅屋を見る。畑のひらけざる處には、立ちのぼる

烟に炭がまのありか自からあらはれてこの山間のなりは
 ひもそれと知られつ五日市あたりへはこび出すにやあら
 ひ炭のたはらを或は背負ひ或は牛にのせていで来るもの
 ひきもきらずおほくは女なるが中に十ばかりなる少女人
 並にあねさひかぶりして角いかめしげなる一駄の大牛を
 手綱ゆたかに領してゆくもいと殊勝氣なり川の流は小に
 岸低く路は直に川身にそひ水と共に萬山の底を縫ひて斗
 折蛇行すさながら二重にたてまはしたる屏風の中を行く
 がごとく回顧すれば山かさなりゆく手にも層嶺面に當り
 て路竟にきはまるかと思はれしも幾度といふことを知ら
 ず山重水複疑無路柳暗花明又一村とうたひけむ放翁の詩

鳴る。木會路にもこの幽邃の趣はあらじと思はれぬゆき
 句今更に靈活なるを覺えて高らかに朗吟すれば山應へ水
 て路遂に山にのぼらむとする處に一軒の茅屋あり就いて
 茶を乞へば一人の老媪ありて慇懃に茶を侑む枯木の如く
 蒲團の中に横はれるはその夫なるべし病めるにやと問へ
 ば自から老衰して已に一年あまり蓐に臥せりといふあは
 れ山間の風雨に鍛ひし岩なす骨も肉も寄る年浪にはえも
 堪へざらむ罪ありいつはりあり血なまぐさく豺狼横行す
 るうき世をよそに八重の山奥に人となり炭を焼き鋤をど
 りて一年又一年七十年あまりの人生の行路罪なくすとし
 て罪なくたち去らむとす草木と同じく朽つといふことを

やめよ。名に驅られ、欲に驅られ、利に驅られ、煩惱に驅られ、はかなき人間の、小智、小慧、小策略を弄して、蝸牛角上に終生營々たる世の所謂偉人豪傑、天地の化に參して、竟に何の補ふ所ぞ。歐洲の野、また那翁の馬蹄を印せず、古來野心のあとには、大鬼、小鬼相望んで、哭すかへりみれば、山はどこしなへに、青く、水は長へに流る。いと、はしきは人間の、いつはりにして、したはしきは自然のまことなりなど、思ひつけつゝ、老媪に向ひて、小河内への路を問へば、その答をまだるしとや思ひけむ、病みさらばひて、聲を出す力もなかるべしと思ひし翁、忽ち眼をひらき、思の外に聲もたしかに、我が爲に路を教ふること、いとねんごろなるに、やがて死ぬ景色も見えず、蟬

の聲の、句さへ思ひだされて、ひそかに涙を揮つて去る。路少しばかりのぼれば、やがて左に山腹をめぐつてゆく。足先や、仰ぐばかりの勾配なり。左は谷を隔て、山あれども眼界はまたせまらず、處々に家あり、畑ひらけ、雞犬の聲、時に相應ふ。山のしづけさは太古の如く、當年秦を避けし民も、かくやと思はるゝばかりなり。ほかくとあたゝかき春の日を、負ひて、心のどかに進みゆきしに、路遂にきはまりぬ。樹陰に一軒の家を認めて、之に就けば、空屋とも見えぬに、人は居らず。今一軒、四五町へだゝりたる處にありければ、それに赴きしに、こゝにも人なし。此あたりには、家はこの二軒のみにて、路を問ふに人なく、いと困じて煙草ふかし居たるに、二三

人づれの童兒來りてわれらを誦視するは洋服着たる旅人のわれらの姿をめぐらしと思ふなるべしおぼつかなしとは思ひながらも小河内に出づる路とへばわらびの如き柔拳に峰巒を指點して路を教ふること太だ明瞭なり教へられたるまゝに山路をよぢのぼること二十町あまりにして遂に峠の上にいる。これよりは下り路と思へば心ゆたかに草の上ですわりふかす煙草の烟の末追うて眼をうつせば思はぬ空に富士の高根夢の如く見ゆ時は十一時を過ぎたり正午までには小河内へとて一呼して下り遂に多摩川の上に出でぬ十町ばかり川上の鑛泉のある處に行かざれば食を得るに由なし。餓を催せることは甚しけれど今日の

うちに青梅に出でむと思ひたれば往復半里あまりあどもどりするに忍びず。一茅店に投じて鶏卵を食ひて假りに午食に充て多摩川の左岸を三里ばかり下にゆきて氷川村に至りこゝに始めて旅舎を得て午食す。こゝは日原川（にっげんがわ）の多摩川に會する所にして旅舎商店相連りたる山間の小驛なり。客室は川に接すれども岸高うして川身を見ずたい深々たる水聲を聞く。翠巒面を衝いて起り白雲來りて人と親む。食終はる頃雨至り次第に甚しくなりければ遂に意を決してこゝにやどりぬ。夜に入りて雨やまず客懐何となくうらがなし。われは歸期を定めずして出で來りたれど雨江は一夜を期して來り青梅にて今一夜とて電報をうち今日は必ず

都に歸る豫程なれば、如何にかせしと心をいためて待つ人
あるべし。今一度打電せむにも、郵便局はなし。即興の蜂腰と
て、

雨ある、春のひと夜をまどろまで、

まち明すらむきみが妻はや。

翌朝早くいでたつ。雨痕地に残りて、空はなごりなく晴れた
り。脚下の多摩川の水、赤くにこりて、溪流の奇その半を失へ
る。はくちをし。仰げば、屏風のごとき。巨巖天を刺し、俯せば、巖
を骨とせる。兩山せまり來りて、相闘はむとするところ。巨靈
咆哮して、一道の溪流、箭を放てる。天狗巖の奇には、思はず足
をと、いめつ。いよ、進めは山ひらけて、眼界やうやくひろ

し。二俣尾村に至れば、川をさること遠く、右も左も畑ひらけ
て、桃樹太だおほく、はや淡紅の花をつけて、のびそめたる麥
浪と相映するも、また春の一觀たるを失はず。對岸は、一昨日
の朝、ふみわけし吉野村なり。ゆふべの雨にも、つゝ、がなく、香
雲舊に依りて、山下の村を罩むるに、契りし人に邂逅する心
地せられ、花神ひとへに、われを待ち、われを造るが、ごときも、
はかなきわが思ひなしにや。

花の下のいさゝ川
 岸べに浪をうちよせて
 さやげば花もわらふなり
 ひとまきり吹く春風に
 いよさゝらぐ　　聲たかく
 水はみだれて流れつゝ

山の影

岸にそびゆる山の影
 さやにうつしてゆく水の
 こゝろも深き淵なれど
 春のはつ風　ふくまいに
 たつや川なみ　音高く
 山をくだきて　狂ふなり

花ざくら

すたれし家の花ざくら
 ありじと共に
 いちもせで
 榮えもゆくか
 春かせに
 枝はかきねを
 うちすぎで
 路ゆく人に
 媚を賣る
 花のこいろの
 あさましや

やつれし姿

四とせいつとせ 臺灣の

南のばてに でかせぎて

くるしき業を せしほとに

やつれにげりな わが姿

色はくろみて 目は落ちて

額ぬかに皺さへ きざまれて

われも驚く、 わが顔の

むかしの様に かはれるて

されど黄金は まうけたり。

坐して食ふに 餘りあり。

いで山の手にて 家たてゝ

世をばたのしく 過してじ。

なほみし女へ みやげには、

金のゆびわや しゆすの帯。

髪のかざりに 珊瑚珠の

ねがけを添へて 贈らばや。

もとの友達 よびつれて

名物の料理 おどらばや。

くむ杯に くだまきて

我が身の上を かたらばや。

道ひろくなり 家増して

むかしの様は かはれども

生ひたちいたる ふるさとの

花の都の なつかしや。

歩む行手に 足袋はだし

はつびを着たる 小男の

いそくゆくを 能く見れば、

むかしの友の 權太なり。

やれなつかしや わが友と

走りて寄りて 名をよべば、

われをうち見て いぶかしみ

そ知らぬ顔に 過ぎてゆく、

ふりし木綿の 前垂に

味噌漉し包みて ちよこくと

歩む女を よく見れば、

むかしなじみし お梅なり

やれなつかしや 戀人と

走りて寄りて 手をとれば、

われをうち見て いぶかしみ

そ知らぬ顔に 過ぎてゆく。

なほゆく路に 思はずも

わが母杖に とぼくと

やれし布子の 袖寒く、

腰をかゝめて 來りける。

やれなつかしやわが子よと

われよりさきに 聲かけて

涙かたでに まろびより

人目もはぢず よと泣く

涙のひまに いひけるは

汝はいたくやつれはて

見違へるほどに なりたれど

よくこそ無事に 歸りつれ

猿 塚

源三窟に世をせばめたる敗軍の將の昔は知らず妙雲寺に
身を潜めたる亡國の美人の昔も知らぬとこ名にし負ふ
鹽原の里からき憂目は今もかゝる白雲の八重立つ山の奥
も浮世のさがに洩れでや心一つに忍ばれて有るにあられ
ぬ身の頼む木蔭にもなほ袖ぬらす青葉々々の雫の末の流
れて清き箒川の水もさすがに六根の塵は掃ふに由なかる
べし

温泉場の雑沓を後にして溪流を溯りてゆくこと幾回山尖
り樹茂りて通ふ人も稀れなる處にさりとは數寄をつくせ

る一構、溪を隔てたる懸崖より一條の窺のかゝれるは、涌き出づる靈泉を引けるにや、圍ひ廻したる黒塗の板塀、一字の粉壁を包みて、水に枕める柴門、更に風致をそへたり。家は新しとにはあらねど、瓦屋根いかめしく聳ぬ。雨にうたれ、風にさらされて木理あらはたる門標に、墨の色なほくろくくと残りて、花村家別荘の五文字、高くしるし出されたるは、年久しき住家とおぼゆるに、此二三年のほどは、さゝほる事ありてや、避暑の時節にも、紅葉狩の時節にも、柴扉むなしく鎖されて人待顔なりしが、此の夏よりは、俄に人のけはひして、帚痕つねに清らかに、木末より立ちのぼる煙にも、住む人ありとは知らるゝに至りたれど、なほ山は太古の如くにして、笑

語の聲だに聞えず、門の戸は開きたるまゝにて、出入りする人はなく、唯かどづるゝ客どては、迎へざるに、入り来る白雲のみなり。

峰の松風の如くにして、更に清く、溪水の音に似て、特に澄みたる一種のうるはしき音の時々聞ゆるに、村人ははやくも耳をそばだてしが、誰かまづ影を吠えけむ。此度は旦那夫婦は來らで、その惣領の息子殿、新に迎へたる夫人を伴れて、避暑かたぐゝの新世帯、その若旦那はたびぐゝ此の地に來りたれば、村一同どくより見知りて、賞めぬ者もなき好男子なるに、そのまた新たにむかへたる花嫁御も、それはくゝ光るやうな顔かたち、當地名物の高尾からも釣の來そうな美人、

まことに揃ひも揃うた一對の活人形じやなどはかなき噂、十里の外までも傳はりぬ。

噂はこれにといならず如何なる故にか、此一對の活人形はとかく中が悪く、まさか脊中合せの中ではあるまじけれど、打ち解けて睦みあふ様も見えず、聳殿が絶えず佛頂面をすれば、花嫁は機嫌とりかね、我とうち萎れて、緑の袂つねに玄めりがちとは、さてくゝ氣の毒千萬など、他所の疝氣を頭痛に病むものゝ多きも可笑しや。

かく村の者どもが旦那々々ともてはやして、いろくゝに噂するも故なきにあらす。ひろき東京にても、花町伯と云へば限りある華族のうちにて、取分けて世に時めき、玄かも財

産家の中にかずまへらるゝ華族なるが、その子文曆と聞えしは、今年二十三歳の若盛り、新に迎へたる夫人は梅子とて、これも華族の中にて名うての美人、此の一對の新夫婦が島臺の前に、三々九度の杯を酌みかはしたる後、間もなくつれだちて、此地に來りしは、避暑をかねたる西洋風の結婚旅行どぞ聞えし。

木○葉○の○落○つ○る○も○可○笑○し○き○娘○盛○り○の○身○も○人○の○家○に○ど○つ○ぎ○て○は○藥○に○し○た○く○も○心○底○か○ら○笑○ふ○折○は○少○な○く○第○一○に○良○人○の○氣○に○入○る○や○う○に○心○を○碎○け○ど○さ○り○と○て○夫○の○機○嫌○ど○り○す○ぎ○て○舅○姑○の○方○を○か○ろ○そ○か○に○す○る○や○う○に○思○は○れ○て○は○な○ら○ず○貴○き○家○なれば、勝手向の面倒見るに及ばざれど、小姑への氣兼云へ

ば更なり、何につけ、かにつけ、心配の絶ゆることなく、小さ
 き胸のはりさくるばかりなるを無理に抑へ、外部を粧ひて
 強いて笑ひ顔を作くらねばならぬこと、は思ひの外、花村
 家には、小姑といふもの一人もなく、兩親はあれども、舅は柔
 和な人柄、白き鬚を撚りつゝ、にこゝと笑ひて、小むづかし
 き様子更になく、姑もお人善にて、少しも氣がねがいらぬに、
 先づ安心して、さて本尊の夫は如何にと見るに、さゝしより
 も、ささりたる好男子、中肉にて色白く、口元締りて、糸をひく
 目元の可愛らしく、人柄もすぐれて、ただやかなるに、うれし
 いやら、耻しいやら、二三日はまるで夢中で過しけるが、鹽原
 へ二人つれの旅行と相談まどまりて、梅子ははや極樂にで

も行くやうな思ひをなせり。

旅行の伴には、梅子の里方よりつれ來りたる徳と云ふ腰元
 に福といふ花村の女中、外に御飯焚、水仕事、庭の掃除などの
 世話する老人の安兵衛夫婦を伴れて、一行すべて六人なり。
 上野より那須まで新夫婦は共に上等列車に乗りたれど、人
 目あれば打ち解けたはなしも出來ず。さて那須より鹽原迄
 五里半の間は人力車をやとひ、第一は文鷹の車、次は梅子の
 車、それより荷物車に至る迄都合十輛、那須野の原に砂烟立
 て、ゆく道すがら、梅子はせめてお顔をと思へど、見ゆるは
 たゞ後姿、肩殺げ、領足長くして、髪は漆よりくろく、如何にも
 立派なれど、隴をだに得ざるに、望蜀の念やみがたく、跡の車

なる腰元どはなし合ひて笑ひ聲でも洩さば振りかへる事
もやど思ひていろく譯けもなき事語りて笑へどさらに
其甲斐なければいよくもどかしくつひに困らじてあな
たあの高い山はど半ば問ひかくればどの山と云ひつゝ後
むくに思ひ設けたる勇氣忽ちくぢけてかゞくもまた後む
きて腰元ど顔見合はすればこれはまた意味ありげなる微
笑を洩すに心ますく惑ひて滴る汗をぬぐひも敢へずあ
れは何と云ふ山でせうア暑いこと。

如何に佛性な人なればとて舅姑の側は親だけに矢張り氣
苦勞のある都の家を去りて深山の奥のその奥に自から手
鍋さげる骨折も入らず人目としては下女下男のみなれば別

に遠慮も入らず水も入らぬ二人暮しにて仕たい事仕放題
と待ちにまちし當て事はやくも何やらと共に前からはゴ
れぬ鹽原に来てから氣をつくれれば何が夫の氣に入らぬか
かはやうと朝の挨拶いへどいらへは無くかやすみあそば
せと夜の辭儀すれど取りあはず何をいうてもふりむかず
風は何處を吹くといふ風情なるにこれはどうしたこと
氣も氣ならず獨り心をくだくのみにてあらし風にもあた
らざりし箱入娘のよき思案も浮ばずあはれや人の保養に
來る塵外の仙境に初めて夏瘦の味を覚えぬ。

一室にたれこめてふさがちななる夫の身の上慰さめむや
うもなきに兩親の來らぬはもつけの幸と思ひしはかへす

くも勿体なやこんな時に姑でも居られたらばと今さら
くやめども詮なし今日も朝からたてこめて居らるゝに少
しは慰さむる事もやとて梅子は自から急須をもち出で、
茶を點じ茶受けはお跡からとて差出せば一寸ふりむきて、
茶受けも入らず茶も飲みたくなしそなたもこゝへは來な
くてよいそなたはうちにばかりぐづぐづせずと折角鹽原
に來たからは高尾塚も見て來るかよし天狗岩も見て來る
がよしさては鹽原の七不思議妙雲寺に納めたる高尾太夫
の襦袢など見物するものは多かるべしこゝには無用呼ん
だら來いと情けなくあら、しき言葉の風を柳どうけな
がしてハイとやさしき返事はしながらふりむきてほろり

どこのぼす温き露にあたら化粧の白粉もはげぬ
夏の夜ふけて河鹿の聲高く川上より人間の外の秋たちて、
そよぐと吹き來る風に岐阜提燈の火影涼しさうにゆら
ぐ軒端の柱にもたれて思ひに沈める梅子の前に腰元の徳
はうやしく手をつかへてお嬢さま、アレわたくしとし
た事かやつぱり口癖になつてホ、奥様もうおやす
みあそばせなど云へば徳やわたしはもうねたつて寐られ
はしない一層死んで仕舞ひたいはといふ、コレ奥様ど
んでもないことおつしやいますなこれからが花の御身の
上なせそんないま、しい事をかつしやいますでも徳や
お前わたしの身になつて御覽それはもう鹽原へ來てから

一、月、も、立、つ、け、れ、ど、づ、い、や、さ、し、い、お、詞、一、つ、か、け、て、下、さ、れ、ず、
 何、が、御、氣、に、入、ら、ぬ、や、ら、ふ、さ、い、で、ば、か、り、入、ら、し、て、ほ、ん、に、マ、
 ア、ど、う、し、た、ら、宜、か、ら、う、と、は、や、涙、聲、な、り、御、尤、で、ご、ざ、ひ、ま、す
 と、も、わ、た、く、し、だ、つ、て、ど、の、位、氣、を、も、ん、だ、か、知、れ、ま、せ、ぬ、お、福
 さ、ん、に、聞、い、た、ら、様、子、が、知、れ、う、か、と、思、つ、て、色、々、な、ぞ、を、か、け
 て、見、ま、し、た、が、あ、の、人、も、新、參、な、の、で、よ、く、は、知、ら、ず、安、兵、衛、さ
 ん、に、聞、い、て、見、ま、す、と、ち、ら、と、噂、に、聞、い、た、と、や、ら、で、し、か、と、は
 わ、か、ら、ね、ど、此、の、人、の、申、す、に、は、若、旦、那、様、は、ご、く、内、氣、な、お、と
 な、し、い、蟲、も、殺、さ、ぬ、よ、い、御、方、書、見、が、お、好、き、で、お、部、屋、に、籠、つ
 て、ば、か、り、居、ら、し、た、の、で、も、し、や、病、氣、が、出、は、せ、ぬ、か、男、が、あ、れ
 だ、も、困、つ、た、も、の、と、御、兩、親、の、壁、訴、訟、も、あ、つ、た、位、そ、れ、が、ど、う

し、た、拍、子、に、か、ふ、と、お、出、好、き、に、な、つ、て、他、所、に、お、ど、ま、り、な、さ
 る、事、も、た、び、く、い、つ、も、そ、は、く、し、て、尻、が、落、付、か、ぬ、御、様、子、
 こ、れ、で、も、又、困、る、と、御、兩、親、の、異、見、な、さ、る、れ、ば、節、が、細、か、で、面
 白、い、な、ど、聞、き、な、が、し、て、外、を、内、な、る、御、身、持、の、末、小、露、と、か
 い、ふ、尤、物、に、お、目、が、ど、ま、り、是、非、女、房、に、ど、ま、で、増、長、な、さ、る、
 に、お、人、の、よ、い、御、兩、親、で、も、こ、れ、ば、か、り、は、ゆる、さ、ぬ、と、以、て、の
 外、の、御、立、腹、に、て、ろ、く、く、外、へ、は、お、出、し、な、さ、れ、ず、そ、の、中、に、
 そ、の、女、は、も、ど、の、馴、染、に、ひ、か、さ、れ、た、と、か、病、氣、で、死、ん、だ、と、か、
 そ、の、邊、は、た、し、か、に、は、わ、か、ら、ざ、れ、ど、御、可、愛、想、に、若、旦、那、さ、ま
 は、籠、の、鳥、同、然、ふ、さ、い、で、ば、か、り、入、ら、し、て、食、事、も、す、ま、ず、血
 色、も、衰、へ、て、お、命、も、危、い、や、う、な、次、第、此、上、の、藥、に、は、よ、い、嫁、を

迎へて氣をかへさすに越したることなしとて、方々おさがし
あそぼした末に、あなたさまと御縁談がどゝのひましたと
の事でまことに奥さまは御不仕合せなやうなもの、若い
時の女狂ひは誰もありがちのこと、それに、根が利發な、誠の
あるお方ではあるし、あなた様がお氣に入らぬといふ譯で
もございませぬば、いつまでも此の通りではございませ
い。待てば甘露の日和とやら今少しの間氣長う御辛抱あそ
ぼせやと云ふ折しも、俄に椽側踏みならしていで来る人あ
るに、兩人ともおどろいてふりかへれば、今までもうはさし
たる文磨なり、寢衣姿しどけなく、よろゝいと歩を移しなが
ら、此方を一目見しばかりにて、直ぐに庭下駄穿いて出でい

ゆく、に何處へと、咎がむれど、何の答もなく、物をさがすが如
く、あちこち見廻したりしが、やがて扇骨木の蔭なる春日燈
籠をじろく見えて可愛や、茲に居たかどて抱き付きぬ。
此の夜月傾きて草木も眠れる頃、ひそかに別莊を忍び出で
て後の山を攀づる一人の男、手に短銃を提げて、血走る眼に
天地を睥睨するさまものすこくもまたおそろしく、陰風螢
火を吹いて、山氣腥き苔の細路に座を占め、地に俯して考ふ
る所あるが如く、天を仰いでまた考ふる所あるが如くなり
しが、はては山の端の月を睨んで待つて下され、今行きます
と、唯一言云ふより早く、用意の短銃喉に向けて、撃鐵引けば
神機一發、おはれや木の間より落ち来る猿一匹。

うとくどせし寢耳に水ならで、鐵砲の音は、合點の行かぬ
 こと、枕を蹴つて起き上りたる、梅子、氣のたしかなる性質
 として、側にふせりて、いざ、たなくも、大の字、畫いたる、寐姿の、ム
 ニヤ、くど口を動かす、腰元を起しもせず、直に夫の部屋に
 かけつけて見るに、夫のあらざれば、さてはど心も空に、音せ
 し方をさして、雪よりも白き素足にけはしき巖角踏みつゝ、
 たどりゆく、苔の細路に人の形して、仆れたるものあるを、月
 影にすかし見れば、まがふやうなき我夫の亡骸なり。
 梅子はあまりのことに言葉も出でず、夫の亡骸抱きてしば
 し涙にくれけるが、漸く氣がつきて、よくく見るに、體には
 丸の痕なく、半點の血痕もなくて、側に一匹の猿、鮮血に染み

て仆れたり、これは意外の仕合せと小躍し、ちよるくど滴
 る、清水を手に掬ばむとするに、おほかた洩れければ、口より
 口にうつし、文曆様と二聲三聲、口を耳につけて呼びたつれ
 ば、忽ちむつと起き上り、いたはる妻をきつと見て、誰かと思
 へば、梅子だな、そなたはマアどうして此の世へやつて來た
 ど、問ひかくる言葉はよくも聞かす、夫の無事な顔ながめて、
 漸く胸をさすり、ヤレく嬉れしや、お怪我はなかりしか、大
 事のく御身の上、なぜ死ぬる氣にはかなりなされたも、し
 死なれたら御兩親の跡の御歎は何と思召す、そして云は
 んとするを遮り、その恨みは、娑婆で言ふこと、かく冥途にて
 落ち合ふ上は、最早何ことも言ふてくれるな、父母の歎きも

かもはるれど、所詮一度は死ぬる命なれば、いたづらに浮世
 で御苦勞をかけむよりは、はやく死んだ方が、反つて親の爲
 めかと思つたのだ。それはさて置き、そなたはマアどうして
 冥途へやつて來たと、變りし言葉に、それと悟り、わたしもか
 跡で死にました。二世の夫を先立てどうしてひとり生存へ
 て居られませう。御身の仆れし所を去らず、同じ鐵砲にて、ヤ
 ヤ、死んで呉れたか、うれしいぞや。したがコレ、梅夫婦といふ
 は、名ばかりで、一夜も枕をかはさぬ夫の爲めに、命を捨つる
 そなたの誠心身に、しみて勿體ないとして、暫し涙に暮れにけ
 り。
 つくくと梅子の顔をながめて、テモマア綺麗な顔かたち、

そのまた顔よりも綺麗な心柄、娑婆に居た時に、よしやその
 心柄には氣がつかずとも、なせ其の顔が目につかなんたら
 う。ア、おれが悪るかつた、娑婆の事はみな許して呉れよ
 と云はれて、梅子はうれしくも、耻しくも、袖かみしめて、じつ
 と見上ぐる眼に、えも言へぬ愛嬌の溢るゝ有様は、さい波清
 き海面にうらゝかなる朝日影さすが如し。
 その御言葉はうれしけれど、まだ小露とやらに御心残りて
 又此の上にひよんな事でも遊ばしたら、わたしや、どうせう
 かど、それが悲しうござりますと云へば、そんな事はもう云
 うて呉れるな。我も娑婆に居た時分は、女一匹のために世を
 厭ひ、世を厭ふたる末、鐵砲往生までしたる大馬鹿者なれど、

此の世に來ては、もはや、そんなうつけものでは無いぞや。浮世にては、厭世だの、樂天だのと、己れの小さいこの尺度を以て、妄りに天地の意をはるか學者の出來損ひもあれど、悟つて見れば、樂天もなく、厭世もなし、おれも、娑婆に居た時分、これ位の事は知らぬでもなかつたが、心が迷うた、悟りが全く開けなかつた。コレ、梅、おれ、娑婆に居た時とは、全く別の人だ。それでも、娑婆の契りは、決して忘れない。そなたの笑顔の、見ゆる處が、おれには、第一の極樂淨土。サア、是から何處へでも、一所に行かう。あそこに家が、一軒見えるが、何だか、娑婆に居た時、住むだ、鹽原の別荘に似て居る、奇跡な事もあるものだと、悟れるが、如くにして、どりどりのない事云ひつゝ、梅

子の手を執つて、歸り行くに、遠村に、鶏の聲して、夜は、丑三を過ぎぬ。山は、舊に依て、高く、水も依然として、青く、墜露雨の如き。木の間より、覗き込む。片月の光、冷かに、山の奥の、浮世を照せり。

桐の散りそめて、四山やうくうらさびゆく、に引きかへ別荘は、俄に賑はしく、笑聲、夜、彭祖を驚かして、何となく、春めきける。が、門外の、小高き處に、建てられて、文字も、鮮かに、猿塚と刻れたる、一片の、石塔、高尾塚と、共に、鹽原の名物となりぬ。



松 杉 問 答

山もどに おふる杉の樹

我はしも

いたゞきの松にかたらく、
谷にうもれて、
てらす日のめぐみにも洩れ、

世の中の

さかえもさちも
よそにしてい
年をへつるに、

白雲の

うへにそびえて
天の下ゆたに見下し、

世の塵を

遠くはなれて
遠くはなれて

日◎の◎ひ◎か◎り◎

大◎空◎の◎神◎に◎も◎近◎く◎

な◎れ◎こ◎そ◎は◎
う◎ら◎や◎ま◎し◎け◎れ◎

峯の松

答へけるやう、

高◎山◎も◎世◎の◎外◎な◎ら◎ず◎

どりよるふ

岩根こいしく

どきじくもみ雪つもりで、

夏もなほ

吹く風さむみ

幹まがり枝もちいむを、

大空の

あらしをよそに

睢 城 陽

大地をまきて おしよすそ
 安祿山の はたかせに、
 二十四郡は なびけども、
 なびかぬ義士の 鐵石心
 張巡許遠が たてこもる
 心もかたき 睢陽城。
 雲霞のごとき 大軍を
 どいめさへて 守れるは
 怒濤さかまく うなばらに、

谷川の 清き たけ
 やすらかに 世をすこす
 なれこそは うらやましけれ
 はびこる 根もうるほひで
 ながれこそは うらやましけれ
 直く生ひたち

いはほの立つが ごとくなり
城にこもれる つれづれの
睡氣さましに たちいで、
當るがまゝに 薙ぎたふす、
獅子奮迅の いきはひに、
及向ふ敵は なけれど、
聲援もなき はなれ城、
兵士はおほく 討死し、
糧食もはや つきにけり、

(霧雲歸り來る)

張巡よくこそ無事に、霧雲どの、

計遠進明へのつかひ 大儀なり、
萬春かなたの答は いかによや、
霧雲まづひと通り 聞きたまへ、
羊のむれに おほかみの
躍り入りたる ごとくにて、
忠義に凝りし たちからの
つゝかむ限り きりまはり
はらふも強き 太刀風に
ばらくばつと 木の葉武者
にぐるを追うて 一方の

血路をひらき やうやくに
進明の陣に つきにけり。

雲も睢陽の 要害は

江淮第一と 聞えたり。

かの城もしや 落ちもせば。

賊はますく 時を得て

天下にひろく 跋扈せむ。

さらに糧食 はやつきて

城はいよく 危きに。

一臂の力 そへてんや。

一口もはやく 援はむと、

われも心は はやれども、

兵備は未だ とゝのはず、

いま暫くは 待たれよと、

言葉たくみに 濁らせて、

われをば長く といめむと、

酒宴に添ふる いと竹の、

ふし面白く みてなせり。

雲城中すでに 食つきて、

ひと月あまり 人々は、

米ひとつぶも 口にせず、

木の皮のみを 食へるを、

われいまひとり 美酒に酔ひ、

佳肴に飽くに 忍びんや、

よしや口には 食ふとも、

いかでか咽に くだるべき、

御身は食まずや 唐の祿、

御身は受けずや 唐の恩、

さても義を見て なさるるは、

これ勇なきの 匹夫ぞや

御身強兵を もちながら、

賊にくみせず 官軍に

力あはする こともなく、

手を袖にして たゆたふは、

忠をわきまへ 義を知れる、

人の所爲には あらぬなり

慨然として たちあがり、

進明をきつど ならめつゝ、

やつと呼ばはる ひど聲に

指をくはへて 噛みおとし、

口○に○ふ○く○め○る○
鮮○血○を○
空○に○む○か○ひ○て○
吐○き○出○せ○ば○
堂○一○面○に○く○れ○な○る○の○
霧○ぞ○さ○つ○と○
立○ち○の○ぼ○る○

雪われは使命を 身におびて
かなたに行きし 甲斐もなく
使者の一分 たゝぬなり。
もとより惜しき 身ならねど
賊のほろびむ 時までは
なほすてがたき このからだ。

運命つきむ あかつきは
公等どこゝに もろともに
城をまくらに 死なばやど、
断ちたる指を どゝめ置きて
恥をつゝみて 歸り來ぬ。

花も實もある ものゝふの
心のそこを くみわけて、
こぼす涙や そでの雨
一座しばしは 聲もなし。

遠運命こゝに きはまりぬ。

今は人をば 頼むまじ。

公等と共に この城に

武士のかばねを さらしてむ。

巡さるにてもかく 餓ゑはてゝは、

太刀をふるはむ よしもなし。

今日はからずも 肉を得ぬ。

いざ近寄りて もろどもに

食ひたまへや、 あくまでも。

眷こは近頃の珍味なり、

そも如何にして 得たまひし。

巡何をかくさむ これはこれ

我が亡妻の 肉にこそ。

雲夫人の肉とや、 こはなんと。

巡公等驚く ことなかれ。

妻がいまはの こゝろざし

かたりいだすを 置きたまへ

言ひ甲斐もなき 女子の身の

御國につくす 術もなく

死ぬに死なれぬ このからだ

むなしく野邊に くちむより

せめて忠義の
ますらをの
うゑたる腹を
こやしなば
數にもたらぬ
賤が身の
世にありがたき
ほまれなり。

巡あはれ公等が
この月日
食乏しきも
かへりみず
たいひと筋に
忠勇の
道をまもれる
心根は
わが肌さきて
もてなすも
なほ足らざるを
覺ゆるに。

いまその餓を
よそにして
妻のいのちを
惜まむや。

食ひたまへど
すゝむれど
答ふるものは
絶えてなく
鬼を欺く
ますらをの
目にも涙の
ひと時雨
袂をしぼる
ばかりなり。

巡さらば公等は
わが盡す
好意を無にし
たまふかや。

違かく言はるれば 是非もなし、

烈女の肉を 賞味せむ。

卷烈女の肉を 賞味せむ。

雲われもその肉 賞味せむ。

一時は餓を しのげども、

いかでか長く つゞくべき。

うたれくゝて 生き残る

決死の勇士 四百人

國家のために 身をつくす

心ばかりは いさめども、

無残や饑に 病みはてゝ、

今は手足も たゝぬなり。

(兵士入り来る)

兵士覺悟めされよ、賊兵は、

はや城門に 押し入りぬ。

巡いざや最期の 軍せむ。

用意はよきか 許遠どの。

遠嗚呼無念やな 腰たゝす。

巡そなたは如何に 霧雲どの。

雲無念や、われも 腰たゝす。

巡萬春どのは 如何にぞや。

春われも無念や、腰たゝす。

張巡ひとり立ちあがり、
進むとすれど、よろしくと、
たちろく足を、さいへかね、
つるぎを杖に、とまりて、
無念の涙はらなくと、
西に向ひて、伏し拜み、

巡臣張巡が 運拙く

力も今は つきはてぬ。

生きて陛下の大恩に
むくいまつれる事もせず、
ひなしく露と消ゆる身の
いまはの一念願くば、
鬼どもなりて思ふまゝ、
はらひつくさむ、逆賊を。

(賊兵亂入して諸士を捕ふ)

死ぬる今はも色かへず、
まなじり裂けて血を流し、
賊をのいしりていさぎよく、
嵐にちるや花ふいさ

見よや情も ぶかくさの
 少將は雪に うもれけり。
 見よやちぎりし 橋のもと、

尾生は水に おぼれけり。

百合を折らむと たちよれば、
 ゆりのもとには 蛇すめり、
 にはふ女の やは胸に、
 つらやづるぎを かゝすめり。

女ごゝろ

かをりも深き 双廟に、
 物のおはれを といめけり。



柳の糸

春のひかりを うちよせて

ふくや川べの ちち風に、

なびくと見せて またかへる

こゝろもつらや いとやなぎ

なびきもはてぬ ものならば、

よそによきても 吹かましを、

にくや小枝の なよやかに

吹きさしぬれば まねくなり

女ごゝろの まことなき

かりの契りの はかなさは、

宵にほのめく いなづまの

有るかと思れば 消ゆるなり



かたみの言葉

川をわたりて ほそながく

くしい柳の 影きえて

ふく秋風の 末とほく

夕日は山に 落ちにけり

住みもなれにし わがつまの

かどべの水に 葉もくちて

風にえ堪へぬ かね蓮の

花のさかりも 夢なれや

たちいで、行く つまの家

これをいまはの 見納めに

見むとはすれど 見えわかず

空もなみだに くもりつゝ

にしきの衣 玉の輿

心もそらに あこがれて

いさみて来にし 道のべの

草木をみるも はづかしや

年のとせを 夢とみて

今はさださへ 過ぎし身

色もうすらぎ 香もうせし

おいぎの花を 誰か折る。

親同胞は うせはてゝ

還らむ家も なけれども、

いでねばならぬ つまの家

せめておほへよ、 夜の霧。

千草にむせぶ 聲はして

空に消えゆく 木枯しの

行末どほき 荒野原 吠ゆるなり。

まがみは月に 吠ゆるなり。

はやも家路に かけりてよ。

わが身を送る 小姑の

ふかき情も なかしくに ばかりずや

かなしさそふる ばかりずや

われのとつぎし そのかみは、

いましは猶も いとけなく、



今[○]の[○]我[○]身[○]に[○]
 う[○]き[○]た[○]る[○]人[○]に[○]
 戀[○]す[○]る[○]な[○]

せ[○]め[○]て[○]か[○]た[○]み[○]と[○]
 か[○]ざ[○]し[○]に[○]添[○]へ[○]む[○]
 こ[○]の[○]葉[○]も[○]

遺[○]し[○]お[○]く[○]
 こ[○]の[○]葉[○]も[○]

戀[○]知[○]り[○]が[○]ほ[○]の[○]い[○]と[○]い[○]さ[○]よ[○]

け[○]い[○]を[○]か[○]し[○]ら[○]に[○]
 遊[○]び[○]た[○]は[○]れ[○]し[○]
 身[○]な[○]り[○]し[○]を[○]

寄[○]す[○]る[○]も[○]は[○]や[○]き[○]
 年[○]浪[○]の[○]
 ら[○]う[○]た[○]け[○]て[○]

む[○]か[○]し[○]我[○]身[○]の[○]
 同[○]じ[○]よ[○]は[○]ひ[○]と[○]
 な[○]り[○]に[○]け[○]り[○]

ね[○]よ[○]げ[○]に[○]見[○]ゆ[○]る[○]
 若[○]草[○]の[○]
 な[○]よ[○]か[○]に[○]

人[○]を[○]見[○]る[○]目[○]も[○]
 少[○]女[○]姿[○]も[○]
 は[○]ち[○]ら[○]ひ[○]て[○]

國家の盛衰

青丹よし奈良の都は荒れはて、伽藍徒に古の名残を留め、
 星月夜鎌倉の府は廢れつくして、陰鬼空しく雨に哭す英雄
 の骨も朽ちてはまた土塊と擇はず美人の髑髏時に鋤犁に
 觸れて出づるも誰か當年の俤を認めむ東流の水一たび逝
 いて復た返らず人間の富貴果して能く幾時ぞ塞翁の馬上、
 歲月徒に過ぎて邯鄲の枕頭芳夢早く覺めぬけにや祇園精
 舎の鐘諸行無常の聲にひいき沙羅双樹の花盛者必衰の色
 に出づ萬里の長城未だ全く成らずして山東既に亂れ坑灰
 なほ温かにして咸陽の宮殿三月紅なりあはれ萬世無窮と

期せし始皇か遺圖も忽ち二世にして盡きぬ盛なる昔豈に
 竟に久しからんや。
 干戈天下に旁牛して兵馬倥傯肝腦長へに地に塗れ腥風到
 る所に吹きすさぶ間は文化の芽の萌さむ由もなけれど一
 たび馬は華山の陽に歸り牛は桃林の野に放され堯雨舜風
 太平の氣象融々として起るに及びて文化の芽茲に始めて
 萌す太平愈續きて文化いよよ進む文化いよよ進みて、
 生活の程度いよよ高まる所謂治に在て亂を忘れざるの
 危機實に此際に胚胎す祖先百戦の山河に生れ出で、目に
 旌旗の翻るを見ず耳に鞀鼓の轟くを聞かず文恬武嬉安き
 に慣れてまた危を想はず人益利口になりて益死の惜しき

を、知、り、欲、に、趨、り、利、に、就、き、舌、頭、に、は、能、く、風、を、生、ず、る、も、腕、は、
風、を、捫、る、の、力、だ、に、な、く、風、俗、の、奢、移、に、赴、く、に、つ、れ、て、人、心、軟、
化、し、柔、化、し、終、に、腐、敗、す、文、化、の、餘、弊、是、に、於、て、極、ま、る、一、且、緩、
急、あ、ら、ば、安、ん、ず、能、く、之、に、當、る、を、得、ん、や、天、下、は、も、と、よ、り、殺、
伐、の、氣、多、く、し、て、は、能、く、治、ま、る、も、の、に、あ、ら、ね、ど、水、靜、か、に、な、
れ、ば、則、ち、腐、敗、す、文、化、長、く、續、け、ば、則、ち、亂、世、に、養、成、せ、ら、れ、た、
る、美、風、全、く、消、滅、す、敬、虔、の、心、は、阿、諛、の、心、と、な、り、剛、氣、の、習、は、
し、ば、柔、弱、の、習、は、し、と、な、り、敦、厚、は、輕、薄、と、な、り、誠、實、は、詐、偽、と、
な、り、義、理、は、黃、金、と、代、り、忠、臣、愛、國、の、念、は、自、利、私、欲、と、代、り、天、
眞、爛、熲、の、態、は、矯、飾、妖、粧、と、な、り、か、く、て、國、家、の、元、氣、内、に、盡、く、
外、に、一、時、の、盛、觀、を、呈、す、る、も、瓶、裡、の、花、の、か、く、久、し、か、ら、ず、し、

て、自、か、ら、枯、れ、ん、と、す、こ、れ、別、に、耳、新、し、き、説、に、も、あ、ら、ず、歴、史、
は、實、に、吾、人、に、向、つ、て、常、に、之、を、語、る、な、り、

世、界、の、文、化、は、も、と、中、亞、細、亞、高、原、よ、り、出、で、ぬ、而、し、て、印、度、は、
亡、べ、り、波、斯、は、亡、べ、り、ア、ッ、シ、リ、ヤ、は、亡、べ、り、埃、及、も、亡、べ、り、荒、
涼、た、る、山、河、當、年、の、殘、礎、を、覓、め、む、と、す、る、も、ま、た、得、べ、か、ら、ず、
歌、舞、の、地、鳥、雀、空、しく、悲、し、み、古、塔、月、影、の、寒、き、に、鎖、し、蔓、草、武、
夫、の、夢、を、封、す、夕、陽、に、む、か、し、を、問、へ、ば、悲、風、千、里、よ、り、來、り、荒、
墳、に、英、雄、を、吊、へ、ば、零、露、長、へ、に、冷、か、な、り、嗚、呼、榮、え、し、國、は、亡、
び、ぬ、文、化、の、最、も、早、く、開、け、し、國、は、最、も、は、やく、亡、び、ぬ、而、し、て、
取、て、之、に、代、り、し、者、は、當、時、未、だ、榮、え、ず、文、化、の、開、け、ざ、り、し、國、
に、あ、ら、ず、や、

希臘は歐洲中にて最も先きに開けし國なり。其燦爛たりし文化は、今なほ之を討ぬるに足る。而して希臘は、紀元前はやくも、北方の文化の光被せざりしマセドンの爲に征服せられぬ。波斯は希臘よりなほ早く開けたる國にして、希臘をも夷蠻と侮り、幾度の大軍を發して之を討ちしが、波斯はど文化の古からぬだけに反て兵力は強く、果てはマセドンより起り、未だ長く希臘の文化の空氣を呼吸せざる歴山王が鐵蹄の下に蹂躪されぬ。かくて、豪氣入紘を蓋ひ、雄圖世界を卷きたりし歴山王も、一たび波斯の空氣を呼吸し、その女子のやさしき手振お接するに及びて、酒に荒み、色を漁し、爲めに其天命を縮めて、夭折せり。歴山王は實に劍を把て波斯を倒

せり、而して波斯はまた文化の暗刃を以て之を報したりといふも、必ずしも過言にあらず。まことや宴安は鳩毒なり。看來れば、英雄の事を誤るもの、獨り酒と色とのみにあらざるなり。羅馬は希臘に次いて開けし國なり。其強盛なること、實に世界に比なかりしも、文化の餘弊は、其元氣を銷磨せしめぬ。百代の勇王、エキサンチーブスを辟易せしめ、萬古の名將、ハンニバルを囚ましたりし當年の羅馬人の子孫も、あはれや、アルブル以北の野蠻人の爲に亡ぼされぬ。其餘、大にコンスタンチノーブルに榮えて、第二の希臘を現出せしも、これも亞細亞にて未だ開化せざりし土耳其の爲めに滅せられて、

其文華も一時は、當時始めて用ゐ出したる大砲の丸に摧碎せられたるにあらずや。なほサラセン人が歐洲の南部に亂入せしを見よ、當年の蒙古人種が歐洲の東部を蹂躪したるを見よ、今日歐洲に在ても、文化最もすまざる露西亞の兵力の尤も強きを見よ、總ての點に於て、未開國は開化國に負くるも、唯兵力に訴ふる競争のみは、つねに之が勝を制する事を示せるにあらずや。
之を近く支那に覓むるに、六國を平吞せし者は、當時文化の最も備はらざりし秦にあらずや。爾來自から中華と誇り、他を夷蠻とけなし來りしも、此夷蠻に一たび亡ぼされて金となり、二たび亡ぼされて元となり、三たび亡ぼされて、今の清

となれるにあらずや。清も今ははや腐敗しぬ、更に代て之を取らざるものは、果していづれの國ぞや。
更に之を我國の盛衰に考ふるに、文化大に熟せんとすれば、國力常に消耗せり。神力皇后が三韓を征伐し玉ふに至れるまでは、我國の未だ全く開化せざる時にして、また國力の最も強き時代なりき。佛敎入り、儒敎入り、外國の文化、我國に侵入するに至りて、わが國力漸く衰へぬ。平安朝は、文化の餘弊の其極に達せし時代なり。平安朝と始終せし藤原氏が、一族朝廷に跋扈し、長袖緩帶、遊戲これ事とし、泰平に慣れて武を講ずる者なく、春の朝に花を歌ひ、秋の夕に月を咏じ、優柔、習をなし、淫靡風をなし、征討邊防の事は、一に源平二氏に委し、

武士よ、地下人よどけなし去りて、之を齒牙にだに懸けざりしが、時勢は一轉しぬや、さしき筆執りて、優劣を歌合せに争ふの時代は去りて、愈劍を執りて、天下の權を争はざるを得たる時代は來りぬ。而して言ふまでもなく、藤原氏は、當時文化の感化を被らざりし武士の爲めに蹴落されぬ。平氏藤原氏に代りて、天下の權を握るにいたりしも、不幸にして、空氣の腐敗したる都門に居を占めたれば、彼が一族子弟見る、優さ男となりぬ。春風簾前舞腰、曩々として、滿都の女兒を腦殺したる紅顔の美少年が、富士川の水鳥の聲に腰をぬかしたるも、また怪しむに足らず。一門浮沈の際に臨みても、歌集を懷にし、琵琶を抱き、横笛を吹く風流才子のみ多くして、知

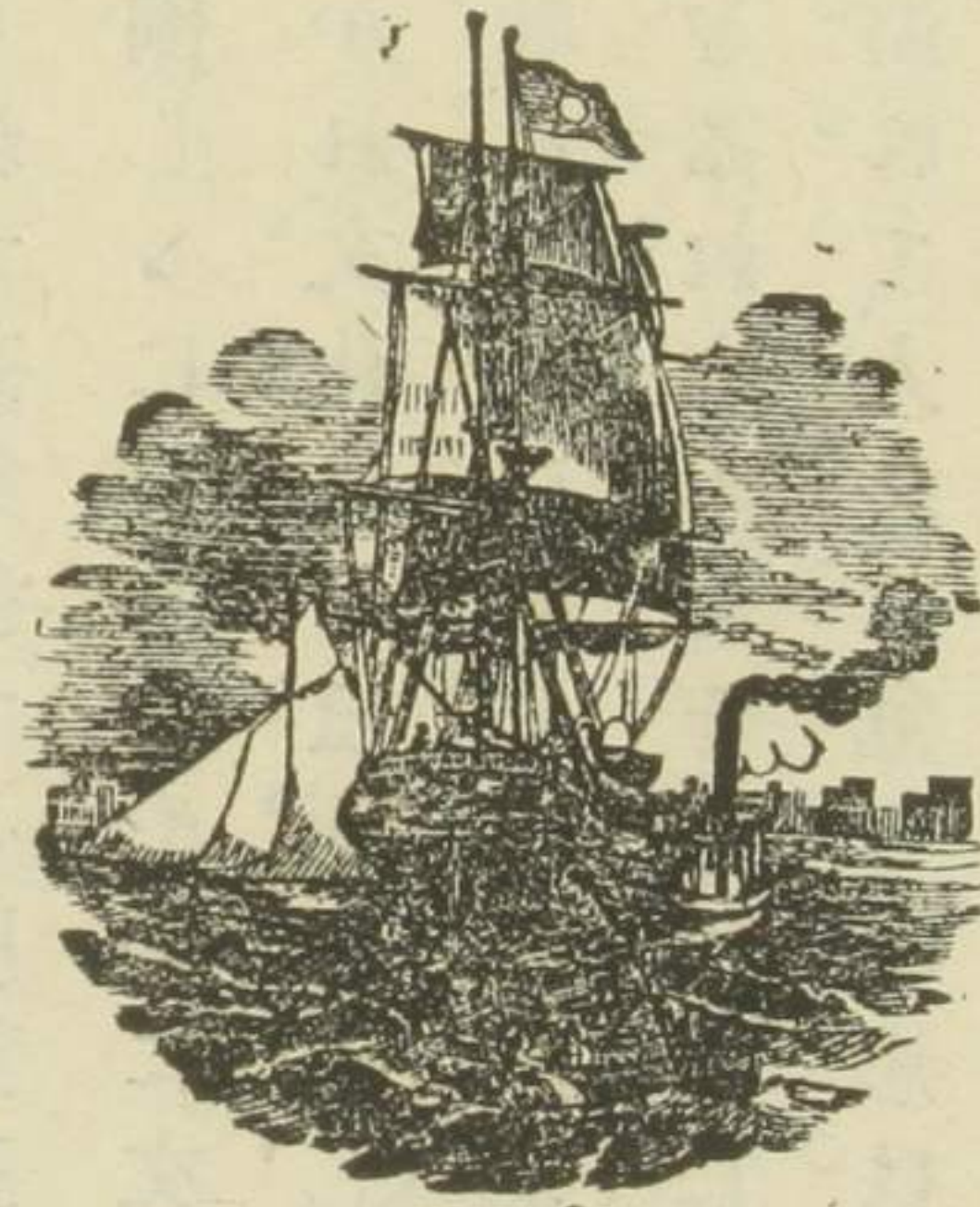
盛、敦盛の二三人を除くの外、また武士らしき者なかりければ、これも言ふまでもなく、源氏のために亡ぼされたりぬ。源氏、北條氏は、京華の地を去りて、當年の東夷の中心ともいふべき鎌倉に居りたれば、急には軟化せざりしか。足利氏は、平氏の轍を蹈みて、京洛に居りたれば、早く墮落し始め、其軟化したる心の跡は、金閣寺、銀閣寺に残り、實力未だ添はずして、早く驕奢に耽り、尾大掉はず、十三代の間、紛々擾々として過ぎ去り、遂に義昭に至りて、全く滅びぬ。義昭は家を亡ぼせしほどの人にて、固より將軍たるの伎倆はなけれど、さすがに文化の餘徳、否餘弊には、天公亦慰吾生、否、月日蘆花淺水、秋など、詩だけは、到底、當時の武士の眞似の出來ぬほど上手な

りき。足代氏に代て天下を取りし信長を見よ。彼は三好の舊臣の心を盡くして鹽梅せし第一等の料理を食ひてまづい物喰はずと怒り第二等以下の料理を舌打鳴らして飽食せしまでに都人士の贅澤の味を知らざりし無骨漢なりしにわらずや。徳川氏は草莽々たる武藏野に府を設けしが當年の風流男の言問ひし鳥の名の懺をなして山奥ならねど住めは茲も都となりぬ。武者類なかりし三河武士の子孫も花の大江戸に大平の春に酔ひ河原乞食に接し淨瑠璃に耽り章臺に流連して楊柳を折るに至りては骨は海月よりも軟かになりぬ。此際ふらかとんとに觸るなら觸れ腰の朱鞘は伊達じやないと歌ひて公然獸行をなし南海西海の武士

のぶこつなるは此上もなければどもぶこつなるだけに都門の弊風に軟化せられず豪氣發する所勤王の魁首となりて終に能く幕府を倒しゝにあらずや。漫に文華と云ふ勿れ漫に開化と云ふなかれ文化はなほ酒の如し酒を飲むものは必ず酔ひ文化に耽める國は必ず亡ぶ。歴史は正直なり常に人間に向てこれを語れどもおぞや魚市に入て腥きを知らず。太平の安きに慣れて人また危きを思はざるなり。嗚呼國家昏亂して忠臣現はれ天下太平にして小人陸梁す。輕裝肥馬の間に醉生夢死する者共に古今の興亡を語るに足らず。悠々たる行路誰に向ひてか。邦家百年の大計を説かむ。一窓の夜雨そゝるに古を慚し慨然として眠る能はず。机を叩い

あはれ尊き 少女よ。
あまつ空より ありたる。
世にも稀なる 御神とばかり 仰がれて、
人のたねとも 思はれず、
あはれ美しき 少女よ。
いましが清き まなこには、
のぞみの光り かいやゆり、

て大息すれば、孤燈耿として三尺の秋水寒し。



さ○け○む○ば○か○り○の○わ○が○頭○
 の○せ○て○支○へ○よ○
 そ○の○膝○に○
 浮○世○の○塵○に○ま○つ○は○れ○て○
 あ○は○れ○戀○し○き○
 少○女○子○よ○
 髪○は○か○も○み○に○
 う○ち○ゆ○る○げ○
 口○は○な○さ○け○に○
 動○け○よ○や○
 恥○も○ひ○に○も○
 し○ぼ○し○許○せ○よ○
 そ○の○頬○を○
 わ○が○舌○に○
 そ○の○頬○を○



あ○つ○き○情○の○
 や○ど○る○ら○む○
 ゆ○た○け○き○胸○の○
 や○は○ら○か○さ○
 あ○は○れ○や○さ○し○き○
 少○女○子○よ○
 花○よ○り○あ○か○き○
 唇○を○
 む○る○い○も○清○き○
 そ○の○息○に○
 春○風○か○よ○ふ○
 心○地○し○て○
 む○く○ろ○も○解○け○む○
 ば○か○り○ず○や○
 わ○れ○を○憐○れ○ど○
 思○ひ○な○ば○
 少○女○子○よ○

頭一
番に
て卒業
せしこ
とより
始めて
平生お
どなし
きこと
の
搦
挨
すめば
杯のど
りや忙
しくこ
の春の
試験に
わが筆
客と
しそ
れより
左右に
居なが
れたる
二十人
あまり
の客
に袴
扇ばち
つかせ
てしか
つめら
しく坐
りたる
を此夜
の上
齡のい
つも一
座の問
題どな
りける
が黒
絹の五
つ紋の
羽織
どさり
どては
顔肥り
て赤く
まだ皺
ひどつ
もたさ
きにそ
の年
て頭の中
通りは
禿げく
しめて
らくど
手一本
もなけ
れ
親がも
てなす
心ばかり
の酒宴
の上座
には本
家の宗
十郎ど
わが首途
のいは
ひに親
戚や近
隣の玄
たしき
人々を
招きて

かた袖

涙の味

くらく悲しく
ねそろしき

浮世のやみに
風われて

雨にふけゆく
春の夜に
二人して

泣くもうれしや

嗚呼われつらき
世の中に

なさけやさしき
少女と

はかなき戀に
泣きしより
覺はてき

涙の味を

様子なればよき折とほつと一息つき團扇片手に座をたぢ
 て庭に出でぬ雲はれつくして空一杯の星息吹かば落ちむ
 ばかりの夏の夜なり今までは氣付かざりし蛙の聲にはか
 に耳だちて聞ゆ池水をめぐりて築山の上のぼれば酒席
 のさわぎは青葉に隔たりぬ稻葉の上をわたり來てわが懷
 をたづぬる夜風草葉の露をさそひて身にしみて涼しくさ
 やぐ熊笹の中より迷ひ出でふわりと軽く飛びたつ螢の
 行末遠く仰げば高き金剛葛城の二山天外へ積翠を横へ一
 條の大和川平野の中に銀蛇を走らすなどなれにし故郷の
 山川の景色ながむるも今宵ばかりと思へば何となくなつ
 かしき必地す

勉強なることなど數へたていさてもいかにしてこのやう
 な善い御子が生るゝ事ずと口々に褒めそやされてわれは
 たい汗を流すばかりなるにさすがに父は微醉機嫌の口先
 軽くこれが世に云ふ鳶の生んだ鷹でがなござらうなど
 覺えす頭を叩いて合槌うたるに今更に耻しく聞くにえ
 堪へてうつむけば明日はいよゝかたちかさて東京にて
 は何と云ふ學校に入らるゝせめて今宵は一杯すごされ
 よど飲めぬ口に杯強ひて侑められ止むを得ず目をつぶり
 て飲みくだすことどもいくそたび一座の酔も杯と共にまは
 るにつれて今迄話柄の中心となりし我をばよそにして米
 の出來のよしあしなど處柄とて土臭き話に實が入りたる

われは今故郷を去りて、東京へ學ばむとするなり。年頃日頃
 起きても思ひ、寐ても思ひたるわが宿望かなひて、われは又
 他念なし。我が志は大に、わが前途は遠し。われは年少の空想
 に驅られて、功名手に唾して收むべしと速了し、故郷を去る
 ことをつらしとも思はねば、父母の膝下をはなる、ことを
 憂しとも思はず。都にのぼりて、後の事、學を卒へて、後の
 事など想像に想像を重ねて、そいろに肉躍骨鳴りて堪へが
 たく、心はいつしか空にあこがれて、我身はさらになつ、い
 も覺えず、頭自から低り、眼自から閉ぢて、われは寤めながら、
 未來を夢み、空に滿つるはかり。此樓閣を描き出して、學士の
 稱號を受くるかど見れば、やがて海路遠く洋行し、今まで佛

蘭西の都にあらしかと思へば、忽ち東京の大路に二頭引の
 馬車を驅りけるに、思ひもかけず、後の方に、かや若さま、此
 處に居らしてと、呼ぶ聲す。
 この一聲に、われは空想の夢さめて、うつゝに回れば、金剛山
 舊に依りて、前に聳え、身は庭の一隅に立り、覺えず、どなた
 と口走りしが、耳になれたる聲音に、それと思ひ返して、藤さ
 わ茲へ来てお涼み、あの金剛山か薄黒う見えて、大和川がほ
 の白う見えて、風にゆらる、稲葉のかげから、螢が幾匹も飛
 び出すなずは、實に好い景色ぢやないかと、愛想ふりまきし
 つもりなるには、いと氣の乗らぬ返事しながら、浴衣姿ほの
 白く、はならぬ句と、共に我に近寄りて、あなた明日はもうお

たちあそばすのねいふもはやうるみ聲なり。
この春までは學校の寄宿にはいつていらしても、日曜毎に
は、お歸りになつて、お目にかゝることが出来ましたが、これ
からはる／＼東京へいらしたら、またいつお逢ひ申されま
せうか、わたしは心細くて、ほ／＼このやうに慣れ／＼しう
申して、御免あそばせよと、涙をつゝい、む笑ひ聲さびしきに、わ
れはわざと、落付きはらひて、なに、東京へ修業といつても、ほ
んの四年か五年の間、それに、毎年夏休みと冬休みには、必ず
歸つて來るからと云へば、それにあそばしてもとばかりに
て、あとはえ云はでさしうつむく。
嗚呼わが功名の念と少年進取の氣象とは、我を驅つて狂せ

しめ、心中のよろづの懸念を排し去りたれど、全く排し難き
は、たゞ一事この可憐の少女を故郷に残し置きて、知らぬ他
郷にひとり迷ひ出でむこと、さすがに後髪ひかるゝおもひ
なきに非ずされど、この一念わが功名進取の念とたゝかふ
には、餘り微弱なり。もとより出で、歸らぬ旅にはあらず、何
事もたゞ功成り、名遂げん後にと思ひ定めたる身のよしや
二三年相見ずとて、われと我が心を勵まして強ひて之
れを抑へたれど、今まのあたり此の人を見、その優しき聲を
聞きては、胸はまたかき亂れぬ。わが切なる心打ちあけむと
思ひしことは、あまたゝびなりしかど、いざとなれば、心臆し
て、それとは云ひ得ざりし不甲斐なさよ。われ今立ち去らば、

天地の間に、父なく、母なく、たよる所なき、孤兒の、更に如何なる憂目や、見むと思へば、人の涙はまだかゝらねど、わが泣くよりも、悲しく、世がまゝになるならば、率て行きて、共に學ばむにと、思ふも、其の甲斐なく、さらばとて、少年の客氣の人世は、夢、功名は眼を過ぐる雲烟と悟るまでには、至らず。われは胸せまりて、仰いで、たゞ涙を飲みぬ。
わが家の隣に、木村兵藏とて、さまで貧しからず、また富めるにも、あらざる人、年久しく住へり。妹のお龜と、たゞ二人の兄弟の親は、貧苦の中に業を勵み、子を育て、家道や、ゆたかになりしほどに、妹のお龜は、大阪の商人に嫁ぎ、兄の兵藏も嫁迎へて、やれ嬉れしや、これ、で重荷を、ろしたと、喜ぶと共に、

年來、張りつめし氣ゆるみて、あはれや、父はがつくりと、先づ倒れ、間もなく、母もその跡追ひて、往生せしは、わが漸く物心覺えはじめし頃とかや、お龜の、つぎし商人、一時の商業上の失敗に、自暴飲より、身を放蕩にも、ちくづしたる末、美しきお龜が、今更鼻につきて、色々難避つけて、の離縁沙汰、お龜、薄情なる夫には、心残らねど、たゞ一人の娘の子かゝる人のもとに、置くは氣づかはしとて、親子もろとも泣くく、生家へ歸ることは、歸りたれど、こゝにも、雨洩る木の下蔭の、兩親は己に世を去りて、兄兵藏の夫婦は、揃ひに揃ひし義理知らず、人でなしの、不人情の、無慈の、物惜しみの、生爪は、がしても、おのれの利得になるものは、見遁がさず、まことの妹を、妹とも

思はずしぶく引き取りたれど、よるとささはるとあてこす
りて、出て行けよと云はぬばかりのもてなし、これまで時々
生家歸りせし折には、よい身代の家へ行かれて、洵に御仕合
と、追従こそ言ひたれ、かくばかり邪見なる嫂にはあらざり
しに、兄も嫂の來ぬ前は、かくばかり非道なる人にはあらざ
りしに、今は食物の好嫌に至るまで前とは打つて變はれる
に、これはとばかり呆れはて、人を恨むとにはあらねど、女
心の愚痴おのづからこぼれて、涙の乾くひまなく、もとより
親子二人とも、只座して兄の厄介とならむとにはあらず、女
の瘦腕ながらも裁縫、洗ひ張り、機織り、さては茶摘など、力の
限り働きて、二人の食料は入れて、さまで世話にもならざれ

ど、なほよき顔せざるに、さらばとて我家より二町ばかり東
の方に、さゝやかなる家を借りて、親子ふたり細き煙をたて
ぬ。年ははや女盛りは過ぎたれど、器量よく、人柄もよければ、
子連にてもと所望する人ありたれど、男の薄情には懲りぬ
と、世をすね通しけるもあはれなり。
藤子は、この薄命なる佳人の一人娘なり。七八年のむかし、わ
れこの不幸なる親子の事は、さゝ居たれど、縁もゆかりもな
き他人の事とて、未だふかくは親しみはせざりしほど、或日、
他處よりの歸るさ、驟雨に遭ひて、家里遠き野中の路の、一株
の老松の蔭に、身をちいめて、晴間を待ちけるに、折りしも通
りかゝれる可愛らしき小娘の、われを見て、福井の坊ちゃん、

一所にこの傘へはいつていらしやいなと云ふは顔だけは、相知れる藤子なれば有難うとて、直ちに松蔭より飛び出して、そのさしたる傘の中に入る。その傘いと古く一處紙が破れて居れど、大人持ちの傘なれば、子供二人を蔽ふには十分なり。藤子の左手に薬瓶もてるを見て、傘はわれ持んとて、いなむを強ひてとりてさしかざし、その薬瓶は、母様が病氣なのと問へば、はい、お醫者様へ薬取りにいつた歸りがけなよといふを、話の皮切りにして、歩む路すがら、氣になるまゝに、問ひたゞすに、藤子の母は熱病にて病床に臥せる事、働くことが出来ずして、日々の費用に困り居ること、されど、兵藏夫婦は、ろくに見舞ひにも來ぬこと、醫者が薬代を催促する

こと、兵藏の家へ借りにゆきしには、はじめの二三回は、しどろりながら、も貸して呉れしが、今は見限りて取り合うて呉れぬことなど、聞けばさくほど、あはれにも悲しく、われは子供心にも、氣の毒に思ひて、小遣にとて、わが持ちし銀貨銅貨取り交せて、袂にあるだけさらけ出し、藤子の家の前へ來りし時、これは、少しばかりなれど、今の御禮にとて、強ひて其袂に押し入れて、雨の小止みせしを幸に、一禮そこへ走りかへりて、わがし事、残らず母に語りけるに、藤子泣く泣く來りて、さきにわが興へし錢をさし出す。其の由聞けば、御志はうけしけれど、何のゆかりもなきに、このやうなもの戴くべき筈あらねば、早く返しまゐらせよ、如何に幼くとも、此の位の分別

は、あるべきにと、いたく母親に叱られしとなり。義理がたき人ど、わが母も涙を催し、今まで病氣のよしは聞き居たれど、かくまでとは知らざりしとて、更に若干の錢添へて、藤子と共にその家に至りしが、この後も不自由なきやうにと母が度々心付けせしほどに、病やう／＼軽くなりゆきて、遂に全快するに至りしかば、親子もろとも我家に禮に來り、この御恩、死ぬとも忘れじ、御恩返へしの萬分一には、この身、如何やうにもつかひ玉へ、またお役にたつことあらば、この娘も召しつかはれよと、涙と共にいつはらね感謝の意をのぶれば、なんの、あの位の事に、反て痛み入る次第、お娘子もこれからは度々お遊びに、いいで、それにまた失禮ながら、綾太郎も復

習いたす時は、何にてもお教へ申しますから、御遠慮なくと、學校にゆく、の資なきを知りて、の思ひやりに、親子涙にかきくれ、さらば御言葉に、あまへてと、よろこびて、藤子日毎我家に通ひ來りぬ。思ひもかけぬ相合傘が縁となりて、われは今藤子の師匠なり。平生外に出で、荒き遊び事を嫌ひ、部屋にのみ閉ぢ籠りて書をよみ、繪を見ること、が此の上もなき、楽しみなるわが身にとりては、日に一時間ばかり読み書きを教ふること、反て面白くのみ思はれて、熱心に教ふれば、藤子又熱心に覚え、日として机をならべぬ。日はなく、口輕の下女に、雛人形の一對となぶられいよ／＼親しむにつれて、笑の末の罪なき言ひ争ひも、はや夫婦喧嘩の御稽古かと冷

教へし事は、能く記憶して、進歩著しきに、われも教ふるに張
 合ありて、いつも藤子の来るを心待ちにし、その来ぬ日は、何
 となく不快を感じたりき。われ幼年の時は、内氣と云ふより
 は、寧ろ陰氣と云ふべき性質なりしに、藤子来るやうになり
 てより、笑聲日にわか部屋より洩るゝに至りぬ。時にはかな
 き憂鬱に沈むことあるも、藤子を見れば、忽ち之を忘れぬ。我
 幼時の家庭は、藤子の爲に春を生せりと云はむも不可なし。
 折々はまた藤子の家をおとづれしことありしが、そのおと
 なしく、やさしく、まめやかに母につかへし様は、更に一層我
 心を動かしぬ。これが眞の妹ならばと思ひしも、われに同胞
 なきが故のみにはあらざりき。

やかされしこと幾度ぞや。
 親も娘も人柄よくてたよりなく、正しくして不幸なるを
 はれとのみ思ひしわが心、いつの間にか戀とはなりけむ。華
 美なる粧して、白粉に顔を埋めたるよりも、飾らぬまゝの素
 顔のうるはしきがゆかしく、藤子が着るものも着得ず、飾る
 ものも飾り得ずして、よろづ物足らぬ有様は、反て我が心を
 動かしぬ。母が見兼ねて、夏冬折々の着物與ふれば、涙をこぼ
 して喜ぶ顔見るだに、いとうれしく、日々母より貰ふ菓子
 の一半を藤子に分ちて、その喜ぶさまを見ること我に取り
 ては、言ふに言はれぬ樂しみなりき。藤子はさとり早き女性
 なり、よしや一を聞いて十を知るとまでは至らざるも、わが

わが小學校を卒業して中學校へ入りし後も藤子なほ時々
わが家に来て學べり藤子今は嬌羞を帯びはじめばかり
の年頃の少女なり無心に笑ひ興じふさげ合ひし昔とは異
なりて互に遠慮するやうになりぬゆかしき少女の顔たい
いつまでも穴の明くばかり見たけれど目の視線と視線と
相逢ひては何となく耻かしく思はず知らずよそ向き見て
見ぬふりし見ぬふりして見るも我れながら訝かし机をへ
だて、差し向ふに藤子がやさしき鼻息わが手にかゝりて
は、身体ぞく／＼と嬉しきやら耻しきやら今まではづか／＼
云ひし事も自ら口しぶりて別れて後、あゝ云へばよかりし
と悔むこと多かりき。

わが家より中學校に通ふ路は、さまで遠くもあらざるに、父
がわざ／＼われを寄宿舎に入れしは、甘き親の手一つにそ
だつるよりも、多くの人の中にもまれて、自ら男らしくなら
しめむどの主意とればし、わが陰氣なる性質は、藤子と親し
むにつれて、一變してやゝ陽氣となり、寄宿舎に入るに及び
て、再變してやゝ活潑となりぬ。望みもおほきくなりぬ。早く
中學を卒業して都に上り、大學に入り、世に出で、名を成し、
功を立てむと思ふ一念、今は絶ゆる間もなく、心中にもゆれ
ど、住みなれし家もさすがに戀しく、日曜日を待ち兼ねて、勇
み家にかへれば、藤子も必ずれどづれて別になれ／＼しき
話どてはせざれど、顔だに見れば、何となくうれしかりき。

わが身を立つる未來の空想いよく大くなると共にまた粗になりたい國家の爲め人民のためにとのみ念じて未だ一身一家のこまかきことに及ぶ違なければ未は藤子をとうするとまでは考へ至らざれどかゝる可憐の少女を我側よりはなして知らぬ他人の手に渡さむは惜しき次第といつしか思ひそめぬ。

逢うてはたいなつかしく別れてはたい逢うて見たく人の手にわたすはいやなりとのみ思ひし一念今年の春に至りて更に一步をすゝめぬ藤子の母の病めりと聞きてある日曜日見舞ひにゆきしに思ひしよりもやみさらばひけるが我を見てほろ／＼と涙をこぼし蟲より細き聲音あはれに

このやうに疲れましてはもはや助かることは出来ずまいがたゞ此の娘の行末を思ひましては、どういたしても目がつぶれませむ此の上の御願には他にはたよる處のない娘の身どうぞお見捨なくと跡は涙に咽びてえ言はずそのやうな弱きこと言はれずと安心して療治なさるゝがよい、氣が病をたすけますからと慰めて、寄宿舎にかへりしが、その次の日曜に外出せしときは、藤子の母ははや此の世の人にはあらざりき。

藤子引きとるべき筈の兵藏夫婦があの通りの人なれば、可愛想なりと我が言ひだすよりもさきに親が心配して、わが家にて、仲働につかはむと云ひしに、兵藏夫婦もとより異存

なく、藤子はたゞ泣いて喜びしかば、事はやくまどまりて可
憐の少女、今はわが家の人となりぬ。われも又中學を卒業し、
寄宿を出で、家に歸り、日々顔見合せて、胸はつねにさわぎ
ぬ。さるにても、わが平生朋友と議論などして、口角泡を吹く
ばかりの勇氣も、藤子に對しては、何處へやら、幾度かおもひ
決したれど、遂にわらはに言ひ出すの勇氣はなかりき。
今宵はからずも、人目絶えたる庭の一隅に、たゞ二人相對し
ては、嬉しさ餘つて、苦るしさ言はん方なし。されど思ひかへ
すに、人目なき處に、わざ／＼我を尋ね來りて、名残を惜しみ
て、平生になくなれ／＼しく言ひしは、よく／＼思ひせまり
て、の事なるべし。一度かく思ひ出せば、是迄藤子の素振の何

どなく、それは／＼せしも、故なきにあらざりし、我素振も、恐ら
くは、それと推せしならむ。今は、はや心の底、わざ／＼口に出
す、必用もなしといさみたつまいに、唯藤子とばかりにて、思ひ
にもゆるわが手をさしのべて、闇に白き藤子の纖手を握れ
ば、答はなく、たゞはら／＼と我が手の甲に落ちて、聲ある
情の涙、熱く胸の奥にしみわたるぬ。我がれもひは之に知れ
ど、顛へる手にかたく締めて、藤そんなら暫くあはないよ。ど
うぞ御身体を大切に、お前も無事でと云ふ折りしも、突然、母
來りて、綾太郎はそこにかえ、お客様をさし置いて、何をして
居りますえと、咎め玉ふ聲、平生のやさしき聲とは異なりて、
かどだちて聞えけるに、われはさながら、頭より水かけられ

たるが如き心地せり。

この翌朝、われは出發して、東京へ上りしが、半年毎の休暇には、必ず家に歸りぬ。われと藤子との間は、近くしてなほ遠かりき。

わが母方の縁ある家に、玉子とて、藤子と年輩同じばかりなる少女あり。これも幼時より我家に來なれて、相親しみしが、われは何となくその人を好まざりき。我幼時の性質、男子にして女子なりとすれば、玉子は、むしろ女子にして男子なり。活潑にして、にぎやかにして、よくしやべり、よく笑ひ、氣輕にして、罪なく、惡氣もなけれど、我が打ちとけて親しまざりしは、世に云ふ蟲がすかぬものにや。されど、好かぬ人として、われ

よりすいみ出で、あらはにこれを隔つるほどの勇氣もな。くうはべは仲好く遊びしかば、人には更なり、玉子にも、わが心それとは見えざりしなるべし。

玉子と藤子とを比ぶれば、藤子は海棠のやゝさびしきが如く、玉子は牡丹のにぎやかなるが如し。玉子のからだは、肥えたりといはむよりは、瘦せたる方にて、藤子のからだは、瘦せたりと云はむよりは、肥えたる方なり。藤子の顔はやゝ圓く、玉子の顔はやゝ長し。色はいづれも白けれども、藤子のやゝ黒きは、貧に苦しめるが故にや。玉子の目は、ぱつちりと涼しく、藤子の目尻は、少しさがりて、かはゆらし。殊に玉子は、富みたる家の娘なれば、衣服髪かざり、すべて美をつくして、手

入よき花壇の花とも見るべく、藤子はなにかたちを願暇
なくして、ありのまゝに打ちまかせたるは、日陰の花とも見
るべし。よしや器量は下れりとするも、藤子があはれなる身
の上は、まづ我が心を惹きけるに、器量とても下れるにあら
ず。殊に玉子が性質活潑なるに反して、藤子のあくまでもお
どなく、しどやかにして、而かも陰氣ならざるは、何となく
我が心にかなひぬ。われは藤子を愛すといはむよりは、むし
ろ隣れみたるなり。人なき折々、やさしき言葉かけていたは
れば、はやおほろく、と涙くむ有様に、やさしき女性と、われも
覺えず涙を誘はれしことも幾度ぞや。

我母も、藤子を愛してつねに、其の人柄をほめたれど、そはひ

と通りの情けにて、玉子の方が更にその氣に入れるが如し。
玉子の来る日は、機嫌どりわけよく、折々いさかひすれは、
理非はたいさねで、頭ごなしに我を叱るが、つねなりしに、客
大事と思ふこゝろのみにも、あらざるべしと思はれぬ。
玉子、郷里の高等小學校を卒業して後は、西京に出で、高等
女學校に學べり。たちの好き藤子にも深く學ばしめなばど
思へど、甲斐なし。ひと年の夏、休暇の期限、盡くるに垂んとし
て、明日は出發せむとせし日、母といろく、物語りの未母は
言葉を改めて、丁度明日は玉さんもれたちだから、京都まで
一所につれていておあげ、今日うちへ来て一晩とまつて、そ
して明日こゝから一所に立つやうに約束してあるからと

いふに、さうですかど氣の無返事して、何思はず、藤にも今
少し學問させて見たいものです。がど口走り、後ではつと思
ひしが、母は忽ち聞き答めて、そうは手が廻りませぬ、藤は萬
事おつかさんが引きうけて世話するから、お前までが心配
しなくてもいよど、はや目に角たてまへる様子なるに、我
もこのまゝにてはすまされず、今の女子は學問すると、誰で
もお轉婆になります。が、藤のやうなおとなしい人ならば、ま
さかさうでもあるまいと、ふと思つたのですと云へば、それ
でもお前、おとなしいばかりが能でもありません。玉さんを
御覽なさい、利口ではきくして品もよいし、家柄もよいし、
それはく藤なぐのくらべもんで、はありませぬよと、意味

ありげなる言葉、うちけさむと、口までは出でたれど、われを
見つめ、玉ふ眼の、おまりに眞面目なるに、われど、こゝろを抑
へて、そのまい止みぬ。
これど、いうて話すべきこと、もなけれど、またしばらく逢へ
ぬ別れど、おもへば、何となくしみくはなして、見たく、強い
て要事、こしらへて呼びよせて、眼にも、の云はするが、せめて
の心やりなりしが、待たぬ、玉子、はや旅の用意と、のへて來
りて、われになれくしく笑ひ興ず、われ京都の悪口いへば、
玉子は東京の悪口言ひ、互ひに學ぶ土地の最負して、からか
ひあひたる末ふとした事が氣にさはりて、はては口のみに
どいまいで、手を出して、争ひしさ、ま通りかゝりし、藤子の目

には如何に見えけむ、翌朝出立の時見れば、藤子の目泣きは
らしたる痕あり、ひと夜も何に泣きはらしたる涙ぞと、東京
に上りての後も氣にかゝりし。

その年の冬休みは、さゝはることでありて、郷にかへることを
得ず、あくる年の夏に至りて歸りて見れば、藤子ははや我家
に居らざるに、われは胸まづ潰れぬ。どうかしましたかと母
に問へば、たゞ暇を出したとばかり、何かあやまちでもあり
ましたかと問へば、別にあやまちはないが、少しこちらに都
合があつてと、至極曖昧なる答なり。われは、心も心ならず、或
時、下女を物陰によびて問へば、いい人でも出来たんでせう
よと笑うて取合はず。じやうだんも時による、本氣で聞くに、

人を馬鹿にするならして見よ、われにも、おもはくがあると、
見幕するどく叱りつけ、れば、まつびら御免あそばせ、實の
處、お藤さんは、お家からお暇が出まして後しばらくは、伯父
さんの處に居られました、が、伯父夫婦と云ふは御存じの通
りのよくない人で、それは、くゝひどい目にこきつかう末金
にこまる事があつて、龍神へといふのを、お藤さんが血の涙
をこぼして、それだけは許してと承知なさらぬので、とうゝ
前借にて國府の宿屋へ女中に出したと申すことでござり
ますと云ふして、暇が出だわけはと問へば、それはわたくし
にも分りませぬが、邪推いたしますればと云ひ、さして俄に
口をついむ、決して他言はせぬから、その邪推はなしてくれ

よと云へば、若様も大抵御察しでござりませうが、前置おきて話すを聞くに、わが多少疑ひしこと、全く符合しぬ。母は我に玉子をと、思ひ込み親類中の内談もほいと、のひたれど、わが藤子に意あるを、知りて家に置きてはいつまでも邪魔物、間違のなき内に遠ざけなば、心の移ることもやと、あさはかにも思ひとり脊に腹はかへられずと、強いて心を鬼にして、罪もとがもなきにたよる所なしと、知りながら世にも可憐なる少女をば家より出し玉へるなり、許るさせ玉へ、母上、藤子さらばわれもまた去らむ、藤子死なばわれもまた死なむ、親の子なれば、わが氣質は知らせ玉ふべき筈なるに、藤子の外に心移すべき薄情男とおぼし玉へるもうらめし。

況んや、わが藤子にたつる心中をたゞ若氣の出来心とのみ速了したまへるもくやしや。
 若様も罪作りですよ、お立ちになつてから後と申すものは、お藤さんまるで氣抜けがしたやうで、ぼんやり立つて東の空をながめて見たり、うつかり灰に福井綾太郎と若様のお名前をかいて、人に見付けられて、眞赤な顔して、言ひわけするなどは、若様しほらしいちやありませんか。若様があまりおやさしすぎるものですから、お藤さんが首つたけにおなんなすつたのも無理はありません。若さまもまむざら憎くうはござりますまい。ほ、思ひ思つた中ならば粹をきかしてお添はせあそばすが、親御の慈悲と申すものだつて

さうざやございませんか若様とおぞや我れいまは下女風情の手玉にとられてぐうの音も出でずからかひ半分の親切ごかしも今はうれしく親がせめてこれだけさばけ居らばと涙なり。

兩親の慈悲深き故郷の家庭も今は鬼の住家とのみ思はれぬ。國府の宿屋といふのをたよりに、心も空にあくがれ出でて、奈良の方へと稱して、國府にたづね行きしに、すゝけたる小驛の家はづれに一軒の旅店あり。他に旅店なければ、この家なるべしと思ひ定めて立ち入るに見掛けに似合はず可成りひろき旅館なり。廊下をいくたびも廻りて、櫓子段を上り、二間經て、六疊の一室に入る。この二階の建物は、このごろ

たてつぎたるものと見えて、材木なほ新たなり。この室には、床つき居りて、このあたりの村夫子の作と覺しき詩の書きぶりも拙き一軸の掛物かゝれり。二方あけはなしにて、風通りよく、南は田に面し、金剛山欄干を抽いて青し。日はなほ未だ落ちざれど、時刻は早や七時に近く、鎮守の森のかげ三四町ばかり長く地に曳きて、その末がこの樓の障子の半ばに及びぬ。さて案内せし者、茶と菓子とを持來りしもの、浴衣もて來て風呂に案内せしものと、それく女中が入りかはりたれど、藤子は影だにも見えすされど、在來の經驗によるに、飯の給仕には、その旅店にて、尤もすぐれて姿よきものが來るためしなれば、われはなほ一縷の望みをつなぎて待ちけ

るに夕飯を持って來しは果して藤子なり。我を見て飛びたつ
ばかり驚きて、おや、福井の若様、こゝへはどうしてと、言葉さ
へあらたまれり。顔はもとのまゝに美しけれど、からだいた
く肥りて、絞りの浴衣に、數寄屋の前垂かけたるさまは、また
もとの藤子にあらず、わづか一年の間に、かくまでも變はれ
ば、かはるものかと、われはまづ心に泣きつ。

何處へおでましになりますと問はれて、お前に逢に來たと
云へば、それは有難うさまとて、打ち笑ふさま、思ひの外に平
氣なり。しみぐ話しするに、酒なくてはとて酒をとりよせ、
飲めぬ口とは思ひながら、まづひとくちさせば、これも思
ひの外、快く飲み干すなど、もとの藤子とは、うつつて變はれる。

仕打なり。何時の間に飲むことを覚えしぞといふかれば、酒
がのめなくて、此の商賣は出來ませぬと云ふ。此の商賣す
るやうには誰がした、許るして呉れよ、藤、そなたも我母に恨
みがあらう、我もあると同情を求むれば、あら勿体ない、せめ
て萬分一の御恩返しには、私が御家を遠ざかるより外には
道はござりませぬ、どうぞ玉子さまと行末久しくとは、竟に
隠しても隠し得ざる藤子の本音なるべし。母はともあれ、わ
が心は知り居るべき筈なるに、さりとは水臭いとうらめば、
いやもう若様のお情は、よくわかかつて居ります。そのお情
のおやさしいのが、今では結句恨みでござりますると、解け
ても解けぬ風情なり。

藤子のうたがひは、口先ばかりにては言ひとくべくもあらず、たゞ氣長くわが身の行にてと思ひさだめて、この宿屋の料理屋を兼ねたるを幸に、晩方より出懸けて、夜ふけて歸ること多かりしが、さすがに藤子も幼慣染のむかし語りては、覺えず涙に沈むことあり、肥れる腕をさすりて、お家にていたはつてお使あそばされた頃は、このやうでありませんでした。が、こゝへ參つてから、楷子段の上り下りから、長き椽側の拭掃除と、朝から晩まで休まるひまもなく、こきつかはれて、この通りの手になりました。たと溜息つくは例の女氣とあはれなり。いやらしいは、近在の若者人に無理に酒のませ、て、錢にぎらせて、いやらしいこと言はるゝ度、毎には、命がちい

まる心地がいたします。孫までわる村長さんが、禿頭の六十面さげて、毎度来てよつばらつて、抱きついて、柿のくさつたやうな息をふきかけられ、かなしいやら、腹がたつやらど聞けば、聞くほど悲しき藤子の身の上なり。心はくだくるばかりなれど、今が今とて藤子をたすくる者なければ、たゞ暫らくの辛抱となくさむるのみ。母に藤子をよびもどさむことをすゝめたれど、聞き入るる様子なければ、我はたゞ心みだれて、家はよそに、しのびて國府にかよふほどに、今年の夏もつきぬわれ、いま大學にありて、規則のゆるやかなるにつけて、みて、休暇の期限つくるも、なほ二週間ばかり滞在せしが、かくてはてしあるべきにあらねば、遂に

思ひ切りて、また東京にのぼりぬ

この冬また歸り來り、例の國府の宿屋に赴きけるに、藤子居
らず。聞けば一月ばかり前に、龍神の方へ移りぬと云ふ。嗚呼
龍神は色を鬻ぐ人間、溷濁の港なり。一時は氣を失はむばか
りに驚きたれど、あの清淨可憐の藤子がよもやとおもへば、
また疑ひを起しぬ。樓の名はと問へば、たしか雲州樓と云ひ
ましたと云ふに、全くねのなき事ともおもはれねば、今は氣
も氣ならず、そのまゝ旅店を飛び出しぬ。
藤子果して龍神の遊廓に行きしものとすれば、藤子はもは
や純潔の處女にあらず、汚れたる女なり、我心を思ひも汲ま
む。不實の女なり。この年頃眠られぬ床に藤子の寫真なが

て心に描きし未來の理想は、こゝに全く消滅しぬ。藤子が恨
めしくもあれば、また可愛想にもあり、いやらしくもあれば、
またゆかしくもあり、方寸たいかき亂れて今は分別もつか
ず、身は絶望の谷に陥りたれど、ひとすちに愛慕せし心は、な
ほ未練となりて残り、その未練は、藤子を辯護して、よくよ
くの事情あるべしと、一たび思ひ至れば、一目なりとも逢う
て見たくなりぬ。われはすべて、の未來の希望を斷ちたれど、
藤子其人を斷念する事能はず。訝しや、平生芥溜よりも穢し
と嫌らひたる遊廓も、藤子が行きたる所とおもへば、さまで
不潔とも思はず。藤子を清淨純潔なる少女と信じ切つたる
我が一念は、遊女のため、にうせず。我藤子に對する行末のす

べての希望はうせはてたれどもたい藤子に逢はずには居
 られず我が氣のうせたるもぬけの殻はこの一念に驅られ
 て前後の分別もなく車を龍神の遊廓に飛ばしぬ
 千鳥の聲に冬の夜更け初めて茅渟の浦より吹き来る北風
 潮氣を帯びて寒く高く小き冬の月空に澄みて寂しけれど
 も龍神幾條の花街は紅燈絃歌の聲を照らし浮かれ歩く人
 の足音乾きて高し此の遊廓の内にてやゝ上等と見ゆる中
 通りには雲州樓と云ふ貸座敷なければその左右の幾條を
 彼處此處とたづねゆくにこゝは客種も下りて銅色なる顔
 を手拭に埋め土手羅一枚にて寒さうな風もなく鼻歌軽く
 歌ひつゝ三人或は五人つれだちて一軒毎に覗き歩くはい

づれも楫を枕の寢覺寂しき浦の泊りの舟夫とおぼし鳴呼
 われ色を漁せんとはあらで二重外套の頭巾目深く被り
 て枉げてかゝる賤しきものゝ中に交り泣いて足を人間溷
 濁の地に投ずるは如何なる因果ぞや
 漸く看板に雲州樓と記せるさゝやかなる一軒の貸座敷を
 見出して暖簾くゞりて覗けば鶉格子の中に襦袢姿はなや
 かに六七人ならひて坐はれるが中に格子より二番目の女
 はたしかに藤子なるがわれは二重外套の頭巾に目と鼻と
 ばかりを出して人目をつゝみたればそれとは氣付ぬ様子
 なり袖引かるゝまゝに躍れる胸をしづめて二階に上れば
 どの子になされますと問ふ格子より二番目の女と云へば

それならば此の室へとて障子開きて導きたるはわづか三
 疊の小室なり。白き巾かけて室一杯に敷き延べたる薄き蒲
 團の後の方高まれるは火閣入れたるにや。上の方の餘地に
 は丸行燈の光りかすかに二個の枕を照らせり。これはあま
 りなる有様と蒲團の上に打俯してたゞ涙をこぼしぬやが
 て楷子段を登り来る足音障子の外にとまるかと思へば障
 子のひらく音して裾揃きしなやかにえならぬ句と共に入
 り來りてやさしき聲に何と云ひけむ。或耳にはしかと聞き
 どれず打俯せるわれをゆすりてどうなされましたと云ふ
 に思ひ切つて仰向けはおやとばかりに呆れて物言はず。そ
 なたは此様な所へ來てわれを思ひ死に死なするつもりか

と恨めばこれには段々深い仔細が御座ります。がどうぞ
 聞のがして下さりませ。非道な伯父を持ちましたがこの身
 の不運酒に覺えを失ひて夢に身を汚がしたと申すも耻か
 しい。もうこの上は問うて下さります。な毒くはば皿此の上
 は耻も外聞も御座りませぬ。藤が魂はどうに死んで居りま
 すれば世になきものとお諦らめあそばせ。御聲を聞くも涙
 の種此の上の御情にはどうぞ御顔を見せて下さります。な
 片時なりともこのやうな處に居られては御身のけがれ
 さあ〜早くお歸りあそばせ。若様御機嫌よう。此で一生御
 目にかゝりませぬとて起ち上る。そなたの胸は聞いたがわ
 が胸も聞いてくれよ。まあ〜待つてと取りすがれば伺は

宵にほのめくいなづまの
 君とわかれて闇にきえたる心地して
 君とあゆみし庭もせに
 血しほのあとに恨にはやくくれなゐの
 すみれは咲きぬうるはしく
 あやめもわかぬそでの雨

今日限りの命



すなくつるともよく分つて居りまする御免あそばせと一
 共姿は消えて紅の片袖空しく我が手に残りぬ
 言ハ

かどは葎に とざゝれて

とふ人もなき 身の上を

なぐさめむとや 花すみれ

ほゝるむさまの いとほしや

浮世は鬼の すみかとも

知らでわらふか やよ堇

まこと我身に 情あらば

われと共音に 泣けよかし

身はあさかげと なりはて

明日は絶えなむ わがいのち

この世になれと 相見るも

思へば今日の ひと日ぞや

はや暮れかゝる 春の日の

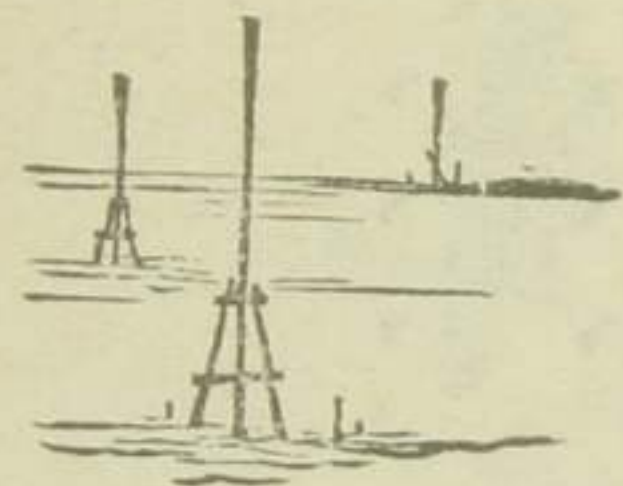
ひかりも薄き 庭のみに

ほの見えそめて おく露は

わがためそぐ 涙かや

生きて甲斐ある 身ならねど

今のことくに花咲きて、
 今のことくににほひを送れ、その袖に。
 君とあひ見し少女子が、
 死ぬるいまはも君を思ひ。
 うらみに泣きしなきからの
 こゝにとばかりの語れよや。



恨も共にとしごろ日ごろ忍びたる。
 うもるかと命かな。
 思へば惜しき。
 やよ花すみれ心あらば泣きわびて。
 恨をのみてはかなき戀に泣きわびて。
 うづもるわが戸かばねの上に咲け。
 契りし人の思ひいでいしもたづねて來りなば、



戀しきまいに ひとりそひて
 もえたる舌を あはすれば
 足もどに高く 音たて
 里川やみに 流れゆく

春の夕暮

雲雀の聲は 地におちて
 山もどかすむ 夕暮に
 土手のしばふに よりかゝり
 罪なきことを かたらへば
 少女の袖に はらくと
 しづ心なく さくら散る
 春はかすみ うづもれて
 夜になりゆく 野の末に

死

一、日の勞を休むるに眠を以てし、一週の勞を休むるに日曜
 を以てし、一生の勞を休むるに死を以てす。浮世は勞苦を意
 味す、眠なくんは、何によりてか、その勞を忘れむ、人生は憂患
 を意味す、死なくんは、争でか、其の憂を脱せんや、眠や、死や、こ
 れ、齊しく、靜止、無感覺、無活動の境なり、人は常に曰く、世の中
 に、寝るは、ど、樂なもの、はなしと、而して、何故に、死を、恐れ、死を
 嫌ふか、眠は、よく、知覺を、亡くすと、いへども、明日を、待て、また
 覺む、明日とは、未來なり、希望なり、光明なり、人一度死すれば
 また此の世に歸り來らず、然れども、死果して、未來なきか、希

望なきか、抑も、光明なきか。

天堂地獄の有無、こゝに之を問はず、魂魄の存没、またこゝに
 之を問はず、されど、人に未來の希望なくむば、浮世はいかば
 かり、闇黒、乾燥なるものぞや、人の身体は朽つれども、その事
 業は滅せず、その名も亦うせず、天堂以外、人に浮世の明日な
 しとせんや、誠に、一思せよ、われ何の故に、世に生れたるか、わ
 れ、世に生れて、如何なる天職を有するか、天意、茫々、測るべか
 らず、ただ、人には、活動力あり、血は、涌き、情は、熱す、人は、一生、黙
 坐して、枯死する能はず、必ずや、起つて、其力と、才とを、試みざ
 るを得ず、其活動力は、知らず、人に活動を命ず、而して、
 何來の聲、起て、働けよと、さゝやく、分に、應じ、力に、應じ、一日、働

け○ば○一○日○の○務○を○盡○く○し○た○る○心○地○し○一○生○働○け○ば○一○生○の○職○を○
 終○へ○た○る○心○地○す○人○生○觀○な○ど○と○名○を○付○け○て○考○へ○込○め○ば○果○も○
 な○け○れ○ど○簡○單○に○解○釋○す○れ○ば○人○生○は○畢○竟○勞○働○の○謂○に○外○か○な○
 ら○ず○飢○ゑ○て○食○物○の○味○を○知○り○疲○れ○て○休○息○の○味○を○知○る○汗○を○流○
 し○血○を○流○し○て○こゝに○一○日○の○勤○を○盡○く○し○た○り○と○自○覺○し○た○る○
 も○の○に○し○て○始○め○て○眠○の○神○の○寵○あ○り○一○生○の○事○ま○た○此○の○如○し○
 夜○半○泣○い○て○麵○包○食○ふ○も○の○に○あ○ら○ず○む○ば○神○の○有○難○さ○を○知○ら○
 す○か○の○金○殿○玉○樓○に○醉○生○夢○死○す○る○長○袖○者○流○い○づ○く○ん○ぞ○死○の○
 味○を○知○ら○む○や○
 夕○を○知○ら○ざ○る○蟬○蛸○も○一○生○な○れ○ば○春○秋○を○知○ら○ざ○る○螻○蛄○も○一○
 生○な○り○鶴○の○千○年○龜○の○萬○年○も○亦○一○生○な○り○迷○ふ○も○の○は○百○年○も○

短○く○悟○れ○ば○刹○那○も○亦○長○し○人○生○の○長○短○の○知○覺○は○年○數○の○多○少○
 よ○り○も○寧○ろ○事○業○の○多○少○に○由○る○即○ち○活○動○力○を○費○や○し○た○る○の○
 多○少○に○由○る○試○に○蚊○と○い○ふ○微○蟲○を○見○よ○そ○の○人○の○耳○邊○に○近○く○
 時○は○ぶ○ん○と○い○ふ○音○あ○り○俗○に○之○を○蚊○の○鳴○聲○と○云○へ○ど○ま○こ○ど○
 は○鳴○く○に○あ○ら○ず○し○て○そ○の○羽○音○な○り○今○實○験○せ○る○所○を○き○く○に○
 蚊○は○一○秒○時○間○に○そ○の○羽○を○震○ひ○動○か○す○こ○と○百○四○十○回○な○り○一○
 秒○は○人○が○一○た○び○息○す○る○時○間○に○も○足○ら○ず○而○し○て○蚊○は○百○四○十○
 回○の○活○動○を○な○す○さ○す○れ○ば○一○分○間○に○は○八○千○四○百○回○の○活○動○あ○
 り○十○分○間○に○は○八○萬○四○千○回○の○活○動○あ○り○其○活○動○の○數○も○亦○多○か○
 ら○す○や○天○上○の○一○年○は○人○間○の○一○日○人○間○の○一○日○ま○た○蚊○の○數○年○
 に○相○當○す○べ○し○夏○の○初○め○に○生○れ○て○秋○の○初○め○に○死○す○る○蚊○の○一○

生人より見れば短かなるが如し、されども蚊に在ては、大に長かるべし。一夏九十日の間、幾んど人の想像も及ばぬ多くの活動をなせばなり。人生、眞の意義は、哲學者の考察と解釋とに任かす。されど眞理と云ふも畢竟するに大なる獨斷のみ。われは安心立命を哲學者の見地に求めず、宗教家の見解に求めず。天、われを苦しむるに生を以てし、われを休むるに死を以てす。晝間額に汗を帶ぶるものにして、眠の味甘く、辛苦の内、一生を了したる者にして、死の味殊に甘し。まして死は生に勝る時あるに於てをや。

人生の意義、徒らに長命を貪るにあらずとすれば、人はたゞ天命を顧みて、生死は度外に付すべきなり。彼の窮して自及

するもの罪過を悔いて自及するもの、慚憤の餘りに自及するもの、これたゞ浮世の苦を知る、未だ眞に死の價值を知るものと云ふべからず。生よく事業を成し、死また能く事業を成す。生中希望あり、身後まゝ希望なくんば、あらず。仇敵の娘なれば、この世では添ふこと叶はねど、親と一所でないといふ誠を見せなば、未來は夫婦蓮臺の半座を分たんと、の義峰の詞に、满腔の希望を抱きて、父が毒刃に罹りし、矢口の渡し、の頓兵衛が娘が最期は、如何ばかり幸福なりし。一死ぞや、誠をつくさぬ女に添はんよりは、むしる信を守りて、橋下に溺死せし尾生の一死、あながちに痴といふべからず。よしやし、いみ川の水汲んで飲む人あらずとも、小春治兵衛が心中の

まごころは情あらむ人ぞ汲む桂川の水とこしなへに浮名
 を流せどお半長右衛門がむかしの名残は今に人の袂を沾
 さすや幸福なるは情死なり情死の意義は臭骸と情死する
 に非ずして希望と情死するなり魚は瀬に住み鳥は空に飛
 ぶ人は希望のために生きまた希望のために死す明日なく
 んば今日の眠りは如何ばかり苦しき眠ぞや浮世の明日な
 くんば浮世は闇く冷かなる塵界のみ人は明日あるが爲め
 に生く死して厭はざるも亦明日あるが故なり
 小隠には山林あり大隠には市朝あり大隠なほ足らざるも
 のにはたい死あるのみ死は理想の樂士に入る關門なり人
 生最期の希望はたい此門を過ぎて求むべし繋げる馬を鞭

てど馬は走ること能はず現世の羈縛を脱して後希望は始
 めて充すべきのみ生は寄なり死は歸なり達人は生死の外
 に濶歩し仁人は身を殺ろして仁を成す陋なるかな世の衆
 生唯生の樂しきを知つて死のたのしきを知らず蝸牛角上
 に浮榮を貪り石火光裡に空利を争ひ碌々として身は草木
 と共に朽ち名の残るなく事業の残るなし名は賓なり事業
 は主なり名あつて事業なきはあれども事業あれば必ず名
 あること火の燃ゆる處に必ず烟りあるが如し身死して事
 業は死せず事業は人生の目的にあらずやされど小人は利
 に臨みて迷ひ通常の人士は死に臨みて躊躇す平常は大聲
 疾呼する慷慨悲歌の士も及の閃めくに逢へは舌を斂めて

走り口先ばかりは強くして、風雲を叱咤するの概あれともいざとなれば、腰を抜かす。畢竟するに死の覺悟なければなり。死ば鴻毛よりも軽く、また泰山よりもおもきは、たゞ時に應ずるのみ。通常の人士は死重からずして死を恐る、死の爲めに縛束せらる。憫むべし。彼等は生んが爲めに生くるにあらずして、死が恐ろしさに面白からぬ。生を貪るもの多し。而かも、人は百歳なる能はず。死に臨みては、五十年も七十年も共に夢のみ。安んぞ其長短を感せんや。悟らざるものは唯生を愛し、悟るものは能く生死の上に超脱す。死生の上に超脱するものにして始めて共に談ずるに足るべく、また大なる事業を遂ぐるに足る。通常人の大事に臨みて誤るものは、死

の覺悟なければなり。

昔は趙括、兵を出さむとせし時、金を賜はりけるに、好地を相して美なる家を建てぬ。これ其志死にあらずして、生に在り。死の覺悟なくして、軍陣に臨む。後髪ひかる、心地して、決死の働をなすに由なし。その母、趙王を諫めて括を將とすることなからしめんとしたれど、趙王従はざりしが、果せるかな。趙括は見事秦の爲めに敗られて、趙の四十萬人は坑にせられぬ。括は能く兵を談じて其父も若かざりしが、事に臨んで敗れしものは、死の覺悟なければなり。後世の人士趙括たらざるもの幾人ぞや。太平の世に、放言大呼して、愚俗を赫すも生死の巷に望みては、ぐうの音も出でず、大事爲めに誤り、九

毋の功一簣に飲く、陋なる哉、虎穴に入らずんば、虎兒を得ず、
 希世の奇功偉績は、たい死を以て買ふを得べきのみ、藺相如
 の璧を奉じて秦に使用するや、彼は已に死を期せり、生還を期
 せざりき、されば、秦王、城を交換するに意なきを見るや、忽ち
 璧を取り、己の頭と共に、之を柱に碎かむとす、彼は、璧と共に
 碎けむことを甘ずるなり、秦王その志の奪ふべからざるを
 知りて、また強ひず、相如舍に歸り、ひそかに璧を本國に返へ
 し、然る後に、秦王に見えて曰く、秦は古來信を守る國にあら
 ず、璧は已に國に返しぬ、我を殺して甘心せよと、何ぞ其壯な
 るや、秦王も流石にこの決死の士に加ふること能はざりき、
 決死の力も亦大なる哉、決死の士にして、はじめて奇功あり、

而してこれ太平の紳士に向つて語るべからず、退いては浮
 世の苦を脱するに足り、進みては希望を充すに足る、且つ治
 世と亂世とを問はず、由來、大事は血を以てあがなふべしい
 ま、國家の大任に當る者、國のために倒るゝの覺悟あるか、正
 義を唱へ、聖明のために弊事を除かんとするの志士、果して
 能く死を決せるか、怯犬はたい遠く吠ゆ、勇氣なる犬は、直に
 來て噛み付く、死は樂土に入るの關門にして、兼て勇怯を分
 つの試金石なり、少年心事、劍相知とは、古の事、今の志士、豪傑
 の心事は、たい黄金相知る、止んぬる哉、

寶車

待ちわびたりし 梅の花

今はさかりと なりにけり。

とよさかのぼる 朝日子も

かほるばかりの 心地して、

道のゆくてを ながむれば

霞は遠く だなびけど、

秩父根おろす 北風の

はだへに寒く しみわたる。

花のみやこの かたほとり

いとつけはしき 坂道に、

重荷つみたる 荷車を

ひきなやみたる 男あり。

さすがに草鞋は はきたれど、

寒さをふせぐ 足袋もなく、

まとふ一重の布子さへ

みるめの如く やれはて、

脛もかひなも あらはなり。

寒さにふるふ 聲あげて

力のかぎり ひく車、

右に左に 折れめぐり
上りくゝて やうやくに

坂のなかばに 至りけり
車のあとを 推しつゝも

助けてゆくは 妻ならむ。
おなじ姿に やつるれど

赤みを帯びて ちゝれたる
髪をかしらに まきあげて

たばねしさまは 女なり。
年齒もゆかぬ うなる子も

紅葉の如き 手をのべて、

母親と共に立ちならび

同じ姿に 推してゆく。

親子みたりが 前世には
いかばかりなる 業ありて、

めぐる因果の 小車を
ひく身の上と なりにけむ。

「坂もなかばは 上りたり。

しばらく休め、 いざこゝに。
父なる人の ことのはに、

わらべは聲を ふるはせて、

「のう父上よ、許してよ。

力のかぎり つくせども

よわきかひなを 如何にせむ。

いとゞ寒けき このあした、

あさげにわづか 一椀の

粥をすゝりし のみなるに」

きびしき風の ふきぬれば

腹の中まで 冷えわたり、

かひなも足も 力なく

眼もくらむ ばかりなり。

やよや母上 きゝてたべ、

わが一生の ねぎごとを

飢ゑては如何に はげめども、

力はさらに いでぬなり。

かしこの店にて 何にても

腹みたすもの 買ひてむや」

母は涙に むせびつゝ、

「ことわりぞかし その言葉、

されど太郎よ、察してよ、

親の切なる 心根を。

學の庭にかよふべき

年をもすでに 過ぎけるに、

貧しき家に そだてられ

苦しきわざに つかはれて

書をまなばむ 由もなく

いろはも知らぬ 身の上を

かこつ子よりも たらちねの

親甲斐もなき この親の

胸はくだくる ばかりぞや

我身も元は さむらひの

家に生まれし ものなるに、

つゞく不幸に かくばかり

おちぶれたれど いつかまた

世にうかぶ瀬の なからでや

聞ともわきてよ、 やよ太郎、

坂をのぼるも 空腹の

思をなすも しばしぞや

父をたすけて はたらける

ひくいに何を 買ひやらむ。

旗か喇叭か 鉄砲か、

支那のいくさの 錦繪か。

この荷を送り といけなば、

かならず買ひて とらすべし、

好める暮も うちそへて。

いざとばかりに 親と子が

よびかはす聲も いさましく、

押しつゝゆけば いつしかに

車は見えず なりにけり。

* * * * *

古巢をいでし うぐひすの

なくなる聲に さそはれて

園より園に うつりゆき

ひねもす花に うかれしを、

雲よりもるい 山寺の

鐘のひいきに れどろきて、

家路をさせば 夕日影

西のはやしに かたぶさぬ、

處もおなじ 坂路に

今朝の夫婦に あひにけり。

重荷にかへて 荷車の

上に載せたり、 うなる子を。

げにや玉にも 黄金にも

くらべむものなき 子寶を。

夫婦が肌

衣はもとの まいなれど、

わらべは今朝にひきかへて

いと見安くもなりにけり

心よげなるその笑顔

右手に錦繪握りつゝ

ゆんでに喇叭とりあげて

いと高らかに鳴らすなり

「けはしき坂ぞ、心して

まろびな落ちそ 車より」

父のことばに 母もまた

「今日はたらしし 報いとて

好める品は かひやりつ、

またも車に のせにけり、

その載せられし むくいには

しかと持ちてよ 酒樽を、

れいと答へし その後は

かたみに笑ひ どのめきつ、

遠ざかりゆく 荷車の

影はかすみにな わかねども、

なほもわらべが 吹きならす

喇叭のひいき かすかなり、

浅間山のひと夜

都の残暑をよそに、碓氷峠のあたりへと思ひたちたれど、輕井澤やよけむ、霧積やよきと、停車場にいたりてもなほまどひしに、たぐれて來りし鯉洋は、や輕井澤までの切符を買ひ、荷物もあづけたりといふに、さらばとて輕井澤にものすこゝは、中山道と共にすたれはてたる孤驛なれど、海をぬくこと、四千尺にちかく、白雲人の懷をたづねきて、夏を知らぬところなり。四面山を帯びたる高原ひろく見わたすかぎり、尾花招き、女郎花笑へり。菅茅の間に、別荘とは名ばかりなる小屋の點綴せるは、西洋人が避暑のすみかどや、あたらしい

植ゑたりとは見ゆぬ、並木の多くは老櫻なるが中に、梨、李などの、時を同じうして累々たる實をつけたるが立てる街道をはさみて、鱗次せる家の五十戸には、足らぬ山村のいたうあれたるに、思ひのほかの牛肉うる家、たつ洋服うる家、ふたつ洋服の裁縫店、みつばかりそなはれるにても、こゝに暑をさくる西洋人のたほきこと、は知られつ。旅館ともいふべき旅館は、たゞ二つのみなるが、その一は西洋人のみをやどして、日本人はやどさぬといふに、腹だしく、今まひとつの旅館にゆけば、もはや客を入るべき室なしといふ。霧積にゆかばよかりしを、と悔めば甲斐なし。時は午の到をすぎたり、せめて午食ばかりにても物せ

むとて、むかしの建築のなごり見えていとおほきく、一抱に
 あまらむと見ゆる大黒柱のひかりかいやけるが下にすは
 りけるに、宿の女房つくくどわれらを見て、さすがに心苦
 しくや思ひけむ、座敷を都合せむとて、半時間ばかりまたせ
 たるのち、いざたまへとて導きたるは、奥にはなれたる一室
 なり。この家にてはこよなき室と見ゆれど、湯どの、かはやの
 うしろに、新にたてつぎたりどおぼしき平屋にて、となり
 は、西洋人の専領せる旅館の二階さ、やかなる庭をへだて
 、高くながめは更になきに、こゝろよからず、午食終へても
 心おちつかねば、こゝよりは二里あまりの程と聞きつる霧
 積の温泉のありさま見て來むとて、荷物はそのまゝにして

いでたつ。
 草にうもれたるむかしの中山道を、碓氷峠の方へ半里ばか
 りのぼりゆけば、輕井澤の驛はや脚底におちて、さながら臥
 蠶の如し。こゝは峯のいたゞきなり。十級ばかりの石磴の上
 に安置せられたる古社は、追分節にうたはたれる碓氷峠の
 權現にや、祠下の力餅うる家に、茶をもとめんとてたちよれ
 ば、老婆のすこやかなるが、澁茶の外のもてなしに、うらの二
 階にてゆるやかに休ませたまへといふに、心すまね、どの
 ぼりて見れば、こは如何に、近く碓氷峠の連山を見下し、遠く
 兩毛武總の平野をながむる景色、輕井澤とは眼界をことに
 して、とみに目さむる心地す。霧積の温泉のこと問へば、いた

く零落して浴戸はわづかに一戸となれりと云ふ。その里程を問へば、崎嶇たる山阪二里にして遠く、車を通せずといふ時は三時をすぎたり。往復四里あまりの險路、旅の用意なくてはと思ひて歩をかへす。浴を終へて酒を命ず。酒至る。その酒悪くして酔ふに堪へず。忍びて四本ばかり倒して、杯を投じて碁を圍む。二たび戦ひて二たび勝つ。二目かけと云へど、さかず。こたび負けなば二目置かむとて、また局に對す。未だ半ならずして宿の女きたりて杯盤を收む。告ぐるに明旦淺間山にのぼらむことを以てし、導者を雇はんことを囑しけるに、女諾してくさくさのこととはなしけるついでに、西洋人は夜よりのぼりかけて朝

早く山頂に口の出を見るものおほしといふに、土地になれざることゝて、そこまでは思ひいたらざりき。闇夜歩み得べき路ならば、これより直に程に上らむはやく導者をやとひこよとて、碁はそのまゝにして起つ。われ手をうちて、はじめて都をいでたる心地せりといへば、鯉洋小をどりして、愉快と連呼す。時は九時なり。こゝより淺間山の頂まで六里の程なれば、今よりいでたつは早きにすぎむと思ひたれど、はや導者來れりといふに、さらばとて、旅館を出づ。同じ家にやどりしひとり、の學生、同行をもとめければ、一行あはせて四人となりぬ。頃は八月廿二日なり。墨を流せる空に、電光をり、く、きらめ

に、露にうるはひたる生木とみにはもえむとせざりしが、
 からうじて火うつりは火焰數尺の上のぼり火粉天
 に朝し十歩の間夜色をやぶりて鬚眉あきらかなるにたい
 の雑草と思ひあたりの草もよく見れば女郎花のなよや
 かなるがたてる側には桔梗のやさしきがしらを傾け薄
 も穂にいで火勢より起れる風になびけり空は霽れつく
 して星斗でづから押しつべし四山ねむりて火ひどり聲を
 なす四人火を圍みて暖をとり導者を相手に雑談しながら
 握飯くらひなどすこのあたり野獸は居らぬかど問へば
 猿兎などおほし鹿もいで熊もをり／＼出づあつ
 とき狼にわたつけられしが生きたる心地はせざりきされ

き、風すいきに聲して冷氣面をはらへり沓掛より右折すれ
 ば足先やうやく仰く輕井澤は早や離山にへだいらりて四面
 また人頼なく追分の燈火も山外にしづみぬ電光收まり陰
 雲とけゆきて星辰漸くおほし仰げは淺間山頭を壓して聳
 え噴烟天にたなびきて巨人の息するが如し山阪のぼりの
 ぼりて小淺間のふもとにいたりしに導者路を失ひ荆棘を
 ひらき蟲の聲をふみてゆくに枝しば／＼帽を奪ひ白露股
 をうるほす時計を見れば十一時なり時早きに過ぐ風寒さ
 山頂よりこゝにやすまむとて木のや／＼すきたる處に草
 をはらひてすはる山氣肌にしみて寒さ堪ふべからずかた
 みは木枝をり來り堆くつみかさねて火をつけむとする

ど、十歩よりは近づかず、われといまれば、狼もといまらわれ、走れば、狼もまた走り、ひとへに我を守るもの、如くなりしが、山をいつるとき、ひと聲高く鳴きて、わかれゆきぬ、思ふに、よき狼にて、その一聲は、別をつげたるにや、されど、そのするどき一聲、我耳に、と、い、ろ、き、山、岳、呼、應、せ、し、瞬、時、は、氣、ぬ、け、魂、ら、ば、い、れ、て、幾、ん、ど、起、つ、こ、と、能、は、ざ、り、き、な、ど、か、た、る、ほ、ど、に、一、痕、下、弦、の、月、さ、び、し、げ、に、東、山、の、う、へ、に、い、で、ぬ、た、け、る、火、の、あ、た、い、か、さ、に、眠、を、催、し、て、鯉、洋、ま、づ、草、上、に、仰、臥、す、幾、莖、の、女、郎、花、彼、れ、が、肥、え、た、る、か、ら、だ、に、し、か、れ、花、だ、け、は、残、り、て、腰、の、あ、た、り、な、ど、に、ま、つ、は、れ、る、も、あ、は、れ、な、り、導、者、も、また、眠、り、ぬ、わ、れ、學、生、な、る、人、と、相、對、し、て、語、な、し、夜、は、ま、す、く、

ふ、け、ぬ、山、氣、空、を、か、す、め、て、月、や、う、や、く、高、く、冷、光、地、に、し、き、て、草、露、み、な、玉、を、つ、い、れ、り、か、ゝ、る、ほ、ど、に、火、勢、滅、じ、け、れ、ば、火、を、添、へ、む、と、て、起、ち、て、枝、を、折、る、そ、の、音、に、鯉、洋、ま、づ、さ、め、て、起、つ、ま、た、一、枝、を、折、り、し、に、思、ひ、し、よ、り、も、も、ろ、か、り、し、か、ば、力、あ、ま、り、て、導、者、の、上、に、倒、る、導、者、驚、い、て、起、つ、時、は、一、時、を、過、ぎ、た、り、火、は、露、に、ま、か、せ、て、ま、た、程、に、上、り、ぬ、小、淺、間、の、ふ、も、と、を、過、ぎ、て、淺、間、山、を、よ、ち、の、ぼ、れ、ば、一、山、ま、た、樹、木、な、く、路、は、小、石、の、散、布、せ、る、上、を、ほ、と、ん、ど、直、上、す、月、は、あ、れ、ど、も、路、は、く、ら、し、導、者、の、提、燈、を、さ、き、に、た、て、魚、貫、し、て、の、ぼ、る、こ、の、山、け、は、し、と、に、は、あ、ら、ね、ど、路、の、曲、折、す、く、な、け、れ、ば、歩、行、い、と、か、た、し、數、歩、の、ぼ、れ、ば、喉、か、わ、き、汗、い、づ、休、め、ば、汗、忽、

ち収まり寒氣肌に透り、袷羽織着たる身も、なほ寒戦す。またのぼれば、直に熱す。一寒一熱のぼるも、苦しく、休むも苦し。小淺間すでに脚底に落ちたれど、淺間のいたゞきは、なほ天外に在り。一行四人時には相近づき、時には相遠ざかる。さまでへだゝらぬ。導者の提燈の光なきまでにかすめるは、雲のおかせるにや。霽れし空模様かはりて、雲しきりに動き、片月弧にしてあたりはほのぐらし。いよゝのぼれば、風いよゝあらく、寒さも加はりて、汗はまたいでず。たゞ喘く聲のみ高うなりぬ。かくて路右に曲りて急ならざるかと思へば、足下は削下して、そのつくる處を見ざるに、風はうへより吹きおろして、からだやゝもすれば倒れむとす。危きこと言はんか。

たなし。月の忽ちくらくなれるに願みれば、大鵬翼を張りて、近し我を搏たむとするが如きに、おどろきて啼視すれば、一帯の黒雲なり。われと相距ること二三丈に過ぎず。われと共に山にのぼらむとすれど、吹おろす風のつよきがため、のぼり得ず。風とたゝかひて空に動搖す。わいよゝのぼれば、凝雲は遂に脚底におちぬ。風のやゝ硫黄の氣を帯び、そめたるに、山頂の噴火口も最早遠からじと思ふほどに、やがて彌漫たる白雲、山を壓して下に走る。身その雲中に入れば、硫氣鼻を衝いて、ほとんど呼吸しがたし。これまことの雲には、あらで、天風の噴烟を捲きおろせるなり。路は東より上り、風は西より吹く。噴烟いよゝ濃く、息もとまらむばかりなる。

に衆むせびいり、辟易して、歩をかへさむとしたれど、こゝにて下らむも残りおほしとて、勇を鼓してのぼる。手巾にて鼻と口とを掩へど、砂灰なほ口中に入りて嗽々として聲あり。烟の勢つよき時は、地に伏して之を避けや、うすらぐをまちて、たちてゆく。さながら、駱駝の背に沙漠を通る旅人の風にあひたるがごとし。一起一伏、からうじて頂上に近づけば、路のかたはらに幾多の小孔ありて烟をはく。試にその口に手をふるれば微温あり。かくて遂に頂の噴火口に達し、路を左にとれば、風の衝をさけて、噴烟また人を襲はず。右は噴火口にして、一面に烟音せずしてのぼり、そのふかさを知らず。一たび足をあやまらば、奈落に轉落すべく、左は山壁削下し

て急に、白雲みちて、眼界は左右前後、數歩のうちに限られぬ。右は烟、左は雲、雲といふも、もと水蒸氣の凝れる所、火山の烟といふも、まことの烟にはあらで、地下より噴き出す水蒸氣なれば、その色白雲と異ならず。たゞ硫氣の有無によりて之をわかつ。われら雲烟の中をゆくに、路時にさけて、その底を見ず。人は脆き石塊をふみてすぐるなどいともものすごし。はじめ噴火口を一周せむと思ひたれど、何のながめもなき雲烟の中をゆかむも趣なければとて、足をかへす。雲烟の中もさすがに明らかになりたるは、夜の全く明けはなれたるにや、一呼して噴烟の散布せる舊路を取りて下れば、日は既に東山のいたゞきに高し。導者頂をかへりみて、今朝のごと

く山の荒れたるは、近來嘗て見ざりき。それにも屈せずしてのぼりたまひし御身たちのけなげさよといふ。はじめ山のなかばにいたりし頃、二個の提燈相へだゝりてのぼり來れるを見き。これ例の西洋人の來りのぼれるならむと云ひあへりしに、歸路一人も見ず。思ふに路を塞く噴烟のいみじきに辟易して、歸りたるにやあらむ。噴烟の中を出で、はじめ蘇生のおもひをなし、さきに困頓してのぼりし山壁一呼して走り下り、小淺間の頂と相對する所にいたりて休息するほどに風やゝなきて、噴烟今は直上し、雲とけて、近巒遙峯ことごとく脚下に朝す。この雄偉なる景色をさかなに一瓶の酒を四人の口にわかち握飯をくらひて、腹をみたせは、勇

氣また生じて、身體もどのごとくなれるに、放吟の聲と共に雲を蹴て、午前九時には、身は早や足をのばして旅館の一室によこたはりぬ。



海 嘯

千代のちぎりを うちこめて

かたみにかはす 杯の

數さへみたび かさなりて、

ねよどの鐘も ひしくなり、

わが手にすがれ、 わざも子よ、

いづも八重垣 つまごめに

作れるひろに いでたちて

語りあかさむ、 夜もすがら、

うたげの筵 あとにして、

今は人目の 關もなし、

蘭燈くらさ ひろのうちは

われらふたりの 世界にて

いざやわざも子、 聞きねかし、

高根の花と よそに見て、

ながくし夜を 泣きあかし

戀ひわびにしも 夢なりや

錦のころも
 好まむまいに
 身につけよ
 わがもつ土地は
 山に田に
 見渡すかぎり
 はてもなく
 いつむねつ
 こがねも米も
 溢るなり
 をじかの角の
 つかのまも
 いのちなり
 なれは我身の
 あはで空く
 すぐべしや

身をも家をも
 うちすてい
 切なるほどは
 こひわたりたる
 心根の
 このからだにも
 思ひ出よ
 なれがやさしき
 顔みれば
 胸のうらみに
 わすられて
 恐びたる
 日ごろ年ごろ
 心もそらに
 なりにけり
 日もてりまざる
 心地して

桂もたかむ

なが爲めに

玉もかしがむ

なが爲めに

今日の心を

こゝろにて

千代も榮えむ

もろとも

世に蓬萊の

山あらば

死なぬくすりも

求めまし

こゝろばに盡きぬわが心

たぎつ涙やかたるらむ

いざくわぎもどく入りぬ

契をこめむにひ室に

いざと誘ふ時しもあれ

天地も動くひゞきして

山より高きかさつ浪

たけり狂ひて寄せにけり

手に手をどりてわしれども

人より早き浪の足

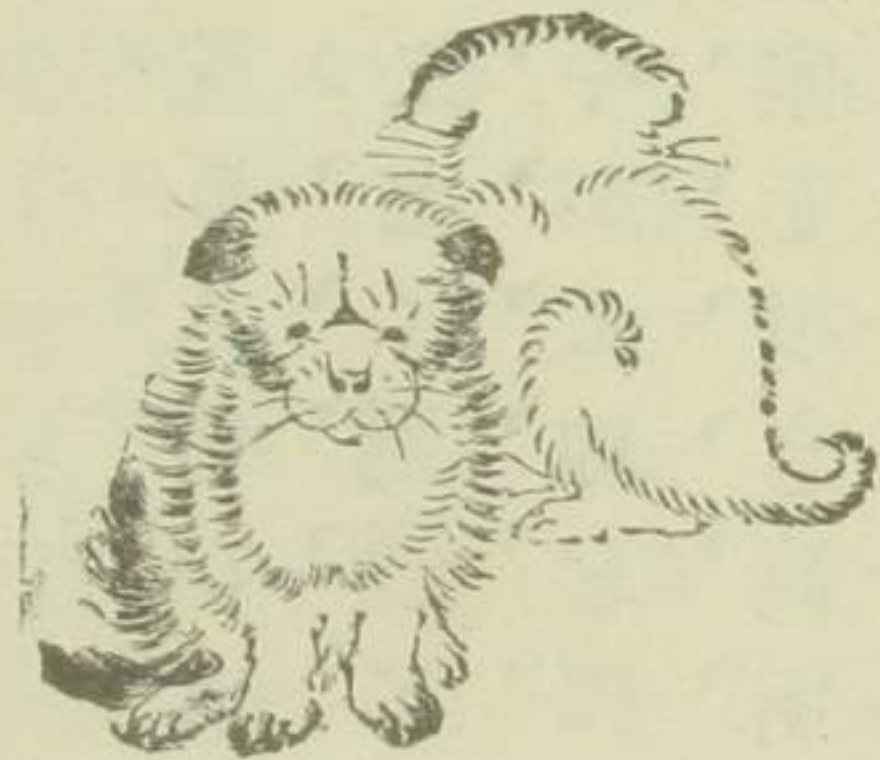
山さへ水にうづもれて

くぬちは海どなかにけり



かたみに抱き
抱かれて
よそめもいとむつましく
おもてに笑はふくめども
この世の息は絶えてけり。

つなみの去りし
ありそべに
あはれ榮えし
家里は
たい荒れはてし
野原にて
あらしに咽ぶ
ひともの
松の古根を
まくらにて
はれの衣を
うち着たる
かばねぞふたつ
残りける
月はさびしく
残りけり



駒のたてがみかいなで、
 吹くものどけき春風に、
 ひど聲たかく嘶けば、
 あなや梢のさくら散る。

春駒

みどりくれなるこきませて
 錦と見ゆる春の野の
 草葉にもゆるかげろふに、
 こゝろは空にうきたてど、
 あはれきづなを如何にせむ、
 朽ちせよきづな、いざ早く。
 木の下影に草はみて、
 花にとまらむこゝろかは、
 見よやかなたのみそらより

雨奇録

人狂ひ人走り人叫び人喘ぎ人争ひ人酔ふ熱鬧糞壤の巷に
 天つをとめ息するがごとく颼颼として脩篁のほかに涼
 味をもらしそめし微風やがて地を捲く疾風となり雪どび
 天撼くかど見れば紫電空を劈き萬雷地におちて俗物のす
 だける金殿玉樓ごとく砕けて烏有に歸し沛然たる大
 雨盆をかたむけて三千世界の塵垢と俗氣とをあらひ去り
 たるあと空さりげなくすみわたりに月は梧桐の枝にたか
 し。

めなる雨脚相連りてしげく水をわたる華鯨のひいき身に
 しみてそるに世のほかなきを覺えけるに遠目にもしる
 きひとりたわやめの紅のもすそ風になぶられて雪の肌
 みえつかくれつ纖手にかさす蛇目傘の上にあだなる花片
 のせていづちゆくらむとおぼつかなし。

日ごろ涙にしぼりし袂都のほかの山風にかわかさばやど
 て、鳥山羽衣の二子と共に都には烟をのこして船路はるか
 に房州さしていであちけるにくもりし空雨をかもして風
 あらく浪たかし保田にて舟を下るほと雨ますくいみじ
 きにあくまでもつらき世の中と逆旅にいたりてぬれし衣
 を凍えしからだと共に乾しなとすこの日鋸山にのぼらむ

と期せし望たがひて、心のやるかたなきに、窓をひらきてのぞめば、雨脚の外、黒雲峰頂に徂徠して、山怒を帯びてものすぞし。半日たれこめて、晩に杯をあげたれど、鳥山風のこゝちあしく、羽衣船暈につかれて、一座もしめりがちなり。夜に入りて窓をたゞく雨の音、ますくはげし。またく孤燈の下に川の字に座して、連歌なぞしける末に、雨も心のありげなりけり。と羽衣のうちだすに、しめやかに語らふ窓におどづれて、ど上の句つけたれど、はやいをねにけむ。答はなく、いびきの聲、雨に和して高し。

小雨そぼふる春のあした、見はてぬ夢のあとをたづねて、道灌山のあたりにもものしけるに、花は早や地に委して、遊人の

あともたえぬ茶を乞はむとて、かたへの掛茶屋にやすらへば、この雨によくこそと笑顔やさしく、煙草盆もてきたれる女の、田舎のきむすめ、きたるが、年は廿四五と見ゆるに、髪の鳥田なるは、樂天のいひけむ、貧家の女のとつぎがたきにや、われの如く、雨に雑沓せぬをよるこびてふりはへて訪ふ人もあらざるべければ、さぞや花ちりての後はさびしからむといへば、げに花のさかりもひときとて、雨をながむる横顔に、残りし花びらをりからの風に、さそはれてはらくとちりかゝるもあはれなり。

寒き冬の日、うしろまぶきに降る雨を、阿彌陀傘にうけて、友とたゞふたり、ひねもす東海道をのぼりける夕つかた、友の

いばりせむとするに、手凍えてうごかねば、われに洋服のば
 たんはづしてくれよと云へど、わがてもうごかず、さらばと
 て居酒屋の繩暖簾頭にくゞりて、醬油樽に射大臣をまなび、
 芋をさかなに酒をよび、大なる猪口、ひとたびのみ干せば、腸
 熱し、ふたゝび傾くれば、耳熱し、三たび満引すれば、手足舒び、
 四杯五杯、心ゆたかに魂とけて、浮世のとはざかれる心地す
 るに、さかづき片手に、そとも見わたせば、はやみちわたれる
 闇の中に、ほの白き雨をおくりて、心のまゝに吹きあるゝ風
 の音、さながら悪魔のさけぶが如し。
 ふりつゝきたる霖雨に、山がはの橋ながれおちて、人目のほ
 かの戀のかよひ路絶えはてたるに、一日も千秋のおもひと

やかたみに岸にいで、顔を見合せては、胸更にさわぎ聲を
 かけ合せては、肉いとい躍り、羽あらばとばかりにあこがれ
 て、雨にたちつくし、風に泣きつくす涙おちて、ながれてみか
 さや増すらむなかをへたつる浪も岩にむせぶや、
 しづかなる春の夜、わが側をさりて、戀にくるひし手飼の猫
 の、さすがに久しくうかれあるきしを、面目なく思ふらむ、歸
 り來りて、室の一隅にうづくまり、闕たかきさまして、なく聲
 の、罪を謝するが如きもいと、しほらし、ちかく招きよせて、そ
 の背をなでむとするに、毛いたくうるほひて、花びらさへの
 せたり、さては雨にやと、聴けども音なし、戸を推せども、それ
 とは見えすたい、何となう打ちしめりて、淡月一痕、夢のごと

く老櫻の枝にかゝれり。
 浮世を雲にへだてゝわれ獨り高根の上にやどりける夜半、
 たちまち脚下に電閃し雷鳴しをりく山を捲いてさかし
 まに吹くあらしの雨片を送れるに下界は雨とおぼゆれど
 空は霽れわたりて月はちかく頭上にさえたりこの月世の
 中の人は知らじ月ひとりわれをてらしわれひとり月を看
 るやがて雷やみ風死にたれど雲はなほ下界を蓋へりあは
 れ浮雲の下にはなやみありぐるしみあり憂ありいつはり
 あり罪ありげがれあり雲の上には光明ありたのしみあり
 月ありまたわれあるなり不敢高聲語恐驚天上人と李白の
 うたひしもかゝるをりにや。

夏のたびぢの驟雨に野中のひとつやをまばしの傘やどりと
 たちよれば思ひもかけぬうるはしき女われを座に延き
 て茶よ菓子よとこゝろよくもてなすに身の顫ふまでうれ
 しく心ある人にひと夜のやどかりてなるもつらし明日
 のふる里と契仲のよみけむ歌のこゝろ今更にしのばれて
 世はいつまでも雨ふれかしと思へど甲斐なし点滴はや收
 るかと見れば庭の木立に蟬しぐれ聞えそめて一道の彩虹
 東天に印してたかし。
 十年の事も雨に和して心頭にいたるためしとりわけて雨
 にしのぼるゝは故郷のむかしわれまだいとけなかりし頃
 父われをつれて宅後の川に舟うけて下の町までこぎゆき

て、要事はてゝかへるさ、微雨いたりぬ。この川に堰あり、石を
 つみわたして、川を断ちたる中ほどには、一間半ながき三
 四間ばかりとおぼゆる水口あり、板を斜にしき下して、水は
 うすくその上を奔瀉す。小舟のこゝを上下するには、人は舟
 よりおりて舟を曳かざるべからず。この日父は舟をこなた
 の石堤の下につなぎ置きて、かなたの岸にたちよらむとて、
 われをとゞめおき、暫く待て、ゆめあとより来るなといまし
 めて水口の斜にたてる板の上頭をわたりゆきしに、ふる雨
 に我もこゝろぼそくて、幼氣の父の諫を犯して、つゝいてわ
 たらむとしけるが、水苔生ひて、いとなめらかなる板に我足
 すべりて、水に押しながされて、渦まく深淵のそこに沈みぬ。

かくとも知らで、父は石堤の上をたどりゆきしに、かなたの
 岸にて、ひとりの女のわらは、あわてゝ小兒流れぬと叫ぶに
 心づきて、うしろむきけるに、われあらざれば、いそぎ衣をぬ
 ぎて、水にとび入りて、われをすくひあげしとかや。この時わ
 れいまだ游泳を知らざりき。少女の我父に教ふるなかりせ
 ば、われは水底のもくづとなりはてけむ。その少女われにと
 りては、命の親なれど、われはその名を知らず、その顔をも知
 らず。さるにても、かの時われ魚腹に葬られなば、われは下れ
 る世のつらさをも知らで、なかくに今の思にまさりて、さ
 ちありし身なりけむかし、あはれ父、簀を易へて、すでに十七
 年墓木また拱しぬ。かの少女はいづくいかなる日の下にあ

今宵の情

たゝ手をとりにて しみぐと
かたみに顔を見合せて
言はじとすれど、世のつらさ。
泣かじとすれど、身のゆくへ。

君とわかれむ きぬぐは、
山とやならむ、野とやなる。
今宵ひとよの情には、

笑へ浮世の さびしきに。

るらむ知らず。



小春日和

七十路ばかりなる翁の髪、毛少しばかり頭の後に残りて、
 長き願鬚雪よりも白きが、眼鏡を額に預け、吸殻のみ残れる
 雁首斜に口に啣へたるまゝ、兩手を八字形に頬杖つきつゝ、
 餘念もなく読み入りたる一冊の草子の版本にはあらで寫
 本なるが、飛鳥川といふ表題の文字まづ表紙にうるはしく
 御家流にゑるしいだされ、女子の筆のすさびとおぼしく、
 水莖の跡さへいとやさしげなり。そもこの草紙の中には、何
 をか記せる。いざ、此翁の小聲に読み出すを聞かむ。

* * * * *

四十路あまりの長の月日、思ひしのべること、人にあかさむ
 と思ふ心もなければ、この白髪の姿となるまで、人の家に
 嫁入せず、獨身にて世を送りたる事の故由を記し置かば、或
 は庭のをしへのかたはしにもやと思ひつゝ、けたるこの年
 頃、今ははや六十路の坂を越えて、齒落ち、腰曲り、残る命はい
 くばくもあらじと思ふに、せめて手足のたつうちに、この頃
 の小春日和、ほく／＼と暖くて、心地いと快きを幸に、日當り
 よき窓の下に筆とりて、いでや、思ふこといもゑるしおかば
 や。

妾、この王子の里にすみてより、數ふればはや四十年の歲月
 を経たり。まことや、昨日と過ぎ、今日と暮れて、あすか川流れ

て早き月日によどみなく榮枯得喪またく内に遷りかはりてげに人の世は一炊の夢なりけりすぎ越し方をかへりみれば苦しき思に袖を玄ぼりたることもありき切なき心のやるせなくて夜もすがら獨り泣き明かしたることもありきその時こそは苦しともまた切なしとも思ひけれどもなべて夢と消えたる昔の事どもたとひ樂しかりきとて嬉しかりきとて今はたいかでか心にしかと分くべき苦しかりし夢も樂しかりし夢も共にむなしく覺めては唯殘るものは現在の身の上畢竟世には苦なく樂なしと悟りぬるものからことわり知らぬは袖のしづくにて玉のやうなる赤子膝にのせがらくを手にふり鳴らして坊やは好い子と

高く呼ばるゝ聲に自ら驚きて目を開けば空しき間に鐘の聲しづみて燃えのこる燈火の影かすかなり軒傾き柱ゆがみたる草の屋に心細くも唯獨り住みなれてはさすがに始の如くは物憂からず世を渡るたつきとてはかたくしからぬ身なれども已むを得ず村のわらべだちに讀書習字さては裁縫など教ふるに師匠さまともてはやされ衣食には事を缺がずして今日まで甚しき病の苦もなく都の塵をよそに見て後やすきものからまたものさびしき身の上半ば朽ちたる門のとびらは叩く人なしと知りつゝもなほ橘かをる夏の宵は水鶏の鳴く音にはかられ天地も氷る冬の夜には庭の笥さへ音づれず人目も草も枯れはて

たる片田舎の一軒家にも一陽來復して春を迎ふれば軒場の梅はゝゝみて鶯も來鳴くに引きかへ身は埋木となりはて、花咲かむ折もあらずいつも冬枯の身の心も自ら萎れ月と花とに涙の数々添へて流れゆくあまたの月日つもりて久しき四十年の浮沈を唯一場の夢と見て今もなほ夢の心地になむ。

妾は今かく零落れたれど氏は春野と云ひてもとは五千石領したる旗元の家柄父の名を茂基と云ひ母の名を雪子といひきまた妾の名は如何なる親の心なりけむ土塊にも劣る身の玉子とはいとはづかしうなむ。

思へば世に妾ばかり不幸なる人は多くはあらじ父にはい

とけなき時死別れたればその顔だに覺えず言はむかたなく悲しきに母にもまた小學を卒業せし年死別れたりその時の事も今更語りいでし語るも涙の種なれば唯一つ忘れがたきは母君は自ら起たざることを知りて妾を枕元に呼びよせたまひ夕を待たぬ身なりともせめては梅太郎に嫁をとりまたそなたの身のかたづくまでは生きながらへてあらむと思へども定命なれば如何ともしがたしこれよりは世にたより少なき二人の身の上唯梅太郎を父とも母とも頼みてよろづその教へをうけよまた言ふまでもなけれど平生常にいましめたる女の道はかへすくも踏みな違へそとて眠るが如く此世を去らせ給へり。

此時兄の年は二十歳、妾の年は十五歳なりけるが、共に孤兒となりて、天にも、地にも、血を分けたるは、唯この二人の兄妹、心細くも、悲しくもかたみに頼み、頼まれて、影の如く相伴ひ、しばしも側をはなれざりけり。幸に時といふ老女のいとまめやかなるが、年久しく我家に仕へ、母親なくなりて、何くれとなく身に引きうけて、世話して呉れしかば、家の事は、おほかた打任かせて、妾は兄と共に、なほ學の道をたどりぬ。さはいへ、家の女主人としては、妾より外になければ、全く家の面倒見ずといふ譯にも行かず、お時に主人とたてられて、早くも世帯の苦しみを知り、今更に母君に時の流行品をねだりし昔のなつかしく、はゝそばのめぐみの露に生ひたちし。

撫子の身の浮世の荒き風に當り、人の心の頼みがたきを知らぬにつけ、まだ子といふものは持たざれど、そのかみの親の恵みは、身にしみて辱なく覺えぬ。當時兄なる人は、さる學校に入りて、西洋の學問をいそしみ、妾はむねと敷島の道にわけ入り、よなく、燈火の光をわかちつゝ、共につゝがもなくて、三年四年は、矢よりも早く立ちにけり、ある春の夕の事なりき。兄なる人は、同じ學びの友だちの親睦會にとて、出でゆかれけるが、その夜、更たけなはに人静まりたる頃車の音俄に門の前にとゞまりて、間もなく門の戸の開くに、さては兄君の歸られけるにやと、ラムブ手にさげて、玄關に出でけるに、兄はいたく酔ひて物心も覺え

ざるを、兩手に抱きつゝ、いたはり助けて入り來れるは、兄と
同じ年頃の學生なり。おのれは川田清憲とて、學校にては御
兄君と御入魂にいたし、色々御世話かける者なるが、今宵宴
會にていたく酔ひたまひたれば、靜に車にのせて、御送り申
しぬ。夜もはや更けたれば、これにて失禮仕る。よきに御介抱
あられよと、聲いと爽やかなり。川田氏のことは日頃兄が篤
實なる勉強家なりとほめそやすに、その名は知り居たれど、
まのあたり其人を見るは、今日がはじめなれば、兄が平生そ
の世話になること、さては、今夜の介抱のとなど、一通り禮を
のべ、茶でもたて侍らむはどに、しばしは休みてゆかせたま
へとすゝむれど、そのやうな御心配は御無用、おのれは人の

家に居る身なれば、餘り夜をふかしては都合悪し、いざさら
ばとてたちてゆかるゝに、はや十一時を報ずる鐘の音、陰に
こもりていとかすかに櫻の枝にやすらへる朧月の影もね
むたげなり。
飲みすごされし酒の故のみにもあらざるべけれど、年頃た
えて病氣のなかりし兄の、心地にはかに悪しく、花咲き鳥鳴
く春の彌生の空に、むなしく垂れこめて、打臥し、枕上らず、
熱は四十度をこえて、囁言など云はるゝに、あわてふためき
て、近きあたりに名たゝる醫師を招きて、診察を乞へば肺炎
といふ病なり、一週もたてば、おこたるべし、歸りて藥を調合
すべければ、つかひの者おこされよとて、打傾きたる様更に

見えす

その歸るさに、事になれたる老女のお時、醫師を送るさまに
て、門の外まで行きけるが、やがて歸り來りて、妾を小陰に招
き、ひそかに醫師に問ひ侍りしに、容易ならぬ症の由申され
き、といふには、はや胸ふたがりて、覺えずよ、と泣き沈みける
に、御心しづめて皆迄聞かせたまへ。容易ならぬ病にはあれ
ど、熱だになくならば、けろりとおこたらむとの事なれば、心
強くおはせ。病には薬より看病が大事といふに、お嬢様の弱
らせたまひては、何かせむ。長くとも三週間は過ぎざらむほ
どに、御心はげまして御看病あらせたまへ。御涙ぬぐはせて
いざ參らむといふに、やうやく涙ぬぐひて、兄の臥せる側に

至れば、熱にうなされて、物も覺えず、口のみ動かして、頻りに
嚙言いはれぬ。まめやかなる老女の時の居て、杖とも、柱とも、
頼みに思はるれど、かゝるときに、とりわけて、悲しきは、身内
の一人もなき身の上なり。父母の居まさば、如何に心強から
ましを、天にも、地にも、血をわけたるは、唯一人の兄、思ひかけ
もなき大病に、夢かとのみ思はれて、つらくも、かなしくも、死
なむばかりの病にかゝらむとも、己れの身ならば、更に苦し
からじ。苦しきは、看病する身の上になむ。げに、己れが病にか
ゝるよりも、苦しきは、人の看病なり。思ふまゝになるならば、
己れの身の代らましを、熱に正氣を奪はれて、言葉をかはず
よしもなき兄の顔をながめ入りて、せめて身内のあらばと

又も急に悲しくなり、顔をそむけて袖をかざし、聲はたてじとくひしばる折りしも、音なふ聲の聞き覚えあるに、いそぎて涙ぬぐひて出で、迎ふれば、前夜兄を送りて來られたる川田の君なりけり。

前夜は失禮つかまつりぬ。是迄一日も缺かさぬ春野君の見えざるは、二日酔にはあらずやと、例の爽やかなる聲して問はるゝに、いなとよ、肺炎といふ病にかゝりて、打臥しぬ。昨夜は一方ならぬと言はせも果てず、きづかはしや、熱は如何に食事は如何におかまひなくば、いざ、御病人にあはしてたまはれといふ。熱は四十一二度の間にて、薬より外には、何も物せざれど、別に心配すべきほどにはあらず。むさくるしけれ

ど、おかまひなくばとて案内す、さて兄の名を呼び、又手を握られけれども、絶えて正氣なかりければ、今は熱の昇りつめたる所なり。このまゝ、静かにして置くが宜しからむ。よほど熱のたかきやうなれど、こは肺炎の常なり。もと肺炎は肺病とは違ひて、不治の病にあらず。熱だになくならば、直におこたるべければ、つとめて氷にて冷させたまへ、御人數の少くて、さぞや御不自由ならむ。今は學校よりの歸るさなれば、ひとまづ歸りて、やがてまた參らむ。何の御役にもたつまじけれど、心ばかりの御看病にと云はるゝに、その御志はかたじけなければ、いとかしこし。看病は妾どもにて足りなむ、御身をわづらはせまゐらせては、兄は對してすまず、中々に心苦

しければなど、答へたれど心の中には、世にかくばかり親切なる人もあればあるものかと、覚えす涙の溢れぬ。御身、兄さまに對してすまざれば、われもまた他所に見過しては、兄さまに對してすまます、竹馬の友にはあらねど、日頃意氣相投じて、兄弟より親しくおつきあひ申せる朋友の中に、何の遠慮の入るべきなど云はるゝに、此上いなむは、反は無禮にやと思ひて、あくまでもうれしき御志なにごん宜きにとばかり答へければ、その夜來りて、夜もすがら、いも寝ず看病されぬ。

兄なる人は客好きにて、平生交れる人も多く、常に夜更くるまで語りあひて、いとにぎやかなりしが、病氣になられては

其わりに客の來らず、たま／＼音づるゝ人ありても、病のことは問はるゝか、問はれぬかには、や、妾に向ひて、花の噂、芝居の評判、さては役者は誰をか、最負になさるゝなど話しかけらるゝに、世間を知らぬ身の、何と答へむ由もなく、いと困するに、正直一方なるお時の、とりし年に、遠慮もうせ、御病人のそばにて、烟草を吹かすは固より、話などせぬがよしと、醫師の申れさしに、あらずやと、あてつけて言ふに、客よりは妾の顔まづ赤らむこと多かりなべて、日頃親しかりし人の、うとくなり、度々來られたる人の、足遠くなれるが中に、日頃たえて音づれざりしに、病氣になりて、打てかはりて、じげ／＼音づれたまひしは、かの川田氏のみなりけり。

始めの夜、徹夜して看護したまひ、それより後も度々來りて夜を明かしたまひ、猶晝の間、幾度となく來られ、熱のやうやう下るを見て、よろこばせたまへり。一旦物も覺えざりし兄も、熱下るにつけて、正氣づき、昨日は四十度、今日は三十九度半とやうく下りゆきて、遂に二週間ばかりにして、兄の病は全く癒えぬ。

病氣の中に、大方の櫻はちりて、春色はや半ばは去りたれど、牡丹花のひらきそめたる庭の面に、春に後れたる八重櫻の猶盛りなるを肴に、床上げの祝ひせんとして、知己朋友などを招かれけるに、病氣の時一度も音づれたまはざりし人も見えて、賓客いと多かりしかど、度々徹夜までせられて、妾一家

のかと頼みまゐらし、川田の君のみは來まさず。如何なる御さはりのあるかと、心もとなし、部屋の窓あけて見出す庭の面に、吹くとしもなき春風に、自ら散る花片の後追うて、ゆらくと飛びゆく孤蝶の姿のあはれさよ。

兼ねてより繁く申込みのありし縁談の兄の病氣につれてしばしとだえたりしが、病氣の癒ゆるにつれて、また繁くなりぬ。もとより學問なく、女の道も辨へず、また見目形とてもいたく人におとりたる妾の身の如何にして世の人には知られたりけむ、いろくのつて求めて言ひ入れられし人、いくそばくといふことを知らず。數ならぬ身をかくまでと思へば、人の心のうれしからぬにあらねど、天にも地にも唯一

人の血をわけたる兄君と、心細くも相依りて、あけくれし、しばらくも相離れず、なぐさめつ、また慰められつ、氣兼ねなく、氣苦勞もなく、かたみに心打明けて、いとむつまじく、樂しき月日を送れる蓬生の宿の生活の忘れがたく、もとより一生兄のかゝりうど、なるべくもあらねど、せめて兄嫁の來させたまふまでは、たい此のまゝにてと、兄君に願ひければ、兄君もまた、そなたは女の年頃をすぎたりといふにあらねば、あながちに急がずともよし、心しづかにさがしなは、心にながふ人もあらむとて、おほかたの縁談は、ことわりけり。ことわりたれど、なほ繁かりける縁談の中に、二度ならず、三度ならず、申込のありしは、さる華族の若殿の、年は二十六歳

學問も心柄も世にすぐれたる人物、財産は三十萬圓の公債に、地所の幾千坪、舅姑はあれど、子に甘くて、人の好き御方、別に小舅小姑は一人もなしなど、めでたき箇條ならべたてたるが中に、器量を見込みての所望なれば、別に身の拵へは入らず、裸のまゝにて十分と、媒介する人の口のすべりたるに、兄君はや氣に入らせたまはず、われは色を以て妹を賣らず、器量好みする人は頼母しからず、たい人は心の持方が大事なり、爵位も財産も何かせむ、そなたは如何にと問はるゝに、妾もしか思ひ侍るとて、この縁談もことわりぬ。縁談はなほ絶えざるが中に、前妻に死別れて一人の子はあれど、年はまだ三十路を二つ越したばかり、さる役所の高等

官にて、世の聞にもよく、財産に不足なく、夫にして不足のなき當世の紳士と媒介する人あれば、さる名高き學校の先生の父祖傳來の財産とてはなけれど、月々の俸給あまりありて、年猶ほわかく、將來望みある學者とふれ込む人もあり、また嫁入するが厭ならば、五千圓持參して入聲にならむなど、思ひもつかぬこと言はるゝ人もありたれど、たすきにすれば長く、帯にすれば短しとの世のたどへに洩れず、みな兄君の氣に入らで止みぬ。

兄君の常に言はれたるは、幸福といふものは心にありて物にわらず、世の中の上を望めばはてなく、下を望むも果てなし、足ることを知れば、草の庵も現世の淨土にて、わかぬ心の

煩腦に苦しめば、金殿玉樓もさながら針の席ぞや、また昨日の淵は今日の瀬どかはる世の中に、いかでか金銀財寶の常なるべきよしや、爵位はなくとも、財産はなくとも、心だに誠の道にかなふ人ならば、われは好て妹聲にせむ。そなたもまた喜んで夫とすべきなり。

二親には死別れて、頼みとすべき親類もなく、天にも地にも、血をわけたるは唯一人の妹の、そなたの身を遠くへは離してやりたくなく、財産を分ちて義兄弟を迎へんかとも思へど、小糠三合持つたら、養子に行くなど、たどへもある世の中に、碌なもの、養子には來らざるべし。されば、たい心に慍ふ誠の人を求めて、嫁にはゆくべきなり。

夫婦は一生を共にすべきものなれば、はじめによくその人
 を擇ばざるべからず。互にいやと思ふ人と一生を共にすべ
 くもあらず。世をはかりて、うはべは夫婦にてありたりと
 て、何の樂しきことかあるべき。わが國にいとふべき離婚の
 多きは、はじめよくその人を擇ばざるに基づくもの多かる
 べし。寫眞のやりとりや見合ひ位にては、その人はわかるべ
 くもあらず。もとより西洋風の自由結婚はいたく厭ふべき
 ものなれど、天保氣質の親だちが禿げたる頭のうちに一人
 合點して、これはと思ひこんだる先入が主となり、いと
 思ふ心のひがめに、痘痕も笑靨も見ゆるまゝに無理に強ひ
 て娘をやるが如きは、或は不縁のもといやならむ。われはよ

るつ相應しき人をさがすつもりなれど、たゞわれのよしと
 思ふばかりにても行かず。そなたも遠慮なく思ふ所をのべ
 よと、いとねもごろにささるゝ言葉のはしく、いよゝ身
 に浸みて、答ふる言葉よりは、さきに涙のこぼれける。
 ある夜、兄君、他所に出で、行かれけるに、十時頃歸りて、いつ
 になくわらはの顔をじろく、と見たまひけるが、やがて机
 によりて、物の本どもひもどきたまひければ、夜もはや更け
 たるに、少しは休ませたまはずやとて、急須もち出でたるに、
 いとにこやかに此方に振りむきたまひて、茶のはしく思ひ
 居たるに、よくこそ氣の付きたれとて、茶飲茶碗とりあげて
 呑み干したまひ、今一杯と云はるゝに、たゞりたる鐵瓶の湯

を急須にうつしてつぎまゐらせけるを、手にとらむとはしたまはず、いとよろこばしげに眺めながら、これ玉や、そなたもよゝ知りつらむが、多かる我が友達の中にて、まことの人のいふべきは、獨り川田清憲氏のみなり。勉強家にて席順は常に一番なれど、學校のこのみ勉強するにあらざ、妄りにむだ口はたゝかざれど、理にさどくて、あげつらふ時はその言葉によどみなく、情あつく、義にいさみ、さわやかにしておちつき、威はあれどたけくしからず、然諾を重んじ、外見をかざらず、とりわけてあはれみの心ふかく、自分の身は顧みずして人の爲につくすなど、世にたのもしき人なるが、その實意のほどは、そなたもさきさき、我病氣の時にても、知りた

るなるべし。

縁談の申込ありたる人達はみな我が氣に入らず、我義兄弟には至極望ましき人あれど、その人はまた縁談など、申込むべくもあらず、實に果敢なき世の中やと、日頃心を痛めけるが、今日はからず、川田氏にあひて、その心はのめかして見たるに、もとより望む所なれど、たゞ勉強中なれば、かゝることは思ひもよらずと、思ひの外の返事に、もとより唯今といふにあらず、たゞ約束だにあれば、妹の身のかたまるといふものにて、五年十年なりとも心しづかに待つべしといへば、さらば、その時に至りて申込むべし。それまではたゞ君とわれとの心に約束のみして置かむと、案じたより生むがやすく、

隔てのなき書生同士の事とて、何事も無造作にはこびたるに、われはうれしく、今夜は鬼の首とりたる心持ずや。そなたも無論異存なかるべし、いかにか思ふと問はせたまふに、答へむとすれば、言葉俄に胸につかへて、しばしたゆたひければ、兄君はいらちたまひて、この縁談そなたは厭か。學のわざに暇なき兄君の、我身のために、かくまで心を勞したまふかと思へば、うれしくも、またかたじけなくも、はや涙のおつるをどいめもあへず、いたはしや、亡き親の世にいましたまはんには、かゝる俗事の、學問のさまたげにもなるべきこといも、心配したまふに及ばで、ひたすら、學の道にいそしみたまはんものと思へば、また亡き親の事まで、思ひい

でられて、涙のひときは溢るゝも云ふ甲斐なき女の身の耻づかしや。兄上様のよしと思はるゝことに、もとより、よろづ兄上さまを仰ぎまつる身の、いかでかことさまに思ふことのはべるべきとばかり、涙のひまに、からうじて、洩れいづる聲音も、ていらへければ、それ聞きて全く安心せしや、今より三年のちの事か、四年のちの事か、しかとは分らねど、さきより人して申込のあるまでは、なほ、これまでの通りの處女の身なり。たゞそなたの行末のことは、この兄の心にこめてあれば、その間はよろづ謹しみ、いそしみて、人の家を治むるに足るだけの資格をそなふべし。もと、この事は、たゞかたみの心の中の約束にして、いまだ朧もてだちての縁談ならね

ば、時の來るまでは、かろくしく披露すべきにあらず、さら
 でだに、世にうるさき人の口、如何にか聞き誤りて、よからぬ
 噂たつるやもは、かられず、もし他より縁談申込む人ありと
 も、たゞ猶四五年は家にありて修業するつもりなればどの
 み云ひて、ことわらむと、あくまでも心をくばりて、さとした
 まふに、いらへむ言葉はなくて、溢るゝものは、たい涙のみな
 り。

世にすぐれたる人を所天とたのまむは、げに身にあまりた
 る果報ともいふべきに、まして、あくまでも親切にして、あは
 れみの深き人の心、身に取りて、こよなきたよりと思ひて、ふ
 つゝかなる身のなぐさまるゝ山もわれど、すぐれたる人に

は、すぐれたる身ならでは、ふさはしからず、たらはぬを如何
 にせむと思へば、胸はちゝに亂れて、たとひ榮華をうくと、
 出で、人の家にとつぎて、浮世の仇浪にたいよはむよりは、
 いつまでも心置きなく、親しきはらからど、共にあらまほし
 く、まいになるならば、世に老といふことも、死といふことも
 なく、父母もどの如く世にあらせたまひて、妾も老ゆること
 なく、昔のまいに膝下に侍りてむと思はるゝも、わかなしや。
 わざとかくすべきことにもあらねば、年久しく我家につか
 へて、よろづまめやかに、親戚よりも親しくなりて、今は他人
 ども思はれぬ老女の、時には、兄君より精しく話してきかさ
 れけるに、いたくよろこびて、もはや五十路の坂を越えて、惜

しからぬ身には侍れど、それうけたまはりて、また命のほし
 くなりぬ。御器量いへば更なり、御心まで貴婦人としてたら
 ひ給はぬこともなき嬢様の行末、いかに榮えたまふらむ嬢
 様のかたづきたまふまでは、如何なることありても、死ぬべ
 からざる身の上にはべるなり。さて、いよ／＼御祝言の時に
 は、この婆が一生の思ひ出に在所の田舎躍をお目にかけてま
 ゐらせむ。むさくるしき老婆なりとも、きらひたまふことな
 く、相變らず御心かけたまひてやどは、や取越し苦勞する詞
 の底の心を汲むも、亦涙の種なりけり。
 ぬむられぬ夜を、やうやく明して、茶柱にも心置かれ、空しく
 窓にうつる鳥の影に、小さき胸のをどりしこと、いかばかり

なりけむ。今は我と我心にとがめられ、二年も三年も、修業つ
 みて、人並の身となるまでは、ふつ／＼かなる身の、穴にも入り
 て、人の目にはふれざらむと、祈るもいとくるしかりけり。
 花落ち、水流れて、春もいつしか暮れぬ。ふりつゝきたる五月
 雨に、時ならぬかきほの雪むなしくくだされて、いとゞさび
 しき夕まぐれに、看病以來たねて來りたまはざりし川田の
 君、意外にも音づれたまへり。平生の爽快なる氣象には似ず
 いとうち萎れて見えさせたまふに、如何なる故にかど、怪し
 く思ふのみにて、ひとり部屋にとちこもりてありけるに、一
 時間ばかりたつて、兄君入らせたまひ、こや玉子、世にこまり
 たる事の起りしぢや。今日川田の來りしは他の事ならずか

ねて、川田をそねむ人のありけるが、如何にしてか、さきつ日、約束せしことを聞きしりけむ。その人も同じ學友なれど、その人柄好ましからず。いつぞや、君の妹くれぬかど、うちつけにいはれしことありたれど、虫がすかぬ人なれば、誰がやるものかど、はねつけたりき。かゝれば川田をそねむこと、ひときは強くなりて、あしざまに言ひふらし、さきつ日、看病にかこつけて、いふに忍びざる行ありきとさへ、讒言しけるとかや。川田はもとたよりなき身にて、やうやくその郷里の先輩どもより學資をうけて勉強せるなり。さてその同郷出身の先輩どもは、それ／＼分に應じて金を出し、すぐれたる同縣の學生をえらびて、之に學資を給しけるが、川田は、やがて、そ

の學生の一人なり。ことに同縣出身の顯官に、北村正春といふ人ありて、いたく川田を信用して、その子だちに見習ひにもとて、その家に置きて養ひけるなり。さるには、はからずも、こたびの讒言、まことに看病に來りしことありたれば、あざむくにその道を以てすれば、君子もあざむかるゝ世のならば、曹參の母も、その子、人を殺せりと告げらるゝこと三度に及びては、遂に機を下りしとかや。されば、かたく信用したる北村氏をはじめ、諸先輩も、今は川田をうたがひて、怒ること一方ならず。かく嫌疑を蒙りたる上は、先輩たちの恩にそむかざらむとせば、未來長く我家との關係をたちて、その身の潔白を示さざるべからず。又我ど約せし一片の信を守らむ

とせばうけし恩義にそむかざるべからず。いづれに従ふが
 人の道なるか、萬事われに任かして、よろしきやうに教へく
 れよとなり、われも意見あれど、そなたは、まづ如何にか思ふ
 と、思ひもかけぬ言の葉に、胸まづふさがりて、とみに答えむ
 詞も出でざりければ、兄君いらちたまひて、すぐに返答せず
 ともよし、よく／＼考へ置くべしとて、立たむと、玄たまふ袂
 を押へ、またせたまへ、兄上さま、數にもたらぬ、妾が身は如何
 にもなりなむ。妾の故を以て、正しき人をきずつくべうもあ
 らずと、涙ながらにいらへければ、兄君は、玄ばし沈吟したま
 ひしが、やがてつと身を起して、立ち去りたまひぬ。あとには、
 老女の時來りて、慰めむとすれど、これも悲みに堪へ、でや同

いさまに伏し沈みぬ。空には五月雨いよ／＼ふりしきりて、
 血を吐く時鳥の八千八聲の身にしみて、かなしかりける。
 瓜田に履を入れず、李下に冠を正さすと云ひけむ。げにうた
 がはれ易きは、男女の間なり。平生品行正しきも、この道ばか
 りは、思案の外とて、人は容易に承知せず。されば古歌にも、陸
 奥にありといふなる名取川なき名とりては、くるしかりけ
 りと云ひけむ。古の恨も思ひやられて、ほす由もなき濡衣の、
 よしや人には、はそしらるゝとも、正しき心、正しき行は、神こそ
 知らさめ、かどろの奥にも、なほ道ある世の中、思ふどちすみ
 なば、草の席も、などかつらからむと思へど、あたら望みある
 身の花にも、さかさすめ、しきことにか、づらひて、一生を

誤らせまつらむは心苦しくまたまことに其人を愛する道
 にもあらず一旦被りしなき名をそいぐにはこれまでの事
 は唯一時のうれしき夢とあきらめてちざりことも取り消
 すの外あらずといさぎよく決心して妾は今日までもむな
 しく孤燈を守りぬ。
 かく決心するまでの妾の心の中は千々に亂れたりと云は
 りもいまだつくさじ決心してよりのちも女心のめいしく
 雨のふる夜などそのかみのこと思ひいたして夜もすがら
 寝もせずむなく袂をしぼることもありけり。
 わつく兄上の病をいたはりたまへるを見て世にたのもし
 き誠心と深く感じけるにその看病の爲にとて我家にやど

りたまひしこと反て疑をうくる種とならむとは我も人も
 思ひがけきやげに世の中はあざなふ繩に似て禍福の伏す
 る所もとよりはかり難かり川田の君も心苦しく思はれて
 我身はともかくも一言の信はそむくべからずまた我身の
 故を以て正しき貴女の名を汚すべからずとのたまへど兄
 上しひて説きすめ鳥鵲風冷かに赤繩ながく絶にぬ。
 この事さかじりて薔薇はうるはしくてもなほ針ありあ
 の顔して居てももつたが病のいたづら娘もらはざりしは
 もつけの幸なりけりどひそかにのしる人の言の葉さく
 につけてもいと苦しく月日はこゝには照りたまはぬかと
 恨みしこともいくそたび中にはまた若氣のあやまりは誰

れも免れぬ事、雨ふりて地の固まる譬もあれば、またくすつ
 べくもあらねど、賣物の身の疵は疵なり。さるにその疵物を
 いどはず、もらひうけむといふ心に免じて承諾せずやなど、
 さかしらだちて世話する人あるも、いと腹立たしかりけり。
 兄君はさすがに思慮ふかくて、この後縁談のことは、かくび
 にも出したまはざりしが、老女の時は、教育なき身の思慮足
 らず、これが祝言のすみしといふにあらざ、夫とし仰がる、
 人は、川田の君のみども限らず、お嬢様のお顔立なら、お心だ
 てなら、何處へお出なされても、引けをとらるゝをならず、早
 く、よき旦那さがして、おかたづきあそばせやと云はれ、人の
 心も知らでつか、物な言ひそと、覺えず口走りけるが、時

を叱りしことは、あどにも、さきにも、唯此時一度のみにて、折
 角の心づかひを、かくまであら、しく言はでもよかりし
 と、後にて、ひそかに、くやみぬ。
 よしや、此世の縁のうすくして、一夜のなさけだに、かはさず
 ども、兄君の許したまひ、おのれも、それと思ひし人を、おきて
 重きが上の小夜衣、わがつまならぬつまや、重ぬべき夢より
 も、仇なる世の中に、いづれか長く、さめぬもの、あらむ。わが思
 ふ人のためには、火水の中も、いと、口善悪なき、浮世の義
 理に、恩愛のきづなを、たちて、一生世を、よせむ、蔭なく、わしが
 きへの、だいらて、のみ、あらむ、とも、思ふ、心のかよひ、路には、を
 ちこちの、わかち、も、あらず、たい、心の中に、君の、おも、かげを、仰

ぎて、此世の夢は結ばむと思ひたつ日の足はやく桑田海ど
かはれる世の中に四十路あまりの榮枯得衰喪を閲みして
頭には霜をかき腰はあづさの弓どまがりても今にかはら
ぬものはこの心のみなり。

二年三年たつほどに、兄君は學校を卒業したまひ、實業社會
に立ち入りたまひたれど、腐敗したる世に、心になふ人な
く、樂しきことは少きものから國の爲にと、志のびて、年を経
しが、はからざる損害のために、家産多く失ひたまひ、風の心
地と、うちふしたまひしが、喉より氣管支にうつり、氣管支よ
り肺に入りて、遂にたゝせたまはず、未だ三十路の坂も越え
ぬ身のむなく、前途の望をもたらしめて、北邙一片の烟と消

えぬ

さらでだに、世にたよりなかりしに、兄に死別れて、今は血を
わかてる人は一人もあらず、いつぞやのなき名は、七十五日
どのたどへにもれず、またく世に忘れしのみか、此身まで
人に忘られて、夢ならでは、うつゝに語らふ人なく、天老い、地
荒れむ、さだく虫も諸音にむせびて、秋風とこしなへに冷か
なり

息絶えたまふ時までも、死期の近づくことは知りたまはず、
むくみを肉のつきたるものと思ひたまひて、のたまへるや
う、日頃心持のよさ、肺病は不治の病なれど、吐血する肺病は、
その場所にて、かたまりて、他の部分に及ぼさず、長くながら、

ふためし、いと多かり。わが病も吐血する方なれば、或はこのまゝにてかたまるかも知れず。病癒えなば、また、亂雜なる實業社會には入らじ。御身を伴ひて、心のまゝに天下の名勝を尋ね、清風明月を友とし、平生好める筆とりて、天地の美をうつし、文人として後の世に名は残すべしとのたまひし言の葉は、長く耳にのこれど、身は早くも白玉樓中の人となりたまひぬ。また、何時の日にか、筆とりて、胸中限りなき詩思を寫したまふべき。かきのこしたまひし、幾卷の遺稿なかくに、かたみこそ今はあだの思ひせられて、心やらむ方なく、やうやく野邊の營をすまして、日毎に清き水を供へつゝ、四十九日に及びけるが、墓場に入る時、ふと認めたる後姿、まがうべ

くもあらず、心の覺あるに、墓前には今さゝげしばかりなる香火の立ちのぼれるを見て、人の心のうれしさ、なかく、に涙のたねとなりて、覺はず墓前にうちふしいも、はかなき昔の夢のあととなりけり。
都の空はすみうくて、時の在所なる此王子村に來りてより、こゝに四十年餘、時も間もなく、彼世の人となりて、あれたる草の舎に、かのれ一人すまへど、身に覺えし讀書、習字、たちぬひのわざなど、村の子供にさづけ、心ある人には、また、生花、茶の湯、さては敷島の道など、をしへて、饑ゑもせず、こゝえもせず、今日まで生きのびたれど、最早世にある日は、多からじ。思へば、浮世は、長き夢なりけり。さるにても、川田の君は、今は如

何に○か○な○り○た○ま○ひ○け○む○遠○か○ら○す○し○て○兩○親○は○じ○め○兄○君○に○あ○
ひ○ま○つ○り○て○浮○世○の○夢○を○語○る○時○あ○ら○む○と○思○へ○ば○い○ど○う○れ○し○
ら○な○む○

春野玉子記

* * * * *

翁はよみさして、しきりに涙を拭ひけるが、また取りあげて、
そゝこゝ拾ひよみしては、こぼれいつる涙、更にとゞめもあ
へず。かゝりしほどに、門外に蹙音して、人の歸りくるけはひ
なれば、泣顔見られじと、いそぎて眼をぬぐはむとするに、紛
れて、讀みし書物は、もとの所に置くの違なかりけるに、はや
入り來れるは、六十路ばかりの媪、みじかく白くのこれる髪

をうしろになでつけて、綸子の被布長くしなやかに着こな
し、下には貝褌の小紋縮緬つけたる身のさまいと氣高し。今
日は墓參にとて參りたるに、女の足のはかしくしからず、い
たらかそなはりて、さぐな待ちわびたまひけむ。許させたま
へど云へば、いなどよ、いつも參る刻限のさほど過ぎたるに
もあらず、たい今日は、小春日和のあたゝかさ、に、心も自らう
きたち、面白き話など、うけたまはらむとて、例の刻限より早
く參りたるに、御留守ときゝて、少し失望したれど、やがて、か
へりたまはむ、出でますとき、來りたまは、あがりてまたる
ゝやうにどのかことづけなりと、女中の申すに、おなじみの
中とて、遠慮もいたさず、お言葉のありしまゝに、おざしきに

通りて待ちけるには、はからずも面白き筆の御すさび拜見して、今日ばかりかなしき覺えたることは、あらず、又心のゆきたることも、あらず、見そなはせ、さらでも脆き老の目に、涙の自からこぼれいでたる恥づかしさよなど云へば、媼はいたく驚きたるさまにて、さては、人に見ゆじとて、ひそかに物し、文の愚痴ばかりつらねたるが、いそぎて出でゆく途端、秘め置くことを忘れはべりしまゝには、はからずも御身の目に入りしかとばかりにて、皴ばかりなる顔にこそ、ゆふばえは、さいねど、心には、いどいば、じもみち、自ら色にあらはれて、まばし翁の顔ど、かたへなる書とを見くらべて、いどはづかしげに袖うち掩ひたるさま、年は老いても、さすがおは女なり。

なり。

茶まゐらせむとにや、急須とりあげゝるが、つめたくして、湯のなきさまなれば、女中よびて湯を入れさせ、茶飲茶碗には、自らつぎて、翁の飲むを見て、おのれも少しばかり飲みつゝ、昨日の兼題は、みなよみたまへりや、歌をよみはじめたまひてより、まだ多くの日もたゝぬに、さては御上達のすみやかさよなどいふ聲、皴枯れても、何所やらやさしく、驚なかし、老木の昔のしぼるゝ身のさまなり。

みな咏みて、御添願はむとて、まゐりたれど、今日はもはや歌のことなど申すべくもあらず、早く御身につげまゐらすべきひとくだりの物語こそあれ、いざまばし聞かせたまへ

や。さるにても如何にかなりたまひけむと御身のしるされた
 る川田清憲ぬしは今もなほ無事にておはすなり。學校を出
 でののちは益々立身して世にときめきけるが御身が一生
 處女にて終り給ひし如く彼人も亦一生妻をむかへざれば
 世の人々怪みてそのわけをとへど思ふよしありとのみに
 て更に言はず終には今辨慶と噂されつゝ今にいたれるな
 りと語り來りて聲自からうるみつゝ媼を願ればはや袖を
 顔にあてゝ打ちふし居たり。
 やよ、玉子の君これよりは我身の懺悔話かへらぬ昔は水に
 流し今のうつゝにかいさらばひしこの老の身如何やうに

かさいなみ給ひてわらし昔の罪は許させたまへあはれか
 くまでに清淨無垢にしてつゆくらき處なき佳人をしてむ
 なしく深山の花と散らしめ道德堅固なる才子を一生男や
 もめに虫わかさしめしものは誰の罪にもあらずみなこの
 やつがれが身の過なり。
 今は本姓にたちかへりて本山正春と申せば御身も心づき
 たまはざるべけれどもとは北村正春と申し身の上なり
 と云へば媼はひときは打ち沈むならむと思の外頭をもた
 げて涙をはらひさては御身が北村正春どのにておはしけ
 るかいたづらにもものしゝ文御目にどまりて御心をなやま
 すこといと罪ふかし許させたまへや何事も我身の運命の

つたなきにて、つゆ御身の罪にはあらぬものをといふに、清
き心の底もくまれて、尊しども尊し。

神ならぬ身の、我もむかしは、一時御身と川田とをうたがひ
たることの、はづかしさよ。思へば、そのかみ川田の學友にて、
しばし我が家にも來りし加藤文之助といふ人の言葉に、あ
ざむかれたることの口惜しさのちにいたりて、はじめて悟
りぬ。今更かたるも、けがらはし。たゞ一言にてそのあらまし
をいへば、われに一人の姪ありて、いとけなき時より育てし
が、いつしか川田に思ひかけて、つけぶみなどしけれど、川田
はもとより堅き身なれば、つゆ取りあはでありけるを、彼の
加藤もとより我が姪に思をかけゝるに、かくと知りて、戀路

の邪魔とて、己れが親友に濡衣きせし心のきたなさよ。され
ど、加藤も生來の惡人にはあらずかゝることなせしは、みな
戀といふ魔物のなせしわざなり。

その時は川田御身と關係をたちて、我にあやまりけるに、我
もその平生の行にめで、許しけるが、のち我が過を知るに
いたりて、反て我より川田にあやまり、もとの約束のまゝに
せよといひたれど、男にも似合はずかゝる未練なこと言ひ
たまふかどて、従はず。口には實にかく言へど、おはれや、その
身は一生男やもめにすこしたるなり。

我も強ひむ由なくて、今にいたりけるが、川田はつゆ我を恨
みず。昔の一飯の恩をわすれじとや、今もなほ、我が退隱せる

此片田舎にまでたびくおとづれくるなりとかたる折りしも、ドンと一發鉄砲の音ひいきて、榎の上に鳴きをりし一羽の鶉鳥、ひらりと庭におち來れり。二人はおどろきて、庭の面をみかへる折しも、下女に伴はれて庭先に來りし一人の老人はうちし鉄砲のあるじなるらむ。媪と顔みあはせて、いぶかしと思ふ氣色の見えけるが、忽ち翁と顔みあはせて、さてはこゝにおはしたるか、今日ひねもずかりくらし、いさゝか鳥を獲たれば、御身と共に一の鍋に對して、こゝろよき御話しうけたまはらむとて、まゐりたるに、例の歌の先生が、りゆかれたりとのことにて、日はまだ高し、今二三羽うち添へむとて、こゝまでまゐりたるに、ゆくりなくも、こゝにて御身

に對面したる不思議さよといへば、以前の翁はうち笑みて不思議と云へば、それに止まらず、昔の紅顔は今の白髪とかはりたれど、川田ぬしよ、御身は猶覺えあらむ、又玉子ぬしも、忘れたまふべくもあらざる面影なるべし。かく三人がこゝに落ち合ひしは、不思議の中の不思議にて、まるで小説にありさうな話なり。まづこゝにあがりたまへとて、座敷に請じて、飛鳥川のこと、さては今迄うはさせしことまで、つばらにうち語り、今は共に色も香もなき老木の身の結婚などは、おぼさるべけれど、せめて此身の罪ほろぼし、御兩人何事も我にまかせたまへ、思ひたつ日を黄道吉日、媒介は此身の役、久しく聞きもせず、口にもせざりしが、まだ忘れては居

旗手

見渡すかぎり 野も山も

つゝの烟に おほはれぬ。

天つ日影は たりながら

晝なほ闇の ごとくなり

闇をつんざく いなづまの

光とや見む うちかざす。

つるぎの山や 死出の山

山さへさけむ ばかりなり。

入るまじいでや高砂やこの浦風に帆をあけて月もろとも
るまじいでや高砂やこの浦風に帆をあけて月もろとも
しほのく、それから後はよし、めでたやうれしや



ふりくる丸を ものとせず

すゝめくくと 叫びつゝ

やみにも著しき 日の御旗

さゝげてゆくは 誰ならむ

折しも敵の ながれ玉

あはや横より とびきたり

顔をかすむと 見るほどに

くだけてちりぬ、そのまなこ

いさむ心の いきほひに

うけし手創は つゆ知らず

前も同じき やみの空

たいひとすぢに 進みゆく

とりでは遂に 陥りて

勝利々と 呼ぶ聲に

旗おしたてゝ のびあがり

看れども見えず 闇の空

その目はいかにと たいさされて

はじめて悟る身の手創
さぐれば如何にそも如何に

目に残れるは血潮にて

君にさげしこのからだ

眼はなどかをしからむ

命よりけに尊きは

君のたまへる御旗なり

命にかへてまもりたる

御旗はもとのまゝにして

またくひまに敵砦を

抜き倒したるうれしさよ

めぐみも深きみかどには

あはれとばかり聞しめし

かたじけなくも盲目の

士官を宮にめし給ふ

九重ふかくはんべりて

見えねどかしこき君の前

玉の御聲に思はずも

南朝五十年の春、東風吹き荒れて、豺狼路に横はり、雲深き古野の奥、花に涙をそゝぎ、草しげき黒木の宮、鳥に心をおどろかす世のなりゆきのうたてさよなく、玉夢おだやかならざりし御有様申したてまつるもいとかしこし、三木枯れ、一草しほみ忠臣前後、熱血を賊庭にそゝぎ、一命を鴻毛にくらべて、骨を野外の月にさらしたる跡、いづれもあはれならぬはなきに、色も香もゆかしき一本の名花、空しく深山の奥に朽ちはて、かぐはしき心の一輪の花片、谷水の流るゝまにまに、世につたはりて、永くあはれをとめたる辨内侍げに

南朝の名花

まなこなき目に 涌く涙

きみの御稜威と もろともお

ひかりかいやく 日の御旗

花はさらく木 人は武士

ほまれは絶えじ、 よろづ世に



や、才色人にすぐれ、徳操世にまれなるに、一生薄命をきはめて、恨を南山の雲に付したるは、いたはしきことの限りなりけり。

辨内侍は右少辨俊基朝臣の娘なり。後醍醐天皇、北條氏の悪をこらさむとしまひしに、その謀もれて、俊基朝臣は首謀者のことゝて、關東に捕へられけるが、終に葛原が岡の白露と消えうせぬ。その妻なる人、身の不幸をかこつあまり、浮世を三衣の中にさけぬ。かく父には死別れ、母には棄てられて、よるべなき孤兒の身の上、かなしがりて、俊基朝臣の兄、行氏卿は、辨内侍をその家にむかへとりて、子のごとくいつくしむに、心なぐさめられて、あぢきなき世をすこしけるに、そ

の才徳、いつしか雲の上に聞え、召しいだされて、後醍醐天皇の宮につかへけり。東魚西鳥、一場の夢に歸し、天下は、獼猴のごときものにかき亂されて、後醍醐天皇、都をいでさせたまひて、吉野の行宮にうつりたまひしほど、辨内侍、また、従ひまつりて、かしづきたてまつること、いよゝゝ怠らざりけり。或夜、みかど、中納言隆資卿、洞院の實世卿、宗房卿など、御前に召しいださせたまひ、御酒たまはらむとて、辨内侍に酌とらせたまひけるに、いかゞしけむ、はからずも、御土器、おとせば、二片にわれぬ。御けしき、かはりて見えさせたまひければ、内侍、直に、

さかづきのわれて、うづる雲の上

とよみいでけるにいと興じたまひて誰か下句つけてよど、
 れはせさせたまふ宗房卿とりあへず

ほしのくらゐの光そへばや

とつければみかど御感なめならずいとこゝろよく御
 杯かたむけたまひて夜のあくるまでうたげしたまひきと
 かやげにこの内侍の才の人にするたることこれをもて
 おしはかるに足りなむ

かくて御醍醐天皇は御いたつきたもくならせたまひてつ
 るぎを按じつゝみまかりたまふ御心の中いかにくやしか
 りけむ内侍は怙恃を失ひたる孤兒の身のよる方なきに今
 又君に別れまつりて悲歎の涙に昨日と暮れ今日とすこし

けるほどにゆくりなきことこそ起りけれ内侍は才徳のす
 ぐれたるのみならず類稀なる美人にして柳の腰しなやか
 に紅の頬香露したるが如く一たび笑へば吉野の花も色な
 く三五の月も光を失はむばかりなるが賊將高師直いつの
 ほどにか垣間見たりけむ思慕の情いと切にして人目をし
 のぶずりの亂れにみだれ思ひたえなむとばかりを水莖の
 跡によせて幾度か送りけれども心高く操正しき辨内侍い
 かでか逆賊の心になびくべきいたくそのなめげなるを怒
 りて手にだに觸れざりければ丸木橋のそれならでむなし
 くふみかへされて夢魂いたづらに峯の雲に迷ふばかりな
 りけりかゝりしほどに師直ふと思ひつきたることありそ

の知りあひたる女、内侍の叔父たる三位行氏卿のもとに、親しく行きかよひければ、その女してひそかに行氏卿の北の方に、切なる思ひを打明して、さて、いはしむるやう、思ふこと、かなへしめたまは、三位殿の位をすゝめ、領地をもあまたつけ侍らむなど、利をもて誘ひければ、北の方、慾に目くれて、之をうべなひぬ。さて内侍に送る文をとゝのへ、梅が枝といふ侍女にもたし、侍、二十人ばかり添へて、吉野の行宮につかはしけり。之の文に、はるかにこそ渡らせたまへ、山里の御すまひ、さこそと思ひやらるゝごとに、袖をこそまぼりあへね、御こひしさのいとせめて、住吉へ詣で侍りしほどに、道のたよりも、然るべければ、あひたてまつらむことを思ひて、河内

國とかや、高安のほどりに知りたる人のさふらふに、参りてこそ、待ちたてまつれ。はかなき世の中の、まして、みだれがはしければ、此度ならでは、いかで相見むなどかきて、その終りに

あひみむと思ふ心をさきたてゝ

袖にしられぬ道芝の露

とありければ、年頃そだてられて、思あつき叔母の身の、かくばかり慕ふ心の切なるに、梅が枝さへ年久しくなれたる女にて、そのいふこと、まめだちて見えければ、いと、なつかしく、君に奏しけるに、御暇たまはりければ、うれしさ云はむかたなく、女房二人、青侍三人つれて、たちいでぬ。その路に、人あ

また、いであひて、いふやら、北の方は、高安に待ちておはしたれど、やみがたきことありて住吉にゆかせたまへり。されば、遠けれど、かしてまで行きたまへといへば、青侍ども首をうちふり、そは心得ぬことかな、高安までとて、暇たまはりて來りたるものを、いかでかはるゝ住吉までゆかるべきとて、いなみければ、いたく怒りて、その三人を打殺してけり。二人の女房は、たゞわなゝとふるへるのみにて、せむ術を知らず、かの人々が内侍の乗りたる輿を奪ひてゆくまゝに、従ひゆきぬ。内侍は、たゞ鬼にとられたる心地して、輿の中に、ひたなきに泣きつゝ、石川といふ所までゆきしほど、楠正行、吉野の宮にゆし、いだけされて來りけるが、輿の中に、女の泣聲しき

りなれば、いとあやしみ、立ちよりて、その故をとへば、あざむかれて奪ひとられたるなりといふ。正行、やがて、ひきつれたる郎等に命じて、そのくせものどもを捕へしめけるに、大方はいけどりぬ。三人、四人、劍ぬきつれて、斬てかゝりければ、之をば、みな、殺しつ。たすけ得たる内侍と、いけどりたる曲物どもをみて、吉野の宮にまゐりて、この由、奏しければ、梅が枝を詰問せしめたまふに、師直のたくみなること、わかりぬ。こゝに、曲物どもは、みな、殺し、梅が枝をば、尼となして、京都にかへしけり。かく内侍の危難を免れしは、またく、正行の功なりと、後村上天皇、ふかく、よろこばせたまひ、内侍を正行にたまはらむと、おぼせさせたまひしを、正行は、

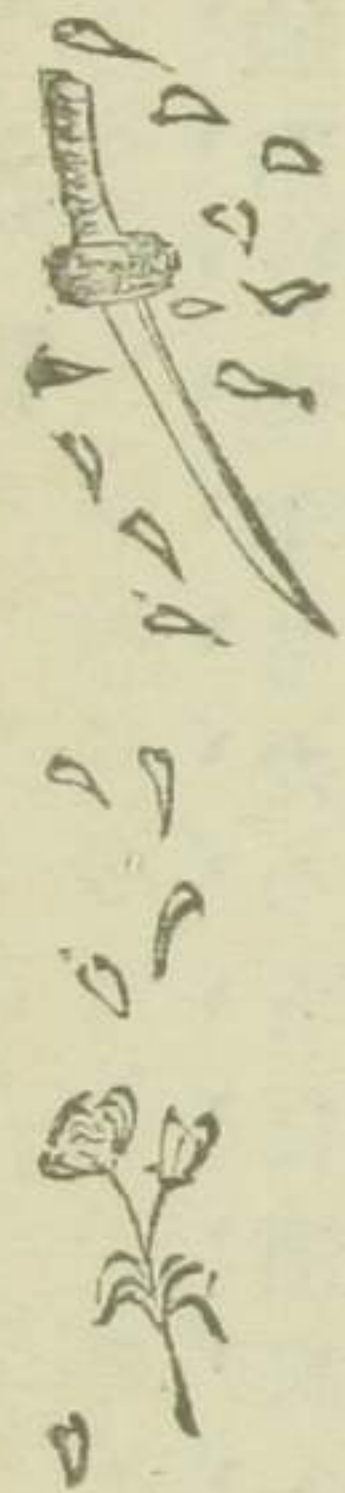
とても世にながらふべくもあらぬ身の

かりの契りをいかで結ばむ

といふ一首の歌をたてまつりて、いなみまつりぬ。そは、いさ
ぎよく討死して、君恩に報いむと心定めたる身の、女などに
かゝづらひて、おくれをとらば、此上なき不忠なるべく、また、
一日の思の爲に、百年の身をあやまらしむるに忍びざれば
なり。されば、そのつれなきは、真に、つれなきには、あらで、な
なかに、情ふかき武夫なりけり。

いくほどもなく、正行は、如意輪堂の扉に、むなしく、無き數に
入る名をといめて、その身は、果して、四條畷の朝露と消えう
せぬ。あはれ、赤繩結ぶに由なかりきといへども、みかどの許

したまひし夫、危難をすくはれし恩人、いかでか、よそに見す
べきとて、内侍は、後に、龍門の里に、さゝやかなる庵を結
びて、一生、かたく操を守りつゝ、正行の冥福をいのりきとか
や。
今時の女は、重きがうへの小夜衣を重ねて、耻とせざるなら
は、しなるに、古の女は、ちぎりもかはさざる人に、だに、かくば
かりの操は、たてけるなり。



風流鴨

菅の根の長さ旅路に幾年もたつきに慣れし夜半の空浪の
 浮床ゆふべに立ちて越ゆる山路の奥ふかく戀しき妻どう
 ちつれて共に飛びゆけば千里も一里あさる田の面に霜お
 きてすすぶも寒き夜風に羽うちかはしかたるむつ言のか
 ずつもればすねても見たり恨んでも見たり心にもあらぬ
 夫婦喧嘩よそ目はづかしやと仰げば高き大空に淋びしさ
 うにも獨り澄みわたれる月影の西に傾きゆくすゑは野と
 なれ山のいたいきの白らむにつれてひいゝ鐘の音はたし
 かにわけ六寢過したりと起き上り正體もなくねむりたる妻

をゆすりて起きぬかく、鏡なるにどうながせばゑまわ
 世話しないいつになく暖いぬさ日和寢心がよくて、どんと
 目があきませぬ。そのやふにいそがるゝなら、獨りでおたち
 なされ、私はいやじやとつぶやくもまだねぼけ聲なり。いつ
 も起つ時刻はどうに過ぎたうかゝすれば後悔さきにた
 らぬこともあらう。あれゝいあそこへ人が来たどでまかせ
 なるおどし文句かゝるをも人は鶴の一聲といふならはし
 たれど、今よりは鴨の一聲と言ひかへてもよからむと、我な
 がら得意顔、妻はどびあがりてわたりさよろゝ見廻すさ
 まの可笑しさ。あれいどい人かぼけていらしやいと、嘴をど
 がらして飛びかゝらむとするに、昨夜のちわぐるひの復習

は御免と飛びたてば妻もをくれじと飛び立ちておどにな
 りつさきになりつあどの雁がさきになつたど里の子供に
 謠はれながら霜さゆる朝の風に威勢よく羽のばし鳴く音
 を九天の雲に擧げつゝ住みもなれたる海の面へ通ふあは
 ひの山の峽ゆかしきゆふべの夢を載せたる羽もむつまじ
 くならびて飛びゆく向ふへ圖からずも躍りあがれる網の
 目にいづれ憂きには洩れぬ身の上とはなりける
 ねれがいそいだばつかりにそなたまでが此の縄目ねれの
 やうな夫につれそうたはよくくの因果とあきらめて何
 事もゆるしてくれよと涙と共にわびければ妻は案外に平
 氣な顔付雄にも似合はぬめししいよまひ言千度百度くり

かへしたとてなんの役にもたちませぬ網に落ちたとて助
 かるまいものでもなければとくと一思案つけるが肝腎じ
 たげたすれば猶さらにひどいめ目に逢ふは知れて居るほ
 どに果報は寝てまで一命は死んだ真似でもして居ればそ
 のうちには必ずたすかることがございませうと度胸する
 たる言葉に勵まされておゝそうじやそなたが其氣なら己
 れも安心二世を契つた二人が身の上そなたと一所なら死
 んでも嬉しいと死ぬるいまはも愚痴たらしくもるともに
 死んだ真似して居たりける
 獵夫の手より鳥屋渡りいつか縄目をのがれて盤臺の上に
 鳩鶉百舌鳥桃花鳥などと共にならべ置かれければもう逃

けださうかどさ、やけば、まあお待ちなされど妻のどいむ
 るに、なほ死んだ真似して居れば、空陰に曇り、風寒き冬の朝
 の事なり、店外に車を停めて、かい寒い、いと手袋のまい手
 を揉みながら下り來れる一の紳士、當世風のいでたちは、山
 高帽子、頭巾の下に埋れ、二重外套の下には、羽二重の羽織ち
 らと見えて、一種えならぬ匂ひをこぼして、どろんどしたる
 目附も、金縁の目鏡に、威光か、いやき、願鬚剃りたる跡蒼く、鼻
 の下の長きに、八字髯いかめしく、年は三十前後と見ゆる男
 盛り、よい鳥がか、いつたど主は平身低頭、たゞへい、く、どう
 やまひ申せば、紳士はおちつきすまして、鼻先のあしらひ、や
 びて巻煙草とり出して、さも鷹揚に吹かしながら、かれこれ

ど擇びたる末、我等二羽が其氣に入りけむ、この一番をつか
 ひものに、みばの好き籠に入れて、價格はいくらと、談判、金錢
 の上にうつれば、あるじはそらさず、始めて、買ひに來りたる
 客に向ひて、毎度御最負にあつかりますから、大勉強いたし
 まして、前置長く、さて、二圓五十錢どちら出せば、丁度にせ
 よと根切るに、いやもう二價は申しませぬ。ごらうじませ、よ
 その所とは品物が違ひます。この通り新しうござります
 れば、三週間はたしかに、恥請合申しますとて、ばた、く、と我
 等がからだをはたきてなげだすに、身内の疼を言はむ方な
 く、いつはつべくとも見ぬざりし談判、二圓三十錢にてやう
 やくまとまり、我れ等は仕合せよくも諸共に一の竹籠に入

れられ、紳士の手にわたりて車にのせらるゝに、大事の贈り物なれば、膝の上とは思ひの外、足のうしろにをいこめられつがら／＼と威勢よく走りし車たちまち止りて、お歸りと濁聲高く叫べば、來るは／＼書生が三人、飯焚が一人、仲働が一人、小間使が一人、玄關につらりと並びて、齊しくひれふし、たる頭顱の前を、紳士は見下したまひ、通りすぎて奥に入りしが、我等は間もなく車夫の手より仲働の手にわたりて、また紳士の前に出でぬ。長火鉢の側に行儀よく坐はれる一人の女の丸髻のおくれ毛かきあげながら、恨めしさうに見付くる目元可愛らしくも、また凄まじかりしが、さきほどよりの詞のつゞきと見えて、この年末のいそがしいのに、人の氣

も知らないで、よくも内を恥明けなさるとみなまで言はせず、御立腹は御尤も千萬、さりながら、拙者もつひ酔ひ倒れまして、友達の家へ一晚とまりました。が何の不審、これは輕少ながら、あなた様へ歳暮の寸志、どうぞ御機嫌直してと口先輕く、我等を妻君の前へ出せば、人を馬鹿になさいましと横にむきしが、おかみ大明神さま、この通りお拜みますほどに、もう許るしてやると御詫言があつてもよいでせうと、人の手前、否、鴨の手前も、耻ぢず、疊に伏して手をあはすなど、馬鹿げた真似すれば、妻君も、怵へされず、は／＼とうち笑みて、一體これは何處へおあげなさると問へば、御機嫌が直りて何より結構、これは實は今の川長にあげやうと存じて、大枚三

圓で買つて参りましたが、いかがでせう。この位なら局長の
 眼目にかけても耻しうはござりますまいかと云ふに、もう
 ござらうだんはよい加減になさいましとまづ言葉を咎め、
 でたために言ひたる代價とも心付ず、私はまたつがひで四
 圓もするかと思ひましたに、あなたはいつも買物がお上手、
 新しいと見せて、雌雄ども生々して居ります。これならば立
 派な歳暮、ほんにこれも御出世の糸口すぐ書生にもたして
 やりませうか。せめてこれほど世間におつくしなさるゝ義
 理の半分も私にたて、下さつたならど、なほ愚痴をこぼし
 ながら玉のやうなる手を延ばし、おのれが膝へとりあげて、
 ためつすがめて、いちくれば、あゝこれ此年暮のいそがしい

のに、何をぐずぐずすると鸚鵡返しにとけても解けぬ夫の
 口振り、かしてまりましたとうはべはふとなしく、つと起ち
 あがりて、局長の所へとて一人の書生にわたせば、木綿の兵
 兒、帯しめ直し、烏打帽戴きて、籠を片手にいそぐと翼なく
 いて局長の家に飛びぬ。

今の世に借金なきは働なき人と、相場のみまれる官員社會
 の數にもれず果敢なきつるをたよりに奏任一等までとび
 あがりたれど、ぶつそうなる世の中は、いつ地震がするかも
 知れず、上への心配、下への氣兼に年中、心のやすまるひまも
 ないに、年の暮になつて、憂きつらさはまたひとときは、金貸に
 はせめられて、最はや書き換へも出來ぬ仕儀、さりとして正月

の用意も入れば、歳暮もかくらねばならず、聞けば澤村さまから葡萄酒を下されたどや。あのくらの御世話になつた其の上に、御念の入つた下されもの。何か上げずばなるまいが、あゝ、何を云ふても先に立つものは金と、位は高く、職は重く、門構はいかめしく、出入に威勢よく二人引を驅れど、裏に廻れば火の車、憐を催す内證話耳にしながら、書生の手より主人の前にぬつと出づれば、俄かに愁の眉をひらき、これはいくよい贈物、幸じや御苦勞ながら、此を持參して、澤村さまへつひと走りいてくれよとて、出しやりてのちは、いめて氣がつき、今のは誰れからの贈りもので有つたか、問へば、さうおつしやると、面目ない名札がついて居ました、が、

知らず、くもみやぶつてしまひました。あなたどういたしませうと、夫婦がさゝやく言葉を笑止ながらも跡にして、外面に出る間もなく、またも澤村とやら云ふ人の前に出だされぬ。日頃一物も腹に入らずして、目も廻らむばかりに、覺ゆる我等の身、今度は籠をひらくかと、喜びし甲斐もなさけなや、主人は唯眺めたばかり、直に名札を取換へて、車を舊藩主の邸へとばし、式臺にぬかづきて、歳暮の寸志、ひとへに御取成しを願ひ奉る。いづれ來春ゆるりとまかりでるでござりませうと、舊恩を忘れざる見せかけは殊勝なれども、あはれや品物は主人公の目には入らず、家令が横取りしていち早く、あやしき女の許に贈りけるほどに、大晦日も過ぎて、四方

の景色もあら玉の年たちかへり下戸は雑煮、上戸は酒、しかも屠蘇のはいらぬのをと、祝は外所にして、己がじゝ興じささめく世の有様に引きかへて、我等はなほも籠中の楚囚、腹は益へり、氣も遠くなり、命もはや二三日とはつゝかぬと思ふ、矢先、主の女は、我等を取り出して、これはいゝ鴨、あの人と、一つ鍋で煮てたべたら、さそおいしからうにと言ひつゝ、籠にはさまれたる名札を引き出して、あのいやらしい禿頭がとすたゝにひきさき、小形なる自分の名刺を添へて、勿體なくも母親を戀の飛脚われは、御年玉と名目かはりて、お山役者の手に渡りけるが、これも籠をひらかんとはせず、籠をかゝへて華主の屋敷へ伺候し、あけましてお目出とうご

さります。どうぞ相變りませず御最負を、此は輕少ながら御年玉のしるしまでにと差出せば、取次の書生は商人と見て取り、ひそかに眉をひそめながら、待てくれよとて、歸しやらず、禮もそこゝにして、籠を主人の前に持ち行きけるは、曾てある商人の鼻うかとうけとりて、主人の目玉喰ひたるに懲りたる仕打にや、貰つてもよいとの主人詞に、書生よろこびて去りたるのち、其物越しから、瓜はづれまで、能く似た事と怪しみてつらゝ見るに、羽二重の羽織は、紬地とかはり、高帽子も二重外套もなければ、どもしかに見覚えのある金縁の目金に、八字の髯は、じめに我を買ひたる人と紛ふよし、更にあらざりける。

笑止や人間の眼力鈍くかくとは絶えて知る由もなく細君に見せてこれ見や何とよい鴨ではないかと云へばほんに生々していつぞや買った鴨によく似て居ります。どれ今晚の御酒の肴に早速料理と庖丁にて結べる繩を切りはなし、蓋を開いて手をかくるとしや遅しと飛び上りて見れども出づる路なければ思ひつきたる即座の妙計呆れ果てたる。細君の顔を目がけて飛びかればあつといひつゝ顔をそむけ障子を明けてかけ出る。われ等そのあとに従ひてひらりと高く屋根へ上ればあるじ夫婦は半狂亂にげたく口惜しや書生も来い女も来い鳥を捕ふる工夫はないかと驚きさわぐ主人夫婦足下より鳥がたつたとは此時よりぞ云

ひばしめける。やがて家中一同出で来りて火箸をなげたり物干竿をふりまはしたりあれよくとばかりにてあわてふためくほどにお前があまりあわて過ぎたから鳥をにがしたと主人の男うらみ云へばあのやうに飛びつかれてどうして周章られずに居られませう。あなたはまた私を助けやうともなさらず平氣で見られてほんに思ふほどにもない不人情な御方と。またも夫婦喧嘩はじめけるに可笑しくもまた氣の毒にて見すて去るに忍びざれども我等も命が惜しければ御苦勞至極と一禮そこゝ命助かりしと思へば衰へし體もにはかに威勢づき八重の潮路を風に送られて歸へるも嬉しき故郷の海の上星を洗ふ水音に枕は安

からねども浮世の中をわたり比べてはさすがに阿波の鳴門に風波もなしと古人の述懐げにや人間は馬鹿なもの人間を籠絡することは我等風情にても何の苦もなき事ぞかし。さるにてもむかし彦根婆とあだ名されたる老婆が時代おくれの頑固なる意見を吐きしより彦根を云ふとの諺起りけるがのるけ半分に下らぬこといふを人も聞きなば、今よりは鴨談義と云ふいやな名をつけらるゝかも知れず。ないしよ。

黄菊白菊終

明治三十一年十一月廿九日印刷

(黄菊白菊)

明治三十一年十二月二日發行

定價金貳拾五錢

明治三十八年四月廿五日十八版發行

作 者 大町 芳 衛

發 行 者 大橋 新太郎



印 刷 者 水谷 景長

印 刷 所 博文館印刷所

發 兌 元

東京日本橋區本町三丁目

博文館

(總合照日月行發及刷印)

文學士 大町桂月君著

大絃小絃

全一冊紙皮上綴 正價參拾錢
小判 四二〇頁 郵稅六錢

大絃急雨の如く、小絃私語の如しとは、獨り琵琶の聲のみならんや、此書收むる所の桂月先生の文、議論に、記事に、叙事に、才氣潑刺筆力縱横、或は莊重雄大、或は輕妙自在、觀察も亦奇警にして銳利、以て普通文の模範とすべく、以て作文の指南とすべく、天地間、實に此痛快の文なかるべからず。

文學士 鹽井雨江君著

美文韻文 暗香疎影

全一冊紙皮上綴 正價貳拾五錢
小判 三五四頁 郵稅六錢

雨江先生の美文や韻文や温籍にして流麗情熱溢れ氣韻自から高く恰もこれ寒梅一樹影清淺の水に落ち暗香黄昏の月に浮動す殊に其聲調なだらかにして盤上珠を轉する如きは實に方今詩壇獨得の長技なり天下の讀書家願くは一本を備へて優美清麗なる詞藻を味はれよ。

大和田建樹君著

散文韻文 深山櫻

全一冊紙皮上綴 正價四拾錢
小判 七〇二頁 郵稅六錢

著者大和田先生が文學に深く措辭に妙なるは世既に定評あり、今此の書は新作の散文韻文二百二十餘篇を輯めたる者、一たび之を繙かば、櫻の山に分入りて清香衣襟に滿つる如く、讀者をして、手を放つ能はざらしむる妙あるべし。

鐵幹 與謝野寛君著 (新刊)

美文、新體詩、小説 うもれ木

全一冊紙皮上綴 正價貳拾五錢
小判 二六八頁 郵稅四錢

本書收むる所短歌六篇、長詩十三篇、小説三編、美文二編、著者が奇抜の才到る所に可ならざる莫し。著者少年にして氣を負ひ逆境に處して志を立つ、本書は又側面より見たる著者半生の理想也、閱歷也。

文學士 土井晚翠君著

天地有情

全一冊洋布上綴 正價貳拾五錢
小判 二三〇頁 郵稅四 錢

峨々の山、洋々の水、以て晚翠君の詩を評すべし。此集君が今日迄の吟哦を録して、こゝに美麗の冊子を成す。新體詩中別に一旗幟を樹立するもの、詞華爛熳、誠に明治詩壇の新光輝たるに背かず。請ふ愛讀を賜へ。

大和田建樹君著

散文 韻文 雪 月 花

全一冊紙皮上綴 正價參拾五錢
小判 六二六頁 郵稅六 錢

其文は清楚婉麗、趣味掬すべく、其歌は、優雅流滑、奇想天外より來りて、句々風を生じ、言々花を降らすものは、大和田先生の筆となす、此編收むる所、近作無慮二百篇、蓋し落寞振はざる今日の文學界中の旗鼓たるものは、此書を措きて他に何かある。

